

平成2年度農業基盤整備事業地域

# 埋蔵文化財発掘調査報告

— 第2分冊 —

1991・3

三重県教育委員会  
三重県埋蔵文化財センター

## 序 文

農業基盤整備事業は、ほ場整備事業のみならず各種の農道整備事業等も含めて多岐にわたっております。また、ここ数年は事業対象地が平野部から山間部へとかなり移行してきた結果、特にほ場整備事業に関してはすでにその最盛期を越えたと言われてきている状況です。

しかしながら、このような開発事業に伴って新たに発見される埋蔵文化財は、必ずしもその開発事業の量の多寡には関係がなく、あくまでも各々の土地の属性によるものですから、事業量に比例して減少していく性格のものではありません。

埋蔵文化財は現状のままで保存するのが大前提で、調査さえすれば破壊してもよいというわけでは本来はないのですが、種々の公共事業を進めていくこともわれわれの社会生活にとっては必要なことでもあります。そのために毎年関係機関のあいだで協議を重ねながら工法上どうしても破壊が避けられないところに限っては発掘調査を実施して記録保存を図るという方法が定着してきています。

十年前と今年度とを比較してみると、総事業面積は約2%増でそれほど極端な増加ではありませんが、事業計画地内において確認された埋蔵文化財は、遺跡面積にしても、実際に調査を実施した面積にしても、2倍に増加しました。様々な問題を抱えながらも、相互の事業が円滑に進められるように最大限の努力を重ねてきている現状です。

以下にご報告する発掘調査結果はいずれも再三にわたる協議の結果、どうしても現状保存が不可能であった遺跡の記録であり、願わくばこの成果が広く歴史学習の場において活用されますことを切望致します。

最後に、文化財保護法の精神を尊重され、協議から発掘調査に至るまで多大のご理解とご協力をいただいた農林水産部の各関係機関の方々、また現地での調査に当たっては各々の土地改良区を始め地元のかたがたの温かいご助力を頂きましたことにたいして、末筆ながら深甚の謝意を表します。

平成3年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 中 林 昭 一

## 目 次

I 北野遺跡	.....	1
II 養村大塚遺跡	.....	31
III 中里遺跡	.....	32
IV 打田遺跡	.....	33
V 伊勢寺遺跡	.....	53

## 例 言

1. 本書は平成2年度農業基盤整備事業地域内における埋蔵文化財の発掘調査結果をまとめたものである。
2. 調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を得て県教育委員会が、他は県農林水産部の負担による。
3. 調査体制は下記によった。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター
調査協力	三重県農林水産部農村整備課、耕地課、畜産課、 各農林事務所 各土地改良区 各市町村教育委員会 財団法人三重県農業開発公社
4. 各遺跡の整理・報文執筆作成は基本的に調査担当者が当たった。文末にその執筆者名を記した。
5. 本書で用いた遺構表示略記号は下記により、図面における方位は特に断らない限りは磁北である。

S B	: 竪穴住居・掘立柱建物、	S D	: 溝・堀、	S E	: 井戸、	S K	: 土坑
S F	: 焼成坑、	S A	: 柱列・柵・塀、	S X	: 墓・その他		
6. 本書に使用した航空写真（一部）、事業計画図面は農林水産部の提供による。
7. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。



伊勢寺遺跡

第30図 調査区位置図(1:4,000) ……………53  
 第31図 A～E区遺構平面図(1:200) ……55～56  
 第32図 F～N区遺構平面図(1:200) ……57～58  
 第33図 C区竪穴住居SB1 竈跡実測図(1:20)  
 ……………60  
 第34図 N区土坑SK1 遺構実測図(1:40) ……60

第35図 M区井戸SE1 遺構実測図(1:40) ……61  
 第36図 M区井戸SE2 遺構実測図(1:60) ……61  
 第37図 M区溝状遺構SD1 実測図(1:120) ……61  
 第38図 遺物実測図(1)(1:4) ……………63  
 第39図 遺物実測図(2)(1:4) ……………64  
 第40図 遺物実測図(3)(1:3) ……………65  
 第41図 M区井戸SE2 下層出土呪符実測図(1:1)  
 ……………77

表 目 次

北野遺跡

第1表 土器焼成坑検出遺跡一覧 ……………12  
 第2表 掘建柱建物一覧表 ……………12  
 第3表 北野遺跡土器焼成坑一覧(1) ……………13  
 第4表 北野遺跡土器焼成坑一覧(2) ……………14  
 第5表 竪穴住居一覧 ……………15  
 第6表 SF13 磁化測定結果 ……………24  
 第7表 SF23 磁化測定結果 ……………24  
 第8表 SF25 磁化測定結果 ……………24  
 第9表 SF27 磁化測定結果 ……………24  
 第10表 SF32 磁化測定結果 ……………24  
 第11表 SF39 磁化測定結果 ……………24  
 第12表 SF60 磁化測定結果 ……………25

第13表 SF63 磁化測定結果 ……………25  
 第14表 SF70 磁化測定結果 ……………25  
 第15表 SF80 磁化測定結果 ……………25  
 第16表 SF83 磁化測定結果 ……………25  
 第17表 SF105 磁化測定結果 ……………25  
 第18表 SF116 磁化測定結果 ……………26  
 第19表 北野遺跡考古地磁気測定結果 ……………26

打田遺跡

第20表 建物遺構一覧表 ……………39  
 第21表 遺物観察表(1) ……………43  
 第22表 遺物観察表(2) ……………45

伊勢寺遺跡

第23表 調査区一覧表 ……………59

# 多気郡明和町蓑村 北野遺跡

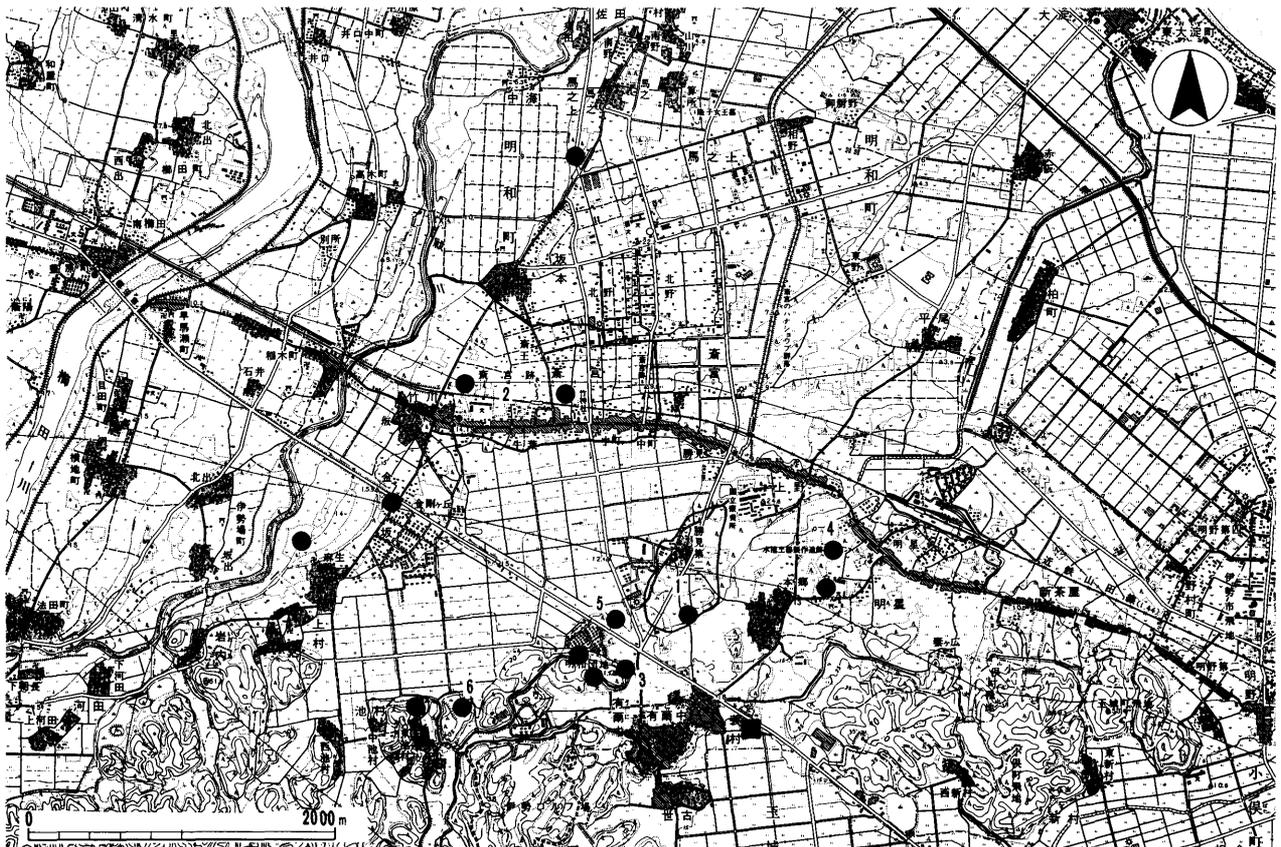
## 1. 位置と環境

紀伊山地の高見山に源を発し東微北流する櫛田川は、南部伊勢平野を形成する県下有数の大川である。JR紀勢本線の鉄橋付近より下流域の様相を呈するが、現在は肥沃な穀物地帯となっている。鉄橋よりやや下流において本流と祓川とが分岐しているが、祓川右岸には南方に広がる標高40~50m前後のいわゆる玉城丘陵<sup>①</sup>に続いて、明野原面と呼ばれる中位段丘面が広がっている。標高10m前後のこの段丘面は、段丘推積層を刻む浅い谷によっていくつかの地域に分けられる。このうち、北野遺跡(1)は笹笛川とへべら川に挟まれ、南南西から北北東へのびる幅約500m、長さ約2,000mの段丘上に立地する。遺跡はその中央部に東西540m、南北920mにわたって遺物の散布が見られる広大なものである。

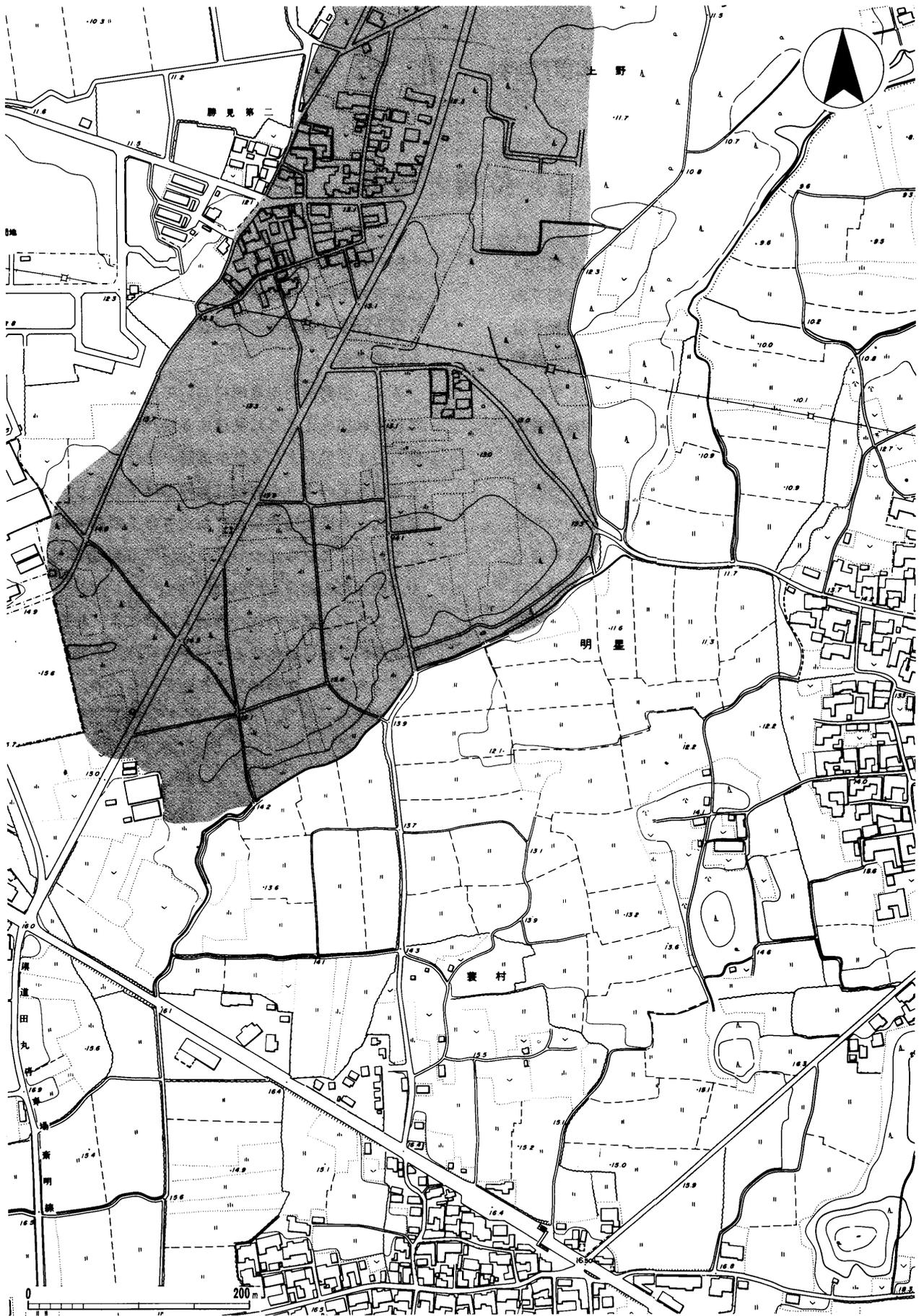
今回の調査地は北野遺跡の南端部に位置し、標高14m前後の南向きの緩斜面である。現況は畑地である。行政上は多気郡明和町大字蓑村字東へべら・西へべらに属する。

さて、伊勢湾西岸地域においては、大川が平野部に流れ出るところに発達する扇状地や、低丘陵地帯、および段丘上に多数の遺跡が確認されている。当地域もそのような遺跡立地の環境下にあり、旧石器時代から歴史時代全般にわたり多くの遺跡が分布している。これらについては、『明和町遺跡地図』<sup>②</sup>や『明和町の遺跡』<sup>③</sup>などに詳しい。

ところで、歴史時代の当地を語るとき、北野遺跡の北西約2kmに所在する国史跡斎宮跡(2)を忘れることはできない。伊勢神宮の祭祀を行うため、歴代天



第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000) ●印は土器焼成坑が検出された遺跡、■印は現在の神宮土器調整所



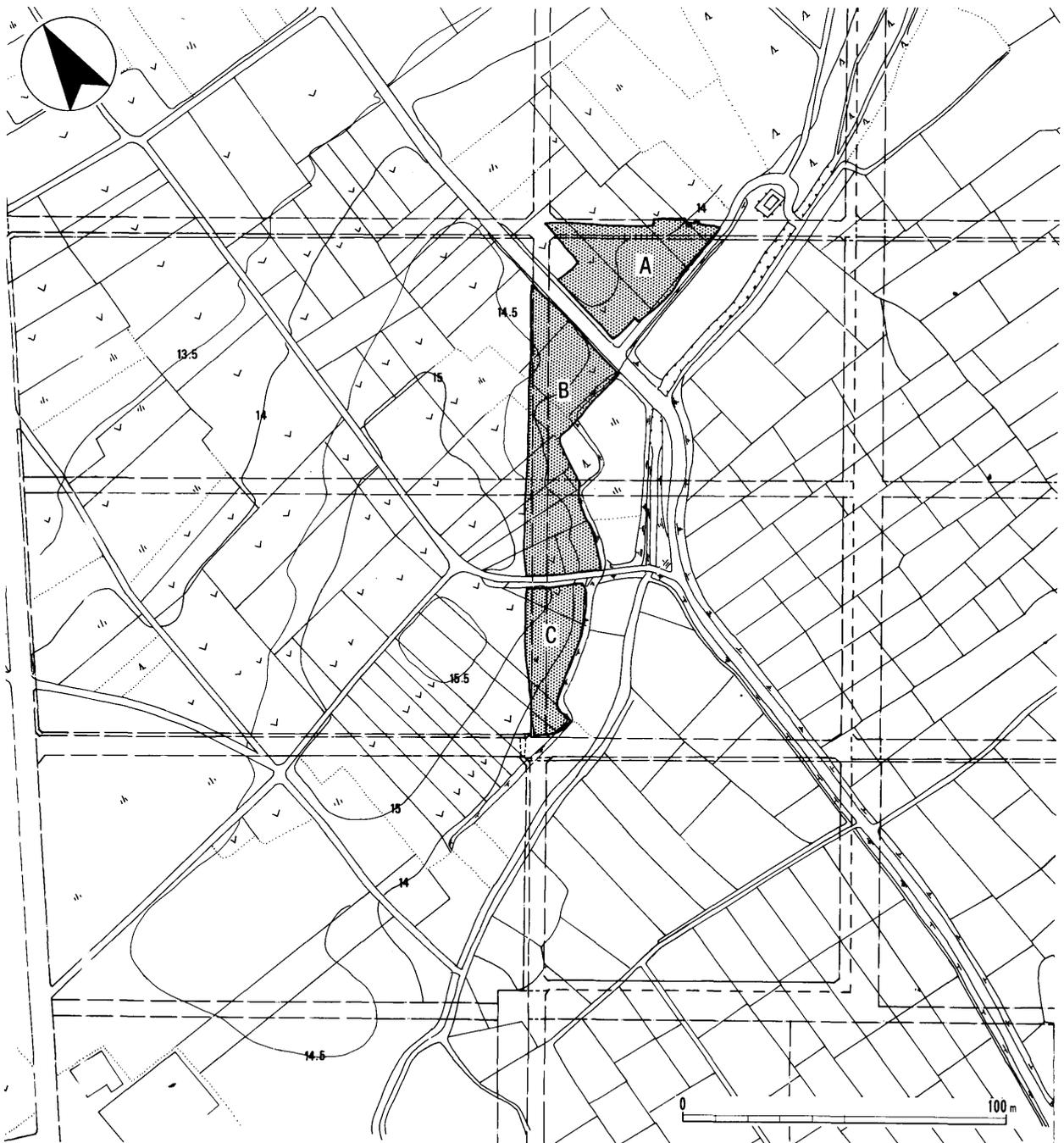
第2図 遺跡地形図 (1 : 5,000)

皇の御杖代として都からこの地に遣わされた未婚の皇女齋王の宮殿と、それを運営する齋宮僚という官衙として、飛鳥から南北朝時代まで存続したものである。そして周辺には齋宮跡と関連する多くの遺跡がある。なかでも注目されるのが、齋宮に多量の土師器を焼成して供給したと考えられる遺跡の存在である。

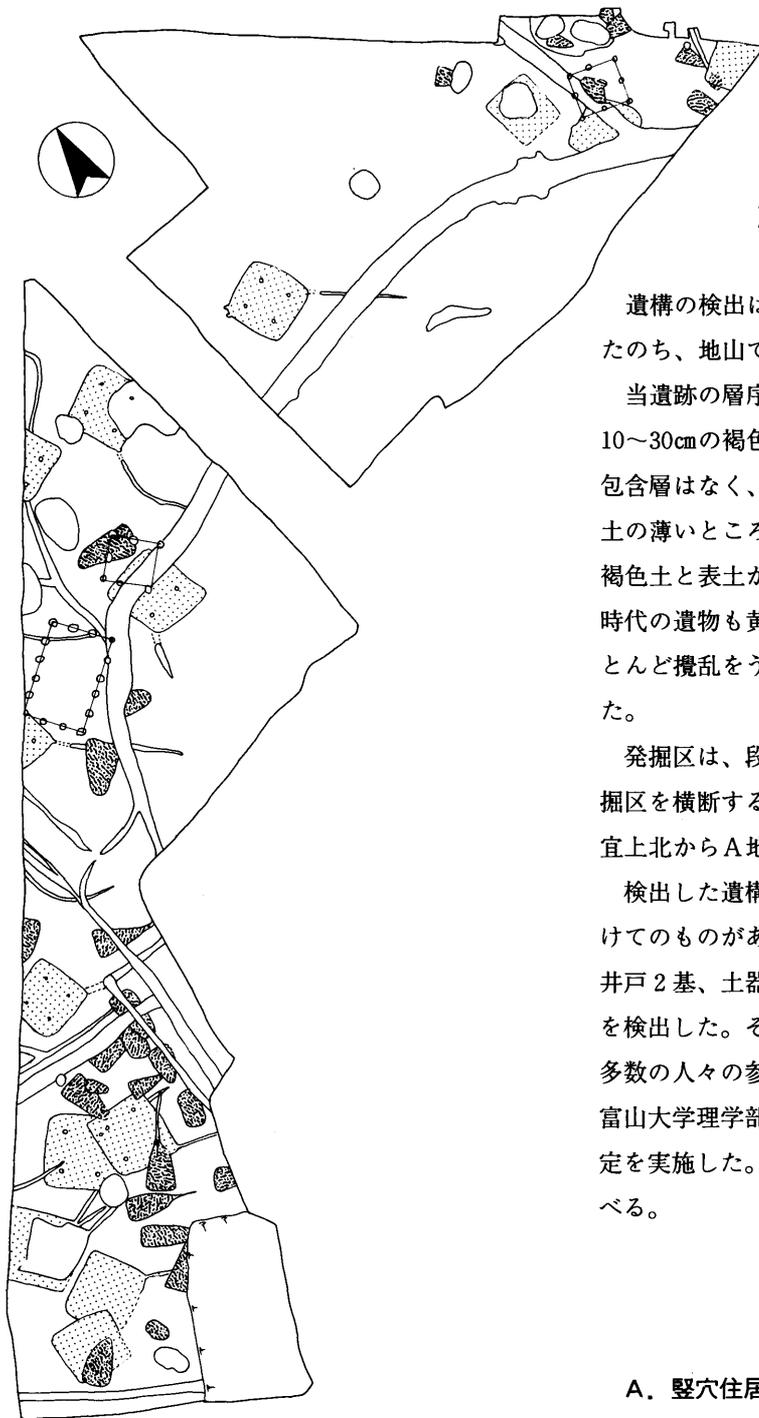
1972（昭和47）年には発シA遺跡（3）の調査が行われ、奈良時代の土器焼成坑2基、掘立柱建物<sup>㊦</sup>等が検出されたのはじまり、齋宮跡周辺で土器焼成坑の発見が相次いだ。

1976（昭和51）年には明星の水池遺跡（4）が調査され、3群16基の焼成坑と粘土溜の土坑、掘立柱建物<sup>㊦</sup>等が検出され、その重要性から国史跡に指定された。1991（平成3）年3月末現在で16遺跡226基の土器焼成坑が検出されている。

水池遺跡は今回の調査地の北東約1,000m、20基の焼成坑を検出した堀田遺跡（5）が南西約500mに、最多の焼成坑100基を検出した戸峰遺跡群（6）が南西約1,500mに、発シA～C遺跡が南西約600mに位置している。



第3図 発掘区位置図（1：2,000）



## 2. 調査の経過

遺構の検出は、バックホーによって表土を除去したのち、地山である黄褐色土上面でおこなった。

当遺跡の層序は単純で、黄褐色土（地山）を厚さ10～30cmの褐色土（耕土）が覆うだけである。遺物包含層はなく、表土中に多量の遺物が含まれる。表土の薄いところでは、耕作により削られた地山の黄褐色土と表土が混じる層が存在する。なお、旧石器時代の遺物も黄褐色土の直上に包含するらしく、ほとんど攪乱をうけ後世の遺構中から若干の出土があった。

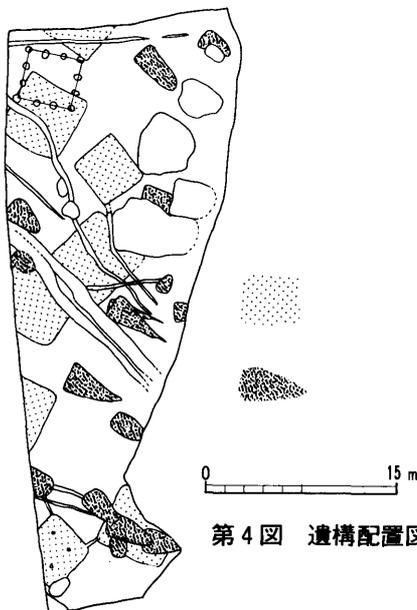
発掘区は、段丘端の緩傾斜地で南北に細長く、発掘区を横断する道路によって3地区に分けられ、便宜上北からA地区・B地区・C地区と呼称した。

検出した遺構には弥生時代後期から鎌倉時代にかけてのものがある。竪穴住居25棟、掘立柱建物5棟、井戸2基、土器焼成坑46基、土坑、溝、ピットなどを検出した。そして現地説明会を7月7日に実施し、多数の人々の参加を得た。また、7月16～17日には富山大学理学部の広岡公夫教授による熱残留磁気測定を実施した。以下に遺構、遺物について概要を述べる。

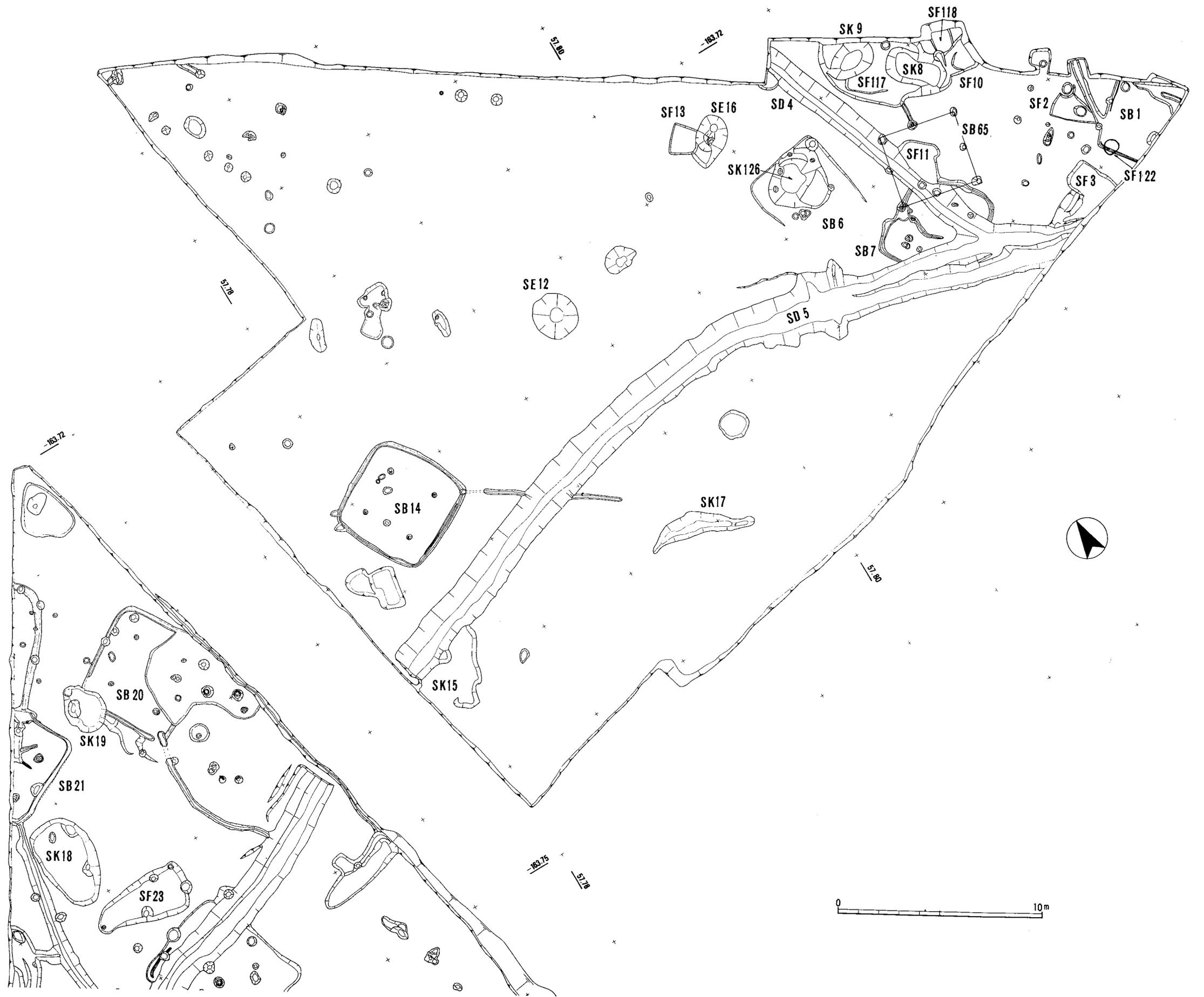
## 3. 遺構

### A. 竪穴住居

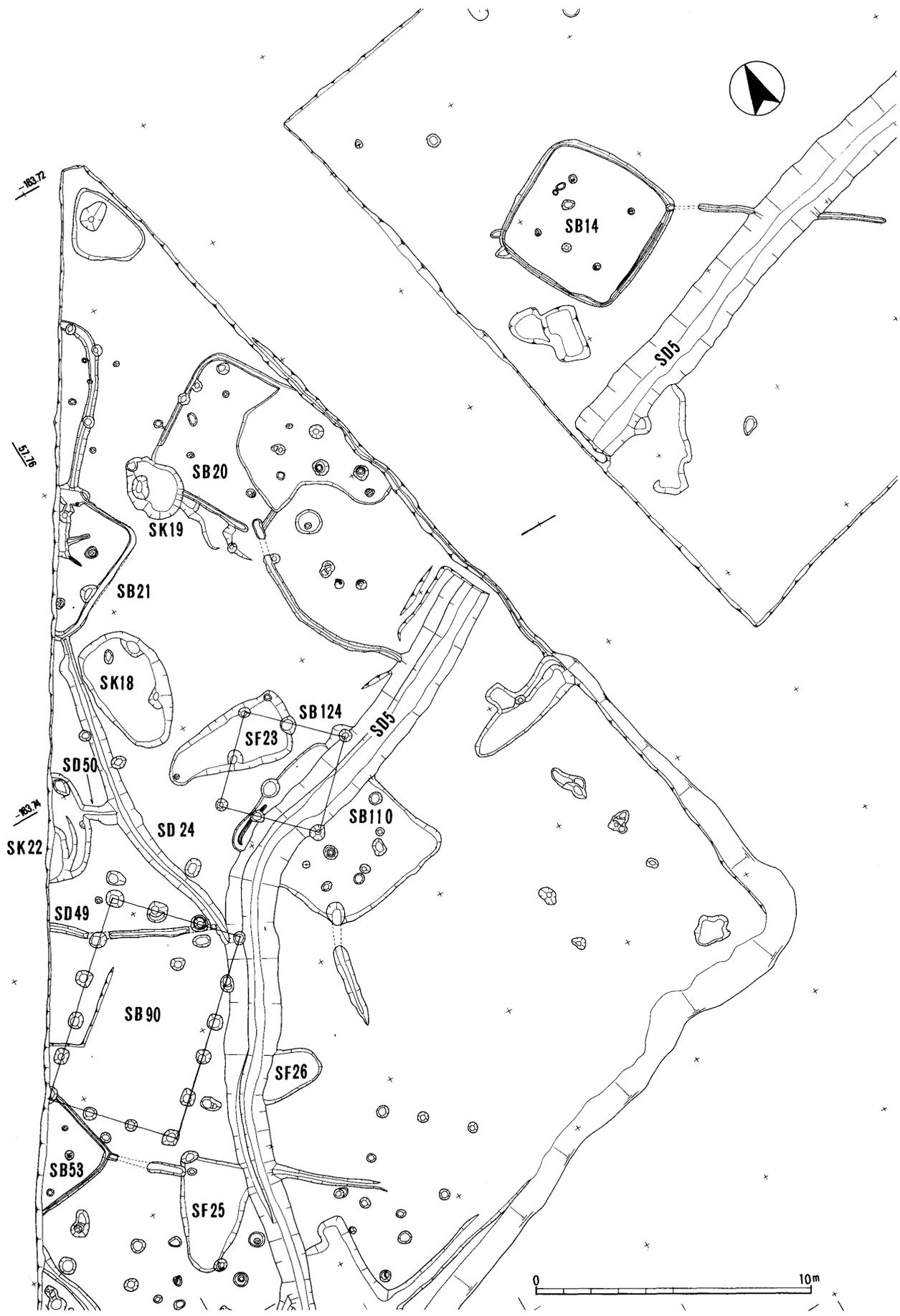
検出した竪穴住居は全部で25棟を数える。また発掘区以外にあって、排水溝だけが検出されたものもあり、発掘区外のものも含めれば総数はさらに増えることになる。出土遺物から所属時期の判るものでは、弥生時代後期のもの、古墳時代前期および後期のもの、飛鳥～奈良時代のものがある。このうちの6棟（SB14・20・28・53・99・110）には暗渠排水溝が良好な状態で遺存していた。また、これ以外にも弥生時代後期から古墳時代にかけての竪穴住居にも排水溝が認められた。柱穴は4本柱が一般的で、ほとんどの住居跡に認められた。また、周溝をもつものも多く、なかにはSB21・37・75・87などのように壁面が周溝上にオーバーバンクするような例も見ら



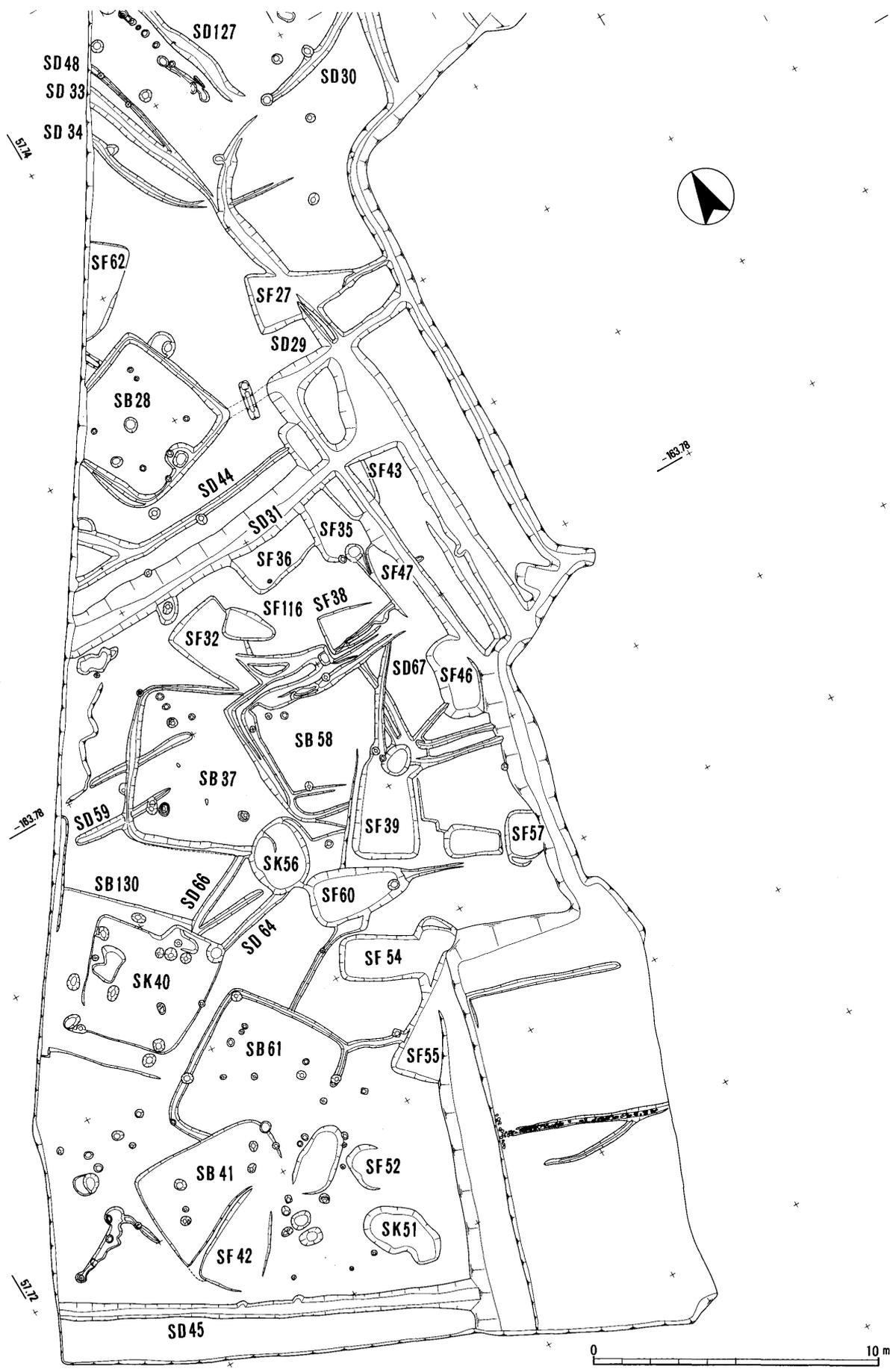
第4図 遺構配置図（1：600）



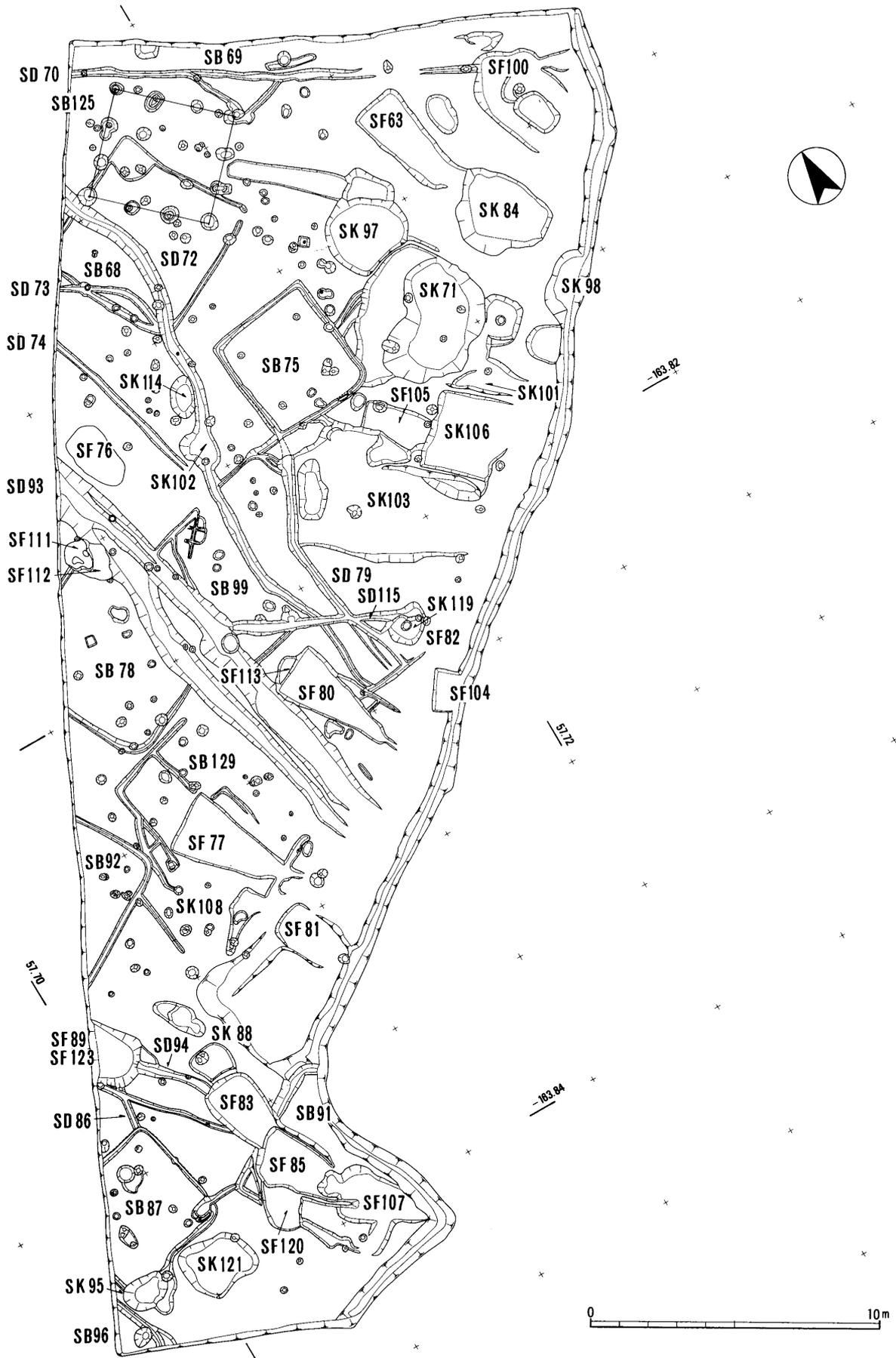
第5图 A地区遺構平面図 (1:200)



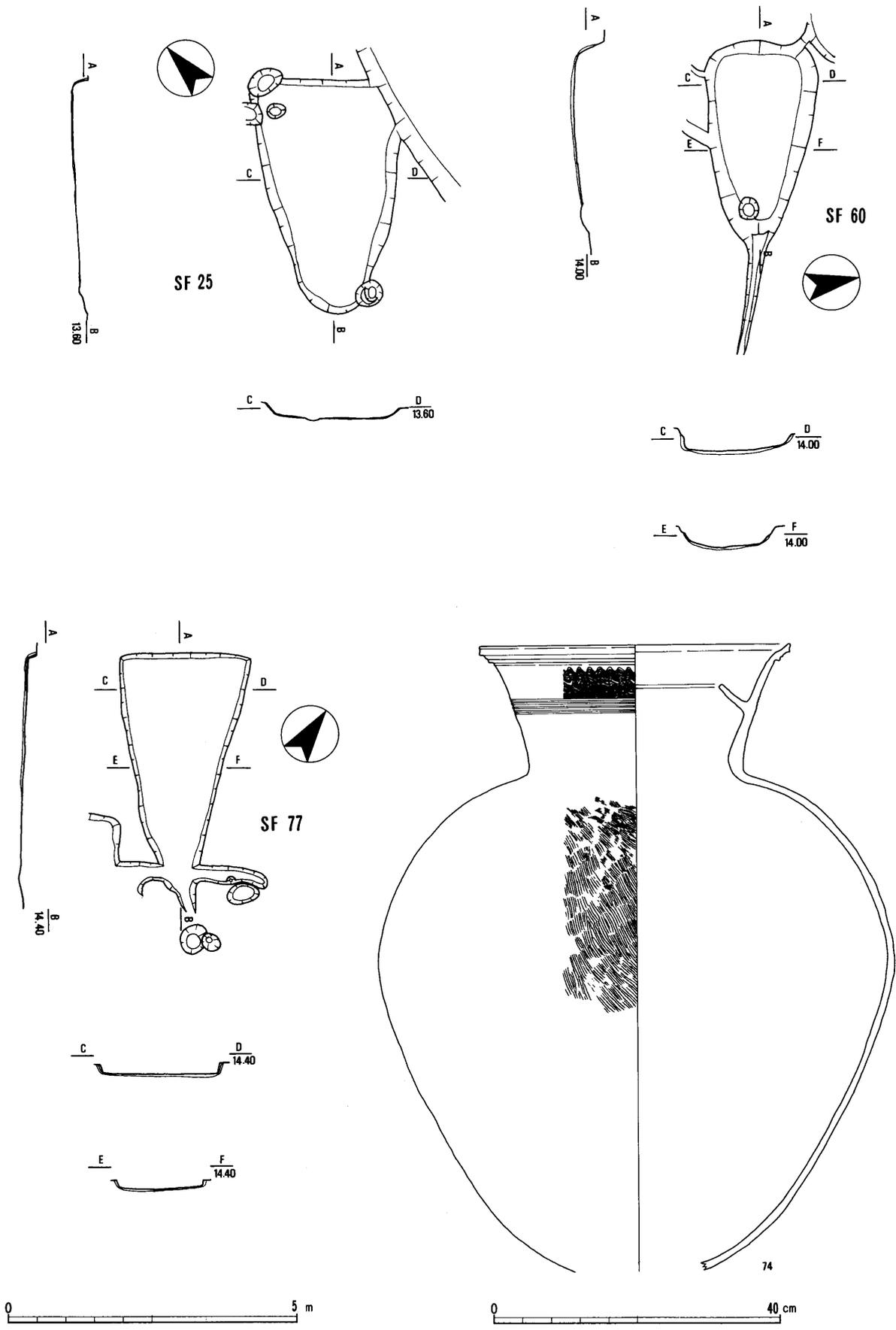
第6图 B地区北半遺構平面図(1:200)



第7図 B地区南半遺構平面図(1:200)



第 8 图 C 地区遺構平面図 (1 : 200)



第9图 土器烧成坑实测图(1:100) 遗物实测图(1:8)

れる。

S B28からは完形品を含め多数の土器が出土した。また、S B75からも多くの土器が出土したが、この住居跡の床面には炭化材や焼土が多く残っていたほか、西壁の一部がよく焼けていた。しかし焼失家屋とは断定しがたい。その他、S K40・128などは住居跡の掘形が埋まらないうちに土器などを捨てる廃棄土坑に転用されており、多量の土器破片の出土をみた。

S K 8・9は平面形こそ不定形であるが、重複した竪穴住居跡を廃棄土坑に転用したものであろう。検出された竪穴住居の一覧を第5表に示す。

### B. 掘立柱建物

全部で5棟検出された。このうち、S B90は3間×4間の東西棟である。柱穴の平面形は不揃いながら、一辺が60～70cmほどの隅丸方形もしくは円形に近いものである。出土遺物は土師器の小片しかなく、時期決定は困難であるが概ね飛鳥から奈良時代と考えられる。またすぐ西にも建物が想定できそうなピットがあるが、建物としてまとまらなかった。

このほか、A地区の東端近くで検出されたS B65は、ちょうどS F11と重複する。S F11の覆屋的なものと考えるかどうかが問題である。

第2表に掘立柱建物の一覧を示す。

### C. 土器焼成坑

全部で46基検出された。第1表に一覧を示す。

耕作等による削平のため、床面の一部しか遺存していないものなど形態の不明なものもあるが、基本的には隅丸二等辺三角形の平面形態をもつ。規模は長さ1.1～4.5m、幅1.1～2.35m、深さは最深のもので0.55mであった。

これらの焼成坑は発掘区のはほぼ全域で検出されたが、A・B地区間の道路付近には見られず、A地区東端とB・C地区の二群にわけられる。この二群間に時期差はみられないように思われる。ところで、個々の焼成坑についてみると第3表のように、平面形では隅が角ばった二等辺三角形(A)と、隅丸二等辺三角形(B)、および水滴形(C)に分類できる。また、床面の形状では平坦なもの(A)、船底のように床面が湾曲するもの(B)、(A)(B)の中間形のもの(C)がある。そして、壁面の立ち

上がり方には、直立するもの(A)と、直に近いがやや外へ傾斜するもの(B)、ゆるやかに外へ傾斜するもの(C)がある。

このような点に着目すると、平面形が(A)つまり隅が角ばる焼成坑は床面が平坦(A)で、壁は直立(A)する《タイプI》と、平面形が水滴形(C)のものは底面が船底形(C)で壁がゆるやかに外傾(C)する《タイプII》、およびその中間形といえるもの《タイプIII》に大別できる。タイプIにあたるのはS F 2、13、27、32、38、77、80など、タイプIIにあたるのはS F 23、39、54、60など、タイプIIIにあたるのがS F 25、36、42、85、107、120などである。ただし中間的なものもあって、厳密な区分はできない。

火熱を受けて橙～暗赤色に変化している部分についてみると、壁面および底面はよく焼けているのに対し、二等辺三角形の頂点(先端)部分については壁面が明確に残っているものはなく、攪乱されたような状態で、しかもほとんど焼けていないという事が指摘できる。壁や底での焼土の厚さは5～6cmを測るものもあり、度重なる焼成のためかレンガのように固化している。本遺跡でも床面が2枚遺存するものを確認したほか、戸峰遺跡<sup>⑧</sup>等でも確認されており、複数回の焼成が行われたことは確実である。二等辺三角形の底辺部分において、底面から壁面の屈曲部は火熱がおよびにくいいためか焼土の厚さはやや薄い。特に両コーナー下部分はほとんど焼けていないものが多い。このようなことから、焼成坑内で最もよく焼けているのは二等辺三角形の底辺側の半分ほどの部分であるといえよう。

そのほか形態の特長として、二等辺三角形の頂点から伸びる排水溝様の小溝をもつものがある。S F 27、38、60、77、80、113にみられるが、この小溝の機能や焼成坑との関連については不明である。

また、緩傾斜地につくられる焼成坑は三角形の頂点を標高の低い方へ向け、長軸が等高線に直交するものが一般的であったが、本遺跡では長軸が等高線に平行するものもみられる。(S F 23、25、39、43、47、)そしてこれらは、タイプIIないしIIに近いタイプIIIの焼成坑であることがわかる。

さて、出土遺物についてみると、本遺跡の焼成坑

から出土した遺物のほとんどが土師器で、しかもそのほとんどを甕がしめている。そしてごく一部に椀、高坏、皿、土錘等が含まれる。また特殊な器種として筒形土器などがある。須恵器は混入品としてごくまれにしか含まれない。

出土状況を見ると、焼成時に割れたりした破片や不良品を一括廃棄したと考えられるもの（SF25、55、85）があり、これらからは多量の破片が出土した。またSF60のように第一次床面直上から、多量の炭化物とともに二次焼成をうけた土師器甕の破片が多量に出土したのものもある。SF63の埋土中からは多量の白色粘土が出土している。

一方、SF27の遺物出土状況は他の焼成坑とは様相を異にする。すなわち土師器の甕がうつ伏せに、つまみのついた蓋（薬壺の蓋）が上向きの状態で、床面より若干浮いて出土している。その性格は不明ながら、葬送を想起させるありかたである。

出土遺物のほとんどが土師器の甕であるため時期決定が難しく、おおまかな時代しか把握できないが、共伴の土師器椀等の形態的特徴から飛鳥～奈良時代前半を主体とし後半に下るものを含むと思われる。なお、SF105出土の須恵器坏身（1）は古墳時代後期（6世紀後半代）に上るものであるが、現段階としては混入と考えたい。

#### D. 井戸

A地区で2基検出した。いずれも円形の素掘り井戸である。SE16は焼成坑SF13を切って掘り込まれている。埋土中より須恵器台付瓶（65）、土師器高坏（64）が出土した。この井戸には底へ降りるた

遺跡名	所在地	検出数
1 北野遺跡	多気郡明和町養村 <sup>東へべら</sup> <sup>西へべら</sup>	46
2 水池土器製作遺跡	〃 〃 明星字水池	16
3 黒土遺跡	〃 〃 〃字黒土 <sup>ほか</sup>	4
4 堀田遺跡	〃 〃 有爾中字堀田	20
5 発シA遺跡	〃 〃 〃字発シ・平田	2
6 発シB遺跡	〃 〃 〃字発シ・垣場	16
7 垣場遺跡(発シC)	〃 〃 〃字垣場	6
8 戸峯遺跡群	〃 〃 池村字戸峯 <sup>ほか</sup>	100
9 大道A遺跡	〃 〃 〃字大道	2
10 川原口遺跡	〃 〃 金剛坂字川原口 <sup>ほか</sup>	2
11 金剛坂遺跡	〃 〃 〃字辰ノ口	1
12 斎宮跡	〃 〃 斎宮字御館 <sup>ほか</sup>	3

第1表 土器焼成坑検出遺跡一覧

めの足掛けと考えられるテラスが4カ所ほど確認された。SE12は上部埋土に土器片とともに多量の白色粘土が入っていた。

いずれも底面で湧水せず、井戸枠等は確認されなかった。

#### E. 土坑

SK40、126は堅穴住居の廃絶後の窪みを利用したり、さらに深く掘り込んで廃棄土坑としたものである。またSK8、9、71も明確にはし得ないものの、同様のものと考えられる。SK71を除く他の土坑SK8、9、40からは極めて多量の土器片が出土した。

その他、弥生、古墳、飛鳥、奈良時代の不定形なものがある。

#### F. 溝

A～B地区にわたって等高線に添うように幅1.4～2.0m、深さ0.5～0.9mの溝が検出された。埋土の断面の観察から2時期の溝の重複が考えられる。新しい溝SD5-aは幅1.4～1.9m、深さ0.4～0.8mほどで、古い溝SD5-bよりやや北へずれるものの、ほぼ重複して掘り込まれている。SD5-aからは鎌倉時代の土師器鍋や山茶椀が微量出土。SD5-bからは時期比定できる遺物がなく不明。しかし、須恵器片があることやSF26との切り合い関係から、古墳時代後期から飛鳥時代が考えられる。

SD34、49、59、64、66、73、74、94、115などは堅穴住居の排水溝と考えられるものである。

SD45、70はいずれも現在の農道に沿って平行に走る溝である。後世の削平のため、溝幅や深さは小さくなっているが、SD45は幅60cm、深さ20cm、S

遺跡名	所在地	検出数
13 粟垣外遺跡	〃 〃 坂本字粟垣外	2
14 落河原遺跡	四日市市西坂部	3
15 鴻之巣遺跡	名張市夏見字鴻之巣	1
16 寺山遺跡	鈴鹿市高岡町字寺山	1

遺構	規模(間)	棟方向	桁行(m)	梁行(m)
SB65	2×2	N78°W	3.8	3.6
SB90	5×3	N138°E	7.8	4.9
SB124	2×2	N45°E	3.7	3.6
SB125	3×3	N46°W	4.2	3.9

第2表 掘立柱建物一覧

表3-31 土器焼成坑一覧1

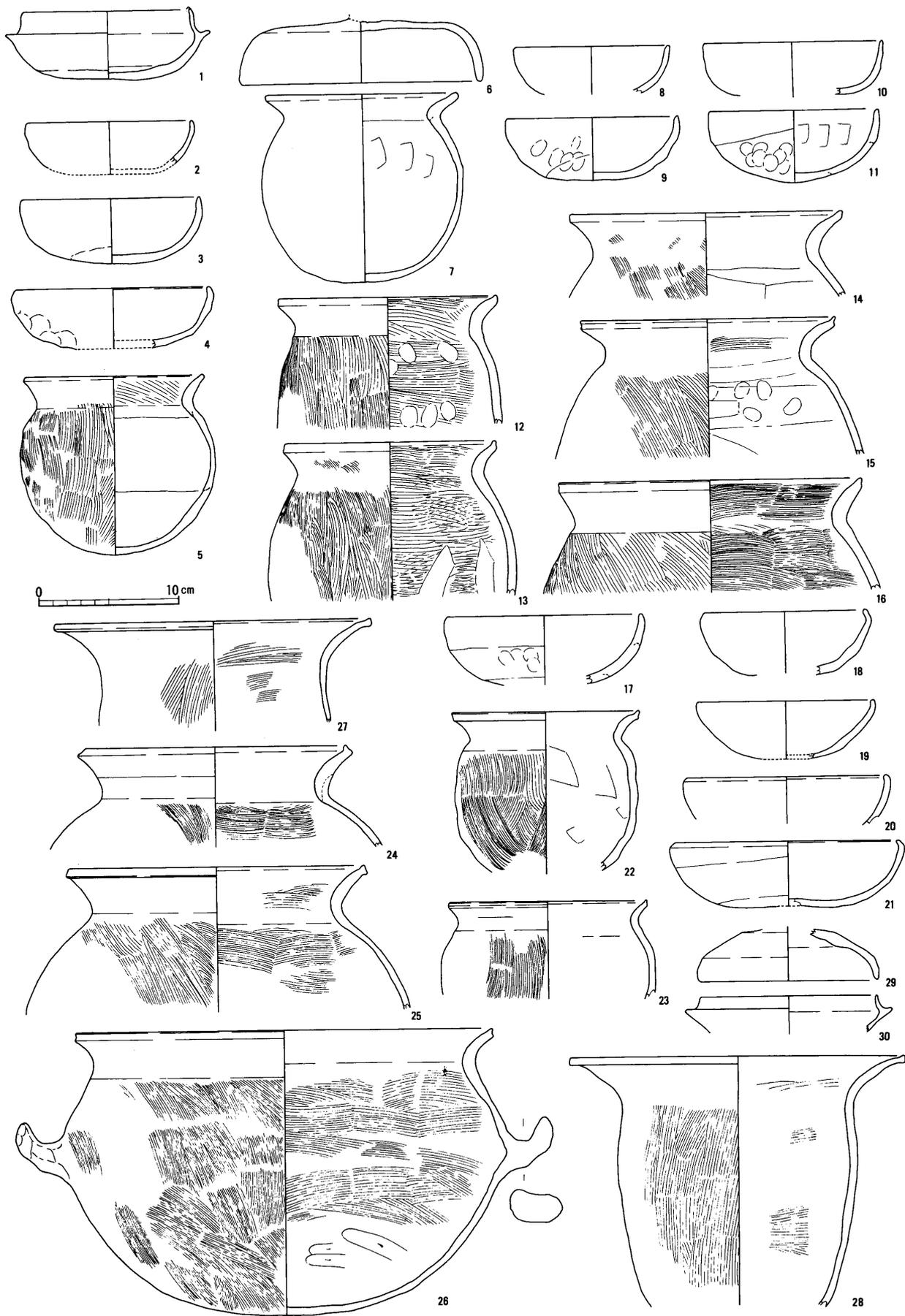
No.	地区	規模 (m)			主軸 方向	形態		排水溝	須 惠 器	出土 物						備 考						
		長	幅	深		平面	床面			壁面	椀	杯	皿	高杯	甕		土 師	器	其 他			
2	(AO)-5	1.25	1.30	0.10	N146° E	A	A	A	×													
3	(AO)-6	(2.10)	1.50	0.30	N162° E	B	A	B	-												粘土紐 (用途不明)	
10	(AN)-5	(1.50)	(1.60)	0.30	N 89° W	-	B	B	-												SF118を切る。SK8に切られる。	
11	(AM)-6	(1.75)	(1.40)	0.30	N159° W	B	C	B	-	杯蓋											SB7、SD4に切られる。	
13	(AJ)-6	(1.20)	1.50	0.30	N132° E	A	A	A	×												SE16に切られる。	
23	(BD)-15	4.50	2.35	0.50	N 82° W	B	C	B	×	杯蓋												
25	(BD)-19	4.15	2.30	0.25	N129° W	B	C	C	×	甕											SB53排水溝を切り、SD5に切られる。	
26	(BD)-18	(1.20)	(1.70)	(0.25)	N104° E	-	C	C	×	提瓶											SD5に切られる。	
27	(BD)-23	3.70	2.10	0.35	N104° E	A	A	A	○	杯身、不明											SD30に切られる。	
32	(BC)-26	(3.60)	2.25	0.30	N165° E	A	A	B	×	杯蓋、杯身、甕											SB58を切り、SF116に切られる。	
35	(BD)-25	(2.60)	(1.40)	0.30	N169° W	-	C	C	×												SF36を切り、SF43、SD31に切られる。	
36	(BD)-25	(2.90)	(1.65)	0.20	N 78° E	B	A	C	-												SF35、SD31に切られる。	
38	(BD)-26	2.40	1.45	0.15	N100° E	A	A	A	×												SB58を切る。	
39	(BE)-28	4.05	2.25	0.45	N 31° E	B	C	C	○	杯蓋、杯身											SB58を切る。	
42	(BD)-31	3.90	2.25	0.15	N 53° E	B	C	-	×												SB41切る。	
43	(BD)-24	3.75	(1.85)	0.30	N170° E	B	A	B	-												SF35を切り、SD31に切られる。	
46	(BE)-26	(2.10)	1.20	0.30	N 18° E	B	C	C	×													
47	(BE)-25	(3.00)	1.75	0.10	N170° W	-	A	-	×													
52	(BE)-31	-	-	-	-	-	-	-	-													床面の一部のみ残存
54	(BE)-29	(3.30)	1.65	0.50	N120° E	C	C	C	-													
55	(BE)-30	(3.15)	1.85	0.40	N 49° E	A	A	A														
57	(BF)-28	(1.35)	1.70	0.30	N118° W	B	A	B	-	甕												
60	(BE)-28	3.70	1.75	0.55	N103° E	C	C	C	○	器種不明												



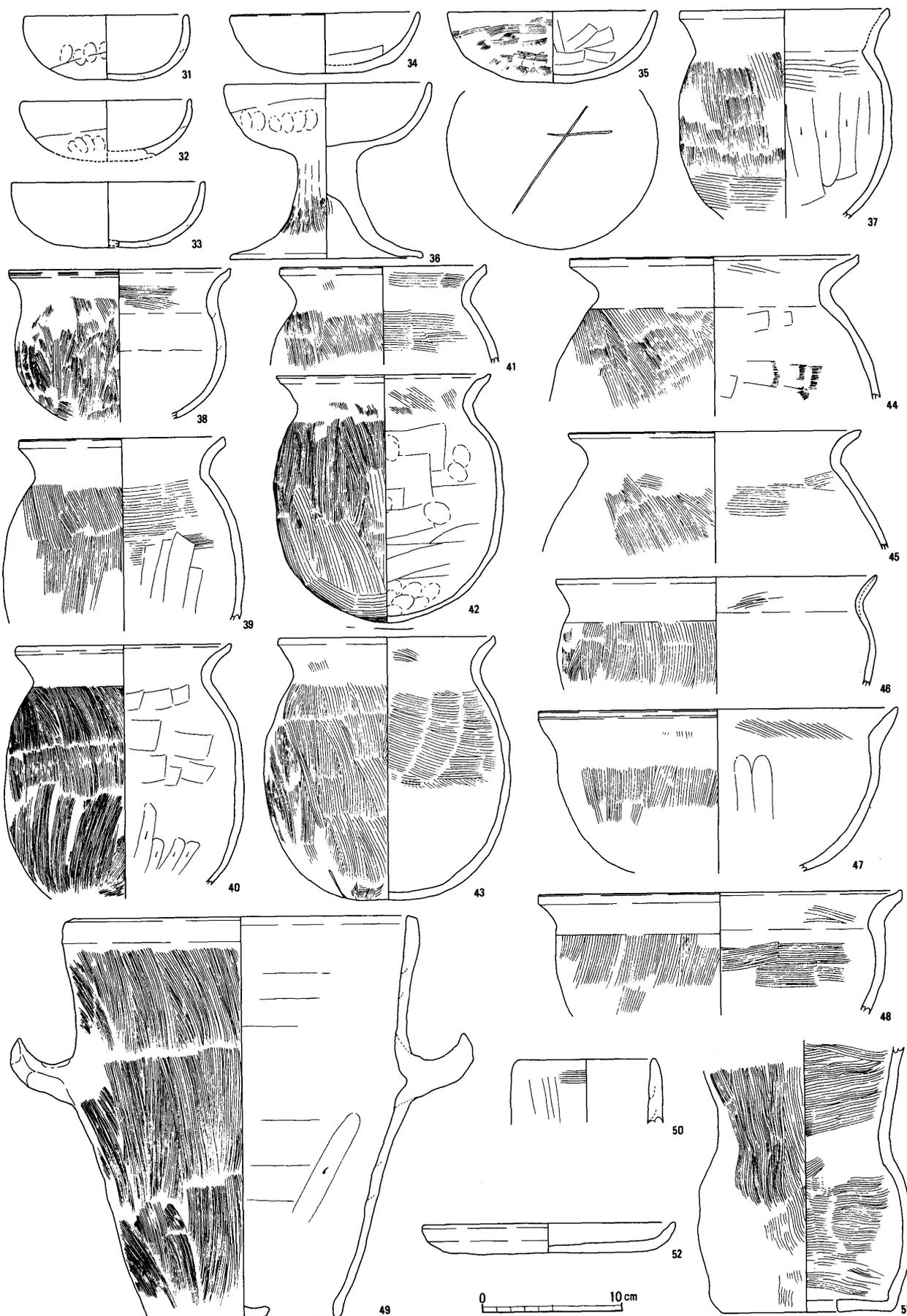
第5表 掘穴住居一覽

No.	地区	規模 (m)		主軸方向	柱穴	周溝	排水溝	時代	出土遺物	切り合い	備考
		南北	東西								
1	(A)P-5	(3.4)	(3.9)	N41° W	?	○	?	飛鳥～奈良	④甕、柄、把手	SF122に切られる	
6	(A)L-6	(3.8)	4.1	N10° W	○	×	?	?		SK128に切られる	
7	(A)M-7	4.3	4.6	N32° W	○	○	?	飛鳥～奈良	④甕 ④杯身	SF11, SD4, SD5に切られる	
14	(A)G-10	5.2	5.3	N28° W	○	○	○	弥生後期	壺(丹彩)	排水溝がSD5に切られる	暗渠排水溝の遺存良好
20	(B)D-12	4.9	5.3	N34° W	○	○	○	?			暗渠排水溝の遺存
21	(B)B-13	(3.0)	4.8	N26° W	○	○	○	弥生後期	壺、高杯、甕、台付甕、土鍔		〃
28	(B)C-24	4.8	4.9	N21° W	○	○	○	〃	壺、高杯、甕、台付甕、鉢		〃 の遺存良好
37	(B)C-27	5.8	(5.7)	N55° W	○	○	○	〃	壺、台付甕、椀	SB58, SF32, SK56に切られる	住居内中央2ヶ所に焼土
41	(B)C-31	4.5	(4.7)	N 2° W	?	×	×	古墳後期?	④ 細片	SB61を切り、SF42に切られる	
53	(B)B-19	(3.5)	(3.5)	N11° W	○	○	○	弥生後期		排水溝がSF25, SD5に切られる	暗渠排水溝の遺存良好
58	(B)D-27	5.4	5.3	N 1° W	○	○	○	古墳後期	④ 甕 ④ 甕 甕	SB37を切り、SF38, 39に切られる	北辺中央に焼土(カマド)、重複?
61	(B)D-30	5.0	5.5	N34° W	?	○	○	弥生後期?	高杯、サヌカイトフレイク	SB41に切られる	周溝のみ遺存
68	(C)C-35	5.3	5.3	N26° W	○	○	×	?		SD72に切られる	〃
69	(C)C-33	(2.8)	(2.0)	N22° W	?	○	?	?		SD70に切られる	ほとんど削平
75	(C)D-36	4.3	4.0	N6.5° W	○	○	○	古墳前期	壺、甕、台付甕、高杯、S字甕		暗渠排水溝の遺存良好
78	(C)B-38	5.8	(6.0)	N26° W	?	○	○	〃	S字甕、高杯	SD98に切られる SF111, 112に切られる	
87	(C)C-43	4.2	4.4	N11.5° W	○	○	○	〃	壺、S字甕、高杯		
91	(C)D-43	5.5	5.3	N32° W	○	○	?	弥生後期	高杯	SF83, 85, 102, 120に切られる	
92	(C)B-40	(3.3)	(5.2)	N32° W	○	○	○	?		排水溝がSB87, SF89に切られる	周溝のみ遺存
96	(C)C-44	—	—	N22° W	?	○	?	弥生後期?	高杯、甕		周溝の一部のみ検出、ほとんど発掘区外
99	(C)C-37	5.5	(5.4)	N15° W	○?	○	?	弥生後期?	壺	SD72, 79, SK103に切られる	住居内中央に焼土(SFの可能性あり)
110	(B)E-16	5.8	5.2	N17° W	○	○?	○	弥生後期	高杯、台付甕	SD5に切られる	暗渠排水溝の遺存良好
129	(C)C-40	(3.5)	(3.6)	N16° W	○?	○	?	?		SF77に切られる	周溝のみ遺存
130	(B)C-20	(5.3)	(5.7)	N55° W	○	×	○?	?		SK40に切られる	重複?

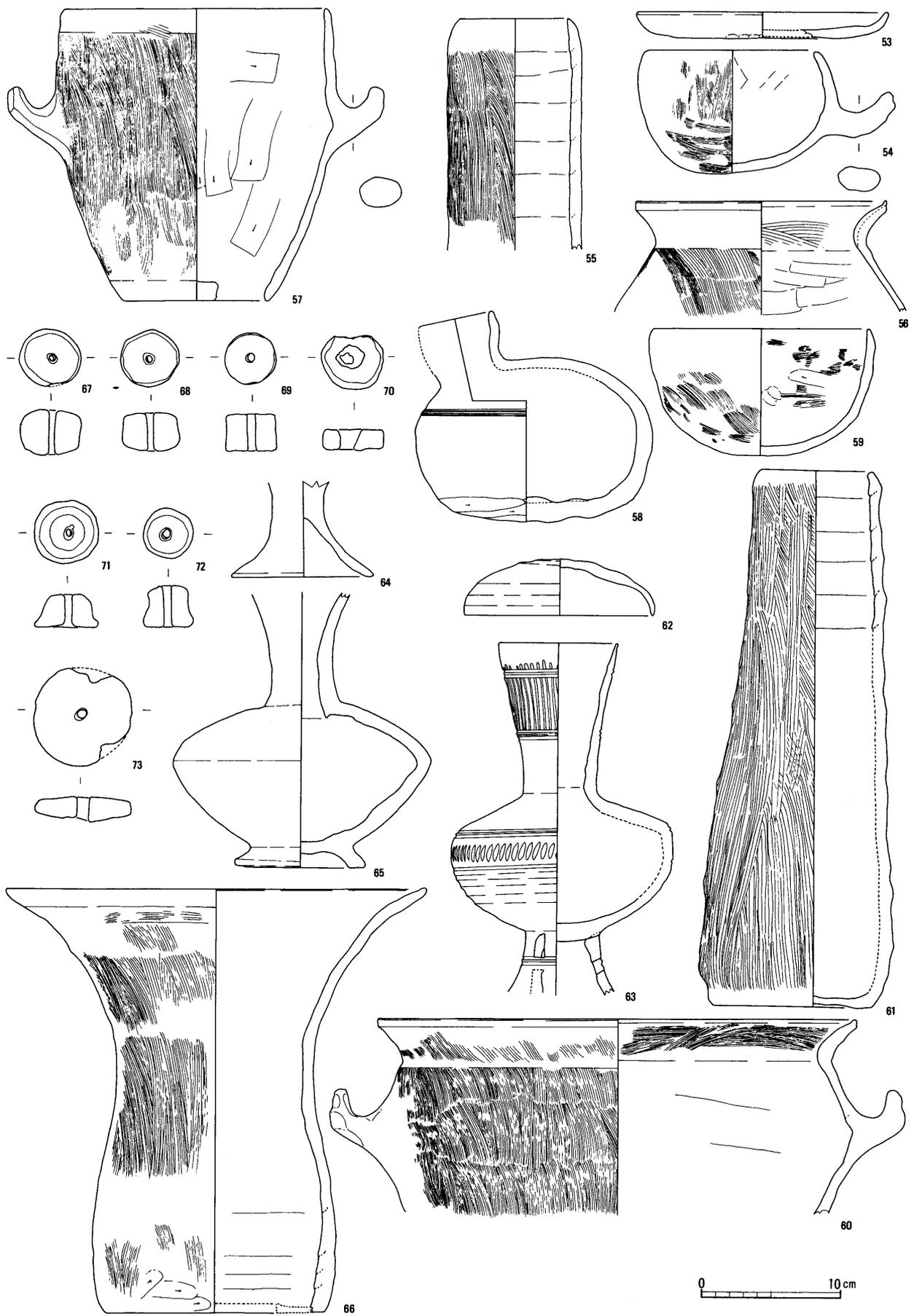
規模欄 ( ) 内の数値は残存長をあらわす。出土遺物欄の④は土師器、④は須恵器をさす。



第10図 遺物実測図 (1 : 4)



第11図 遺物実測図 (1 : 4)



第12図 遺物実測図 (1 : 4)

6.0～6.3mである。この両溝は道路の側溝の可能性もある。そうした時、この道路側溝は発掘区の西側約20mで約120°北に方向を変え、現農道に重複して直進するとすれば齋宮の南東部に通じる。現段階ではこの想定ルート上で道路遺構は確認されていないが、齋宮から離宮院を経て伊勢神宮へ向かう古道<sup>⑧</sup>の可能性を考えたい。またB地区中央部にて検出し

## 4. 遺物

整理箱で230箱を数える。そのうちのほとんどが土師器であり、しかもその大多数を占めるのが甕である。廃棄土坑に転用された土器焼成坑、窪みが廃棄土坑に転用された竪穴住居からの出土量が特に多い。ここでは出土遺物について詳しい記述はなし得ないが、土器焼成坑からの出土遺物については第3表にまとめた。

第10～12図は出土遺物の一部である。(1)はS F 105出土、(2～5)はS F 23、(6・7)はS F 27、(8～16)はS F 60、(17～30)はS F 25、(29～48)はS F 55、(49)はS F 63、(50)はS F 55、(51・52)はS F 80、(53～58)はS K 128、(59～63)はS K 9、(64・65)はS E 16、66はS K 40からの出土である。

(67～73)は土製紡錘車。(67・68)がS B 7、(69)がS K 40、(71)がS K 71、(72)がS F 25、(70・73)が包含層からの出土である。

## 5. まとめ

今回の調査は広大な北野遺跡のごく一部の面積を発掘したにすぎないが、多くの新しい知見をもたらした。本報告では個々の詳細な内容まで立ち入れなかったが、その概要を述べてきた。今後、検出した各遺構や出土遺物等の詳細な分析と検討を加え、正式報告をめざしたい。

ここでは、現段階での調査のまとめと、問題点を提起しておきたい。

### 1. 土器焼成坑について

今回の調査での最大の成果は土器焼成坑の検出であろう。検出数46基という数もさることながら、その内容に注目したい。遺構の項で詳しく述べたので再述しないが、平面形や断面形、地形との関係など

たS D 33とS D 127を道路の側溝と考えれば、道幅は約3.5mと狭いものの、南の藁村から北進してくる道路の延長にあたり、直進すればやはり齋宮に到達する。したがって、これについても伊勢古道の可能性のひとつとしておきたい。これらについては、今後の調査の結果を待って検討する必要がある。

(50・55・61)は特殊な器種である。口縁部はやや内傾気味に立ち上がる。頸部はくびれず、そのまま体部につながる。外面は縦位のハケメ、内面はヨコナデされるが、粘土の継ぎ目痕が明瞭に残る。とりあえず筒形土器と呼んでおく。金剛坂遺跡出土遺物中に類例<sup>⑨</sup>があるが、希有の器種である。なお、(61)は(63)に共伴。また、(66)のような口縁部が大きく外反し頸部でくびれて体部がまたふくらむ器形の甑がある。底部の孔が円形で、底部いっぱいの大きなものから小さなものまでである。

これらのほか、須恵器大甕で口縁部内側に鏝状の蓋受け部?のついたような類例をみないもの(74)も見られる。

その他、旧石器時代のチャート製ナイフ形石器、剥片を最古として、弥生時代の石包丁、弥生～古墳時代の土器類などが出土している。

にいくつかのタイプがあることがわかった。これらのタイプが時期差をあらわすものであるのかどうかについては、今のところ不明である。他遺跡での焼成坑のありかたとの比較検討が必要である。

この遺構が土師器焼成坑とされていることから、須恵器の出土は当然ながらまれである。焼成坑の埋土から出土した須恵器についてはそこで焼成されたものではなく、土器廃棄時または遺構埋没時の混入と考えられ、それによって遺構の時期を決定するのは問題かもしれない。

本遺跡の焼成坑出土遺物は、その圧倒的多数を土師器甕が占め、他の器種は非常に少ない。しかも、暗文をもちていねいにヘラミガキされた橙褐色の畿

D70は幅30cm、深さ20cmである。両溝の芯々距離は内的な土師器の出土が全くといってよいほどなく、時期細分を困難にしている。したがって現段階では本遺跡の焼成坑の時期を飛鳥～奈良時代の前半代（一部は後半に下るか）においておきたい。今後、斎宮跡の土師器の編年がより精緻になっていけば、いわゆるいなか風と呼ばれる、古墳時代からの系譜を引き、粘土紐巻き上げ痕を残す粗製の椀などをてがかりにして、時期の細分が可能となるだろう。

土器焼成坑が斎宮周辺に集中して分布していることから、これらの焼成坑が斎宮で多量に使用される各種土師器を焼成していたのではないかと考えられている。そう考えた場合、暗文をもつ畿内的な橙褐色の杯や皿が多数出土し、官窯的な焼成坑といわれる水池土器製作遺跡<sup>⑧</sup>と本遺跡では大きく様相が異なる。あるいは、本遺跡の焼成坑は甕を専焼していたとも考えられよう。この問題もその他の遺跡の焼成坑での遺物の在り方との比較検討が不可欠であろう。

いずれにせよ、当地（旧有爾郷）は古代より伊勢神宮に献納する土器を焼成していた地<sup>⑨</sup>として知られ、養村には神宮土器調整所があり、土器作りが今も行われていることから、当地周辺が古代の土師器の一大生産地であったことは明らかである。

現在16遺跡で土器焼成坑が検出されているが、これらについて総合的な分析、検討を加えていくことが重要な課題である。

また、熱残留磁気測定の結果については、興味深いデータも見られるが、ここではデータの提示のみに

#### 【註・参考文献】

- ① 木村一朗・竹原平一「伊勢湾南部沿岸の段丘」『第四紀研究』4-2 第四紀学会 1965
- ② 中野敦夫『三重県多気郡明和町遺跡地図』明和町1988
- ③ 皇學館大學考古学研究会『明和町の遺跡』皇學館大學考古学研究会 1987
- ④ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報』-昭和47年度- 三重県教育委員会 1973  
皇學館大學考古学研究会『土師器とその窯』皇學館大學考古学研究会 1986
- ⑤ 明和町教育委員会・三重県教育委員会「水池土器製作址」『斎王宮跡』明和町教育委員会・三重県教育委員会1979
- ⑥ 伊藤久嗣・伊勢野久好「多気郡明和町 堀田遺跡」『昭和55年県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告書』三重県教育委員会 1981

とどめたい。

## 2. 竪穴住居について

今回の調査では弥生時代末から古墳時代にかけての竪穴住居を多数検出した。これらの遺構は西および南の発掘区外へも広がるのは確実である。今後の調査により、当該期の集落の実態が把握できるものと思われる。出土遺物の整理ができていないため時期の比定は確実とはいえないが、欠山式古段階ぐらゐのものから陶邑編年のTK43型式<sup>⑩</sup>に近い須恵器が出土したものである。形態は隅丸方形で、時代が下ると規模が小さくなる傾向がみられる。柱穴は4本で、周溝をもつ。弥生時代末～古墳時代前期の竪穴住居では壁面が周溝上にオーバーハングし、暗渠排水溝を有する特徴をもつ。

出土遺物の整理検討により集落構造や変遷等の解明が課題となろう。

## 3. 遺物について

出土遺物のなかで圧倒的多数を占める土師器甕について、飛鳥～奈良時代の変遷過程の究明が課題となろう。いうまでもなく土師器甕は、器形や成形、調整技法等の変化から大まかな変遷についてはよく知られているものの、一括遺物であっても、器形・口縁部形態等のバリエーションが多く、またあまり特徴的な変化をしないためか、時期の細分が可能な段階にまで至っていない。そのような状況のなかで、本遺跡出土の多量の甕から新たな情報が得られることを期待したい。

(田村陽一)

- ⑦ 調査は昭和63年から平成2年まで行われた。明和町斎宮跡保存対策室の中野敦夫氏のご教示による。
- ⑧ ⑦に同じ
- ⑨ 斎宮から伊勢神宮への古道のルートについては次にあげる論考があるが、本遺跡の周辺については不詳である。足利健亮「平安京から伊勢神宮への古代の道」『探訪 古代の道』2、法蔵館 1988
- ⑩ 山沢義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』明和町教育委員会 1973
- ⑪ ⑤に同じ
- ⑫ ⑤に同じ
- ⑬ 『皇大神宮儀式帳』（『群書類従 第一輯』所収）
- ⑭ 小川啓司「神宮御料土器にこめられた古代のこころ」『端垣』128号 1970
- ⑮ 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ 1966

# 北野遺跡土師器焼成坑群の考古地磁気測定

富山大学理学部地球科学教室  
広岡公夫、田中 豊、森定 尚

## はじめに

磁鉄鉱 ( $\text{Fe}_3\text{O}_4$ )、チタン磁鉄鉱 ( $(\text{Fe},\text{Ti})_2\text{O}_4$ )、赤鉄鉱 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )、などの鉄・チタンの酸化物が、土中に2~3%程度含まれており、磁石になることができる磁性鉱物である。一般に‘砂鉄’と呼ばれているもので、土は、焼かれて高温に熱せられた状態から冷えるとき、地球の磁場が作用しているので、これらの磁性鉱物は、その磁場と同じ向きの熱残留磁化を持つようになる。この熱残留磁化は強くはないが非常に安定で、殆ど永久にその磁化方向と強度を保ち続ける。その結果、窯跡や炉跡のような焼土は、焼かれたときの過去の時代の地磁気の方向を記憶している。

一方、地磁気は、ゆっくりではあるが永年変化をしているので、時代とともに地磁気の方向は変わっていく。この地磁気永年変化の周期は非常に長らしく、過去400年間の記録しかない地磁気の直接観測のデータからでは、地磁気変動の様子を明らかにすることができない。地磁気永年変化の真の姿を知

るには、もっと古い時代の地磁気の記録(焼土の熱残留磁化)も集める必要がある。

焼土など遺跡に残されている考古学的な遺構の熱残留磁化から、歴史学、考古学が扱う時代の地磁気の変動を明らかにする研究を考古地磁気学という。日本では、東海地方から九州北部に至る西南日本各地の遺跡の考古地磁気測定によって得られたデータから、過去2000年間の考古地磁気永年変化の大略が明らかになっている(Hirooka, 1971; 広岡, 1977)。

焼土遺構の熱残留磁化方向を測って、それをこの永年変化曲線と照合することによって年代を推定することができるようになった。これが考古地磁気学的に年代を推定する方法である。よく焼けたものであれば、遺構の種類は問わないので、異種の焼土遺構の対比にも使える。

今回は、北野遺跡の土師器焼成坑群の考古地磁気測定を行なった結果と、そのデータから推定される考古地磁気年代を報告する。

## 測定試料の採取

遺跡の現場では、測定用試料として焼土遺構のよく焼けた部分を選んで、にぎりこぶし大の焼土を、1遺構について10~15個採取する。焼土の磁化の方向を知るために試料を採取するのであるから、試料となった焼土が窯内でどの様な向きになっていたかが精密に測られた定方位サンプルでなければならない。そのために次のような手順で試料を採取する。

まず、窯床から、最終焼成後に動いた形跡のないしっかり焼けた場所を選んで、こぶし大の部分を残してその周りに深さ数cmの溝を掘る。こぶし大の部分に水を多めにといた石膏をかけ、焼土がくずれないように固定する。次いで、固めにといた石膏をその焼土の上面にのせて、それにアルミ板を押しつけて試料表面に平面を作り、試料とする。石膏が固まっ

たらアルミ板をはがし、その平面の最大傾斜線の方位と、面の水平面からの傾斜角を、特別に設計されたクリノメータを用いて測る。試料表面に方位を示すマークと試料番号をしるし、測った方位と傾斜角をノートに記入しておく。このような試料を1遺構で十数個つくる。

こうして採取した定方位試料を研究室に持ち帰り、ダイヤモンド・カッターで34mm×34mm×34mmの大きさに切断、整形し測定試料が出来上がる。切断面はくずれないように石膏で覆っておく。

北野遺跡土師器焼成坑群では13基の焼成坑から総計161個の試料を採取した。それぞれの焼成坑から採取した試料個数と、それらの試料番号は、次の通りである。

S F 1 3	1 2 個 (試料番号 NM261-272)
S F 2 3	1 2 個 (試料番号 NM281-292)
S F 2 5	1 2 個 (試料番号 NM301-312)
S F 2 7	1 2 個 (試料番号 NM321-332)
S F 3 2	1 3 個 (試料番号 NM341-353)
S F 3 9	1 2 個 (試料番号 NM381-392)
S F 6 0	1 2 個 (試料番号 NM401-412)

S F 6 3	1 2 個 (試料番号 NM421-432)
S F 7 7	1 2 個 (試料番号 NM481-492)
S F 8 0	1 2 個 (試料番号 NM461-472)
S F 8 3	1 2 個 (試料番号 NM501-512)
S F 1 0 5	1 4 個 (試料番号 NM441-454)
S F 1 1 6	1 4 個 (試料番号 NM361-374)

## 残留磁化の測定

熱残留磁化の測定には、夏原技研製のSMM-85型リングコア・スピナー磁力計を使用し、6回置きなおして各面2成分ずつ12成分の測定を行なった。それぞれの焼成坑の残留磁化測定結果は、第6～18表に示されている。これらの表には、個々の試料の偏角、伏角、磁化強度が示されている。試料の中には、とても地磁気の方向を記録しているとは考えられない磁化方向を示すものが含まれていることがある。それらは磁化獲得後に動いたか、あるいは十分温度が上がらずに、含まれている礫がもとから持っていた残留磁化であるなどの場合が考えられる。いずれにしても、焼成坑を使用したときの地磁気の方向の記録ではないので、このような試料の測定値は、焼成坑ごとの平均磁化方向を求める統計計算の際には除外した。第6～18表で、\*印をつけた試料がそれにあたる。特に、S F 116では14個の試料を採集したが、磁化方向が大きく外れたものが多く、比較的まとまりのいい7個の測定結果のみを用いて平均磁化方向を求めた。

第19表には、フィッシャーの統計法 (Fisher, 1953) にもとづいて求めた、各焼成坑ごとの平均磁化

方向 (平均偏角、平均伏角)、平均磁化方向の角度の誤差の大きさを表すフィッシャーの信頼角 ( $\alpha_{95}$ )、個々の試料の磁化方向のばらつきの程度を示すフィッシャーの精度パラメータ (K)、および、平均磁化強度が示されている。

$\alpha_{95}$  は真の磁化方向が95%の確率で平均磁化方向を中心に  $\pm \alpha_{95}^\circ$  の範囲に存在することを示す。いかえれば、この範囲から1/20の危険率で真の磁化方向が外れる可能性のあることを意味している。Kは個々の試料の磁化方向がどれくらいバラついているかを示す変数で、通常によく焼かれた陶磁器の窯跡では200～500の値となる。

第13図は、西南日本の考古地磁気永年変化曲線に第19表に示されている考古地磁気測定結果の偏角と伏角の値を用いて平均磁化方向を記入したものである。●印が各焼成坑の平均磁化方向を表し、それを囲む楕円が  $\alpha_{95}$  の範囲である。●印に最も近い永年変化曲線の部分の年代が、考古地磁気学的に求められる推定年代で、年代の誤差は、 $\alpha_{95}$  の楕円が覆う永年変化曲線の線分の長さから求められる。

## 考古地磁気推定年代

第13図の考古地磁気永年変化曲線が正確に過去の地磁気の方向を表しているものと仮定して、これから考古地磁気年代を推定すると、

S F 1 3 A.D. 6 7 0 ± 3 0 年

S F 2 3 A.D. 5 2 5 ± 5 0 年

又はA.D. 9 5 0  $\begin{matrix} +110 \text{ 年} \\ -180 \text{ 年} \end{matrix}$

S F 2 5 A.D. 7 0 5 ± 4 0 年

S F 2 7 A.D. 7 3 0 ± 1 5 年

S F 3 2 A.D. 7 4 0 ± 2 0 年

又はA.D. 1 2 0 0 ± 5 0 年

S F 3 9 A.D. 6 9 0 ± 3 0 年

S F 6 0 A.D. 6 6 0 ± 2 0 年

S F 6 3 A.D. 1 1 1 0 ± 6 0 年

又はA.D. 7 3 0 ± 3 0 年

S F 7 7 A.D. 7 2 0 ± 2 0 年

又はA.D. 6 1 0 ± 2 0 年

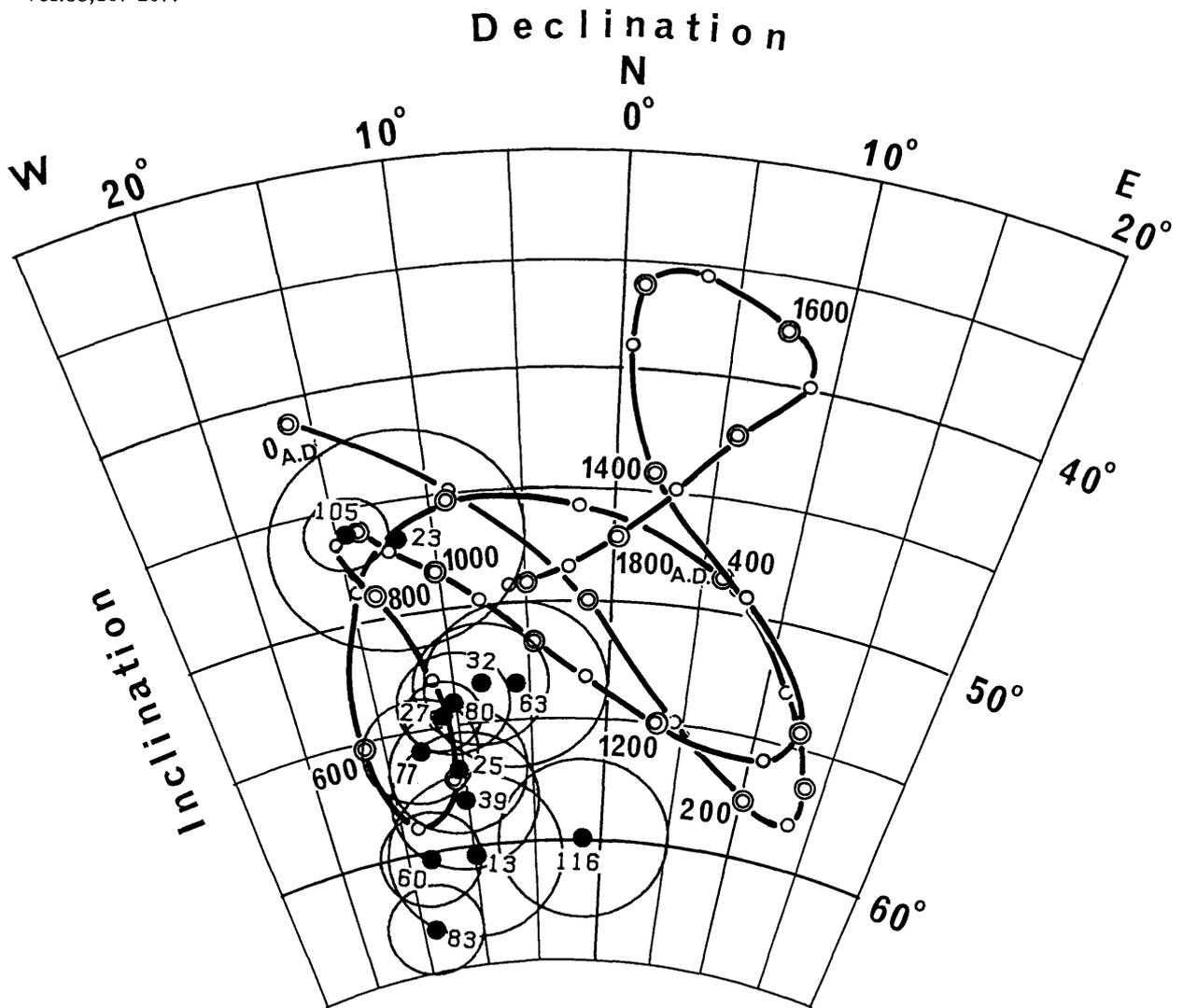
SF 80 A.D. 740 ± 20年  
 SF 83 A.D. 650 ± 20年  
 SF 105 A.D. 530 ± 10年  
 又はA.D. 870 ± 30年

SF 116 A.D. 690 ± 40年  
 又はA.D. 1200 ± 50年  
 となる。

引用文献

Fisher, R.A. (1953) Dispersion on a sphere,  
 Proc. Roy. Soc. London, A, vol. 217, 295-305.  
 Hirooka, K. (1971) Archaeomagnetic study for  
 the past 2,000 years in southwest Japan, Mem.  
 Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral.,  
 vol. 38, 167-207.

広岡公夫 (1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気  
 研究の最近の動向、第四紀研究、vol. 15, 200-203



第13図 西南日本の過去2000年間の考古地磁気永年変化（広岡、1977による）と北野遺跡の考古地磁気測定結果。

13: SF 13、23: SF 23、25: SF 25、27: SF 27、32: SF 32、39: SF 39、60: SF 60、  
 63: SF 63、77: SF 77、80: SF 80、83: SF 83、105: SF 105、116: SF 116、

第6表 SF-13の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^{-4}$ emu/g)
NM 261	-1.3	55.8	0.862
262	-11.1	69.2	0.480
263	-12.9	60.5	0.701
264	-18.8	59.8	1.76E
265	-6.8	59.6	3.24E
266	-15.4	56.9	2.57E
267	-5.2	53.4	0.827
268	-4.7	65.9	1.14E
269	-13.7	63.4	2.73E
270	-19.9	62.2	2.31E
271	-3.9	51.4	1.85E
272	-2.9	66.4	2.03E

第7表 SF-23の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^{-4}$ emu/g)
NM 281	-16.1	50.3	3.76
282	-18.4	42.0	11.9
283	-9.8	34.3	2.06
284	-11.1	49.7	0.563
285	-10.5	38.4	5.72
286	-6.0	51.3	0.464
287	-16.7	52.8	4.99
288	-14.9	50.0	6.15
289	-26.3	50.6	12.1
290	0.7	41.5	1.32
291	-11.5	38.8	1.98
292	-3.8	59.4	0.254

第8表 SF-25の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^{-4}$ emu/g)
NM 301	-2.3	57.4	5.01
302	-8.7	58.4	2.76
303	-4.7	59.4	2.07
304	-20.9	55.6	1.88
* 305	-44.7	-29.2	1.89
306	-17.3	55.4	2.47
307	-19.6	61.0	3.85
308	-8.6	53.4	2.65
309	-12.6	52.4	3.09
310	-6.0	55.1	2.62
311	-12.9	57.8	4.71
312	1.6	57.6	6.12

\* : 平均磁化方向を求める統計計算の際に除外したもの。

第9表 SF-27の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^{-4}$ emu/g)
NM 321	-15.6	53.8	4.46
322	-9.8	53.7	4.71
323	-12.4	56.8	5.47
324	-12.8	56.6	3.73
325	-13.8	56.1	5.79
326	-7.5	52.9	5.71
327	-7.9	56.7	4.05
328	-9.5	53.0	3.74
329	-7.2	54.1	3.28
* 330	0.7	56.3	2.51
* 331	-1.1	52.9	1.94
332	-11.8	52.1	5.37

\* : 平均磁化方向を求める統計計算の際に除外したもの。

第10表 SF-32の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^{-4}$ emu/g)
NM 341	-6.5	56.9	1.81
342	-1.7	55.9	0.774
343	-7.8	54.0	2.13
344	3.8	57.8	0.542
345	-3.4	57.6	0.962
346	-8.7	49.7	4.08
347	-10.6	51.7	2.78
348	-8.2	57.0	0.944
349	-15.7	50.4	2.41
350	-4.2	48.8	2.03
351	-14.8	50.0	2.10
352	-18.2	48.9	5.28
353	-5.2	53.1	1.95

第11表 SF-39の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^{-4}$ emu/g)
*NM 381	-39.2	71.4	80.3
382	-0.1	61.0	6.82
383	-14.8	56.8	8.59
384	-14.5	55.6	2.06
385	-15.2	57.9	6.89
386	-20.4	53.7	2.40
387	-5.2	58.9	2.84
388	-3.8	57.9	4.31
* 389	-65.1	44.3	2.90
390	-1.9	60.9	5.25
* 391	14.8	61.1	1.63
392	-10.8	59.7	5.92

\* : 平均磁化方向を求める統計計算の際に除外したもの。

第12表 SF-60の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^{-3}$ emu/g)
NM 401	-14.6	62.2	2.32
402	-14.7	61.6	3.75
403	-9.6	59.0	3.77
404	-18.5	57.0	2.89
* 405	-12.1	69.5	3.68
406	-13.3	59.7	5.70
407	-17.6	61.2	3.47
408	-16.5	62.5	5.18
* 409	-16.7	67.7	0.673
410	-18.6	59.0	2.74
411	-5.5	61.5	0.452
412	-3.2	58.8	0.596

\* : 平均磁化方向を求める統計計算の際に除外したもの。

第15表 SF-80の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^{-4}$ emu/g)
NM 461	-10.4	50.9	5.28
462	-7.7	51.1	4.48
463	-3.6	58.9	0.547
464	-12.9	55.3	8.60
465	-13.0	56.4	10.9
466	-10.4	56.5	4.78
467	-12.3	54.9	6.69
468	-12.5	53.2	8.06
469	-14.2	49.0	4.30
470	-7.2	57.6	11.2
* 471	-25.5	71.4	1.74
472	-4.9	51.3	3.09

\* : 平均磁化方向を求める統計計算の際に除外したもの。

第13表 SF-63の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^{-4}$ emu/g)
*NM 421	17.5	84.0	0.786
422	-6.1	55.2	3.37
423	-5.8	52.6	2.53
* 424	-9.8	68.3	1.62
* 425	-150.9	16.6	2.79
426	5.0	52.7	1.37
* 427	16.9	49.5	0.661
* 428	17.2	69.5	0.925
429	-6.4	54.6	1.96
430	-13.6	49.1	2.49
431	-11.8	51.4	3.33
432	-1.8	57.7	1.27

\* : 平均磁化方向を求める統計計算の際に除外したもの。

第16表 SF-83の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^{-4}$ emu/g)
NM 501	-4.9	62.4	4.64
502	-14.8	67.9	11.3
503	-8.9	63.6	8.79
504	-11.5	61.6	9.11
* 505	-20.3	53.6	2.08
506	-20.7	59.0	2.06
507	-20.4	62.3	6.49
508	-13.7	62.5	10.4
509	-17.9	64.3	9.84
510	-14.3	62.7	7.03
511	-6.7	64.9	6.58
512	-18.1	64.0	6.21

\* : 平均磁化方向を求める統計計算の際に除外したもの。

第14表 SF-77の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^{-4}$ emu/g)
*NM 481	-9.3	49.6	5.64
482	-14.4	56.0	5.02
483	-13.3	53.5	7.22
* 484	-20.8	48.5	2.41
485	-16.6	58.1	1.69
486	-10.9	53.8	6.13
* 487	-6.0	51.9	4.19
488	-12.4	55.4	2.89
489	-8.4	58.7	0.779
* 490	-1.4	51.3	2.06
* 491	1.6	54.3	2.54
* 492	4.2	58.1	1.85

\* : 平均磁化方向を求める統計計算の際に除外したもの。

第17表 SF-105の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^{-4}$ emu/g)
NM 441	-18.4	42.8	2.66
442	-11.9	48.0	3.19
* 443	-12.3	13.2	3.48
444	-8.4	44.3	4.23
445	-16.4	45.3	4.53
* 446	-12.9	37.1	10.3
447	-12.4	47.4	8.93
448	-16.8	46.9	6.16
450	-17.8	48.2	9.65
451	-15.6	45.4	10.9
452	-17.6	47.1	10.3
453	-12.5	46.0	6.46
454	-12.4	46.0	11.7

\* : 平均磁化方向を求める統計計算の際に除外したもの。

第18表 SF-116の磁化測定結果

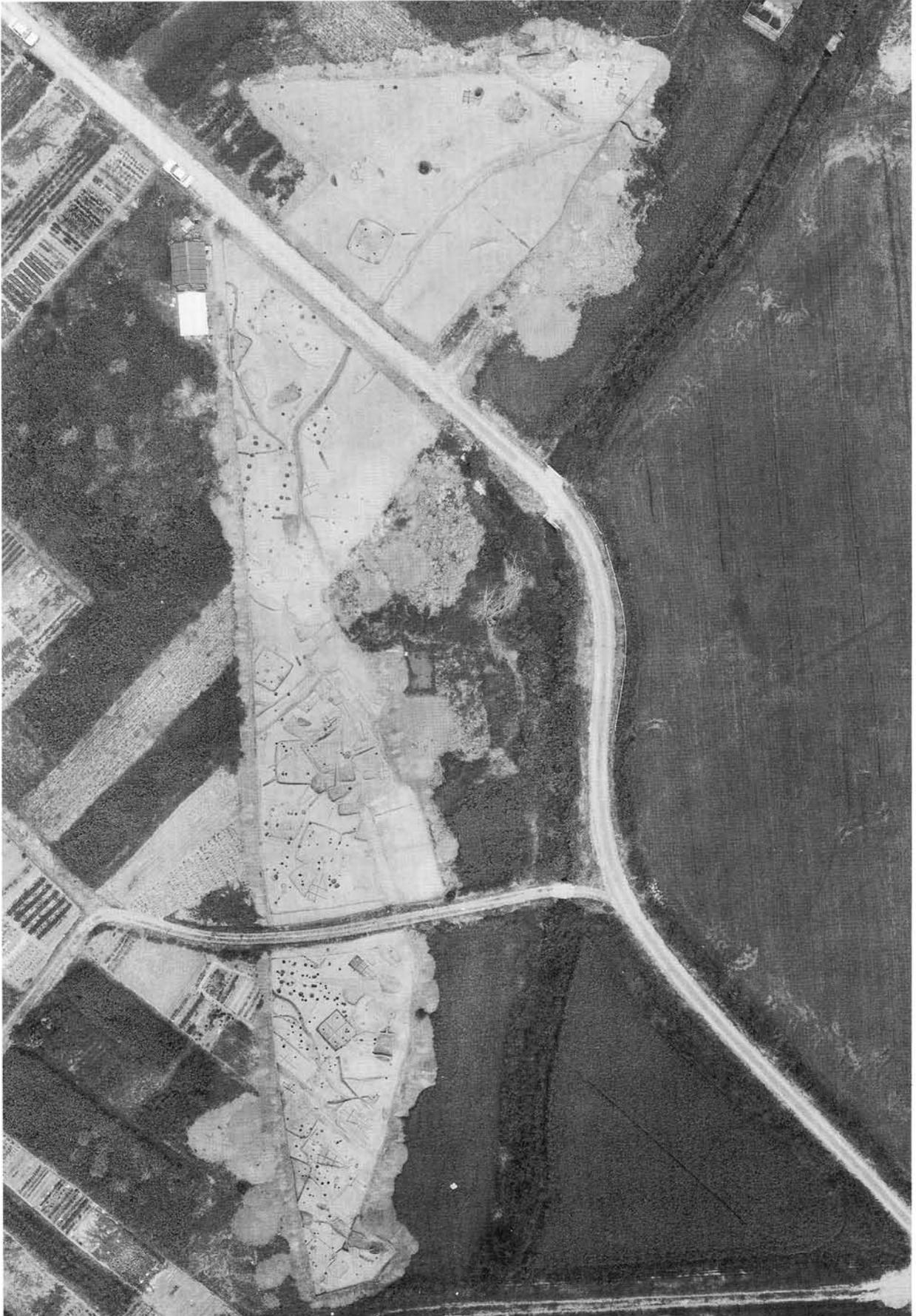
試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^{-3}$ emu/g)
NM 361	82.1	58.1	1.10
362	-7.7	58.1	0.825
363	-8.8	57.2	2.08
364	-0.6	64.5	1.39
* 365	-20.6	54.7	2.08
366	-6.5	60.3	0.810
367	3.7	62.7	1.09
* 368	25.8	75.8	0.440
369	9.0	58.0	0.417
* 370	46.5	27.4	0.572
* 371	41.4	22.4	0.981
* 372	42.7	27.0	1.05
* 373	38.9	32.1	1.36
* 374	22.9	55.1	1.00

\* : 平均磁化方向を求める統計計算の際に除外したもの。

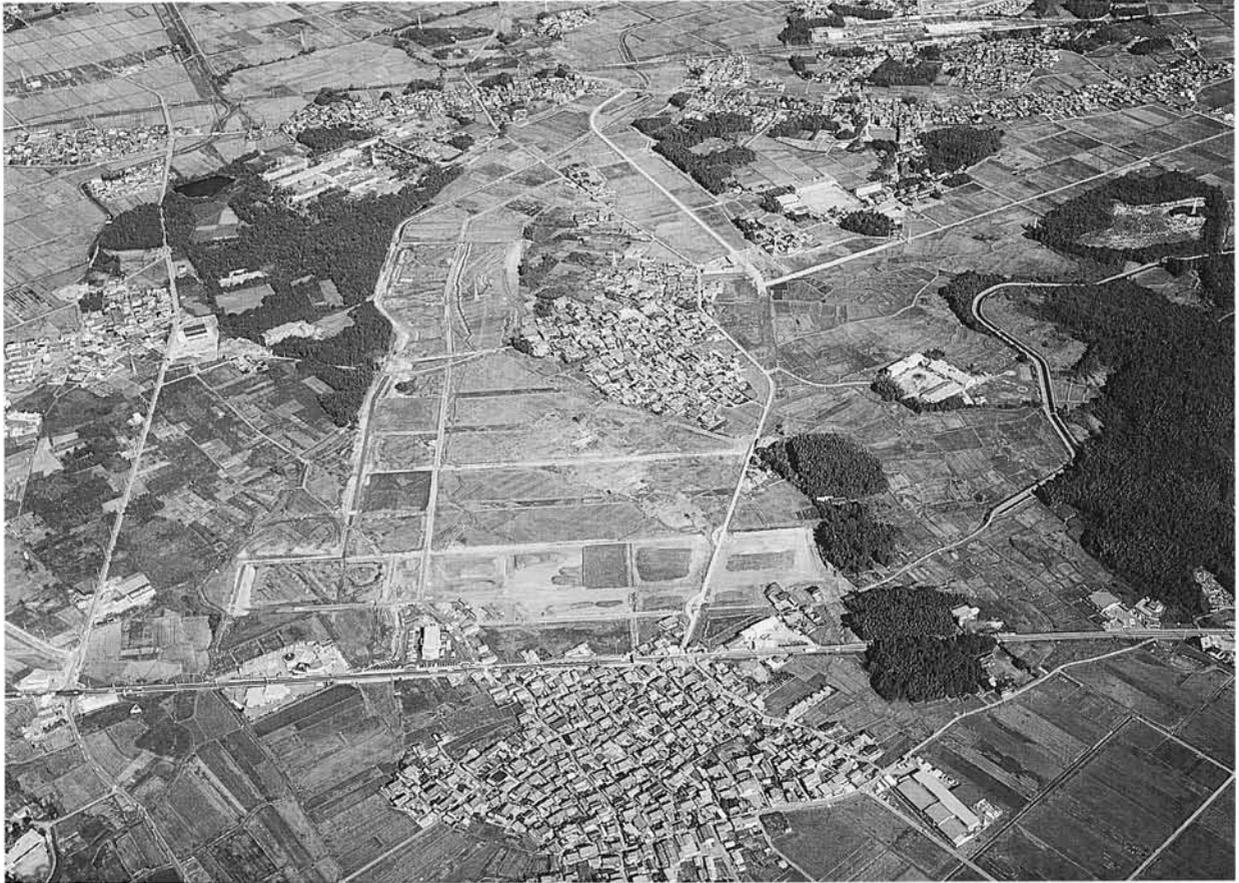
第19表 北野遺跡の考古地磁気測定結果

窯名	N	D (° E)	I (°)	$\alpha_{95}$ (°)	K	平均磁化強度 ( $\times 10^{-4}$ emu/g)
SF-13	12	-9.7	60.5	3.37	167.2	1.70
SF-23	12	-11.9	46.8	4.75	84.4	4.27
SF-25	11	-10.2	56.9	2.64	299.7	0.338
SF-27	10	-10.8	54.6	1.46	1095.6	4.63
SF-32	13	-8.1	53.4	2.58	259.0	2.14
SF-39	9	-10.0	58.2	2.84	328.6	0.501
SF-60	10	-13.2	60.4	1.94	620.3	3.09
SF-63	7	-5.9	53.5	3.49	300.7	2.33
SF-77	6	-12.6	55.9	2.19	935.0	3.95
SF-80	11	-10.0	54.1	2.15	452.2	6.18
SF-83	11	-13.9	63.3	1.86	604.2	4.50
SF-105	11	-14.5	46.2	1.56	859.2	7.16
SF-116	7	-1.3	60.0	3.28	338.7	1.10

N : 試料個数、D : 平均偏角、I : 平均伏角、 $\alpha_{95}$  : フィッシャーの信頼角、K : フィッシャーの精度パラメータ



調査区全景

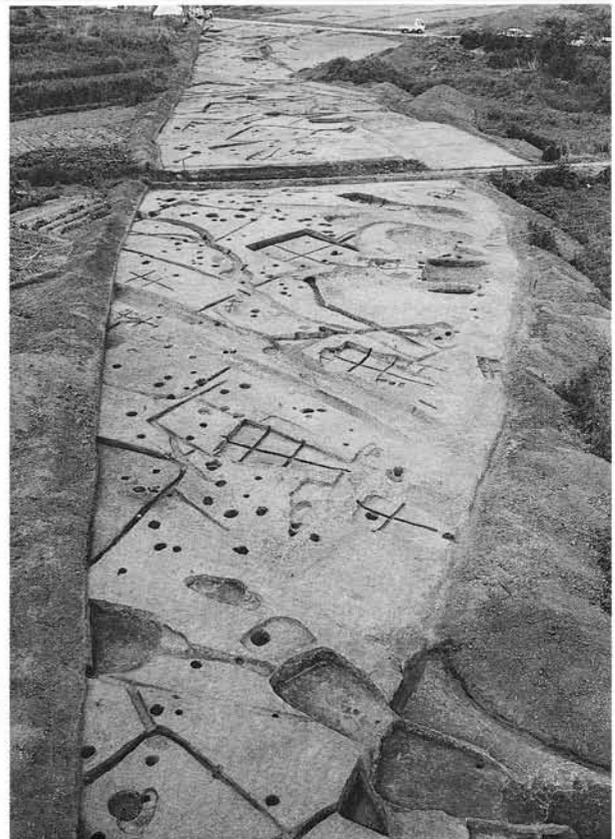


遺跡遠景（南上空より）

松阪農林事務所提供



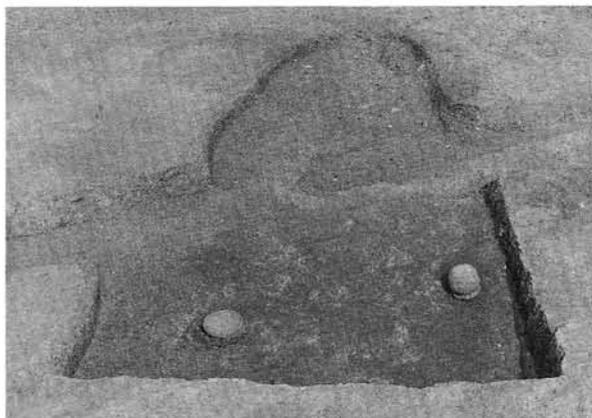
B地区全景（北から）



C地区全景（南から）



S F 13 · S E 16



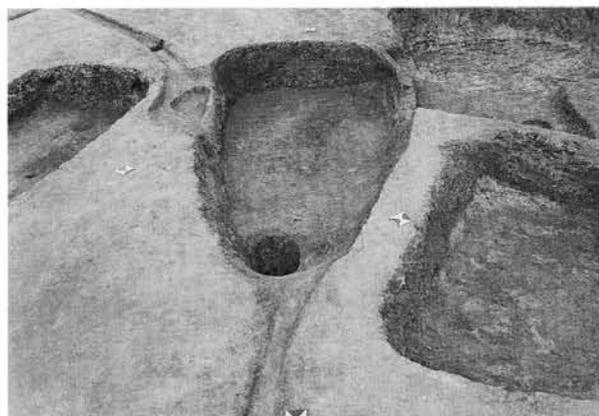
S F 27



S F 25



S F 55



S F 60



S F 77



S F 80 · 113



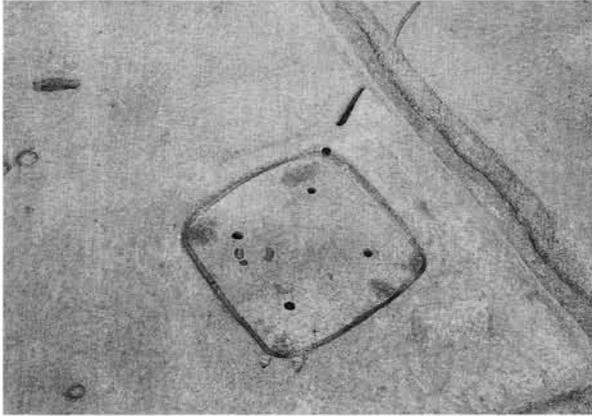
S F 32 · 116



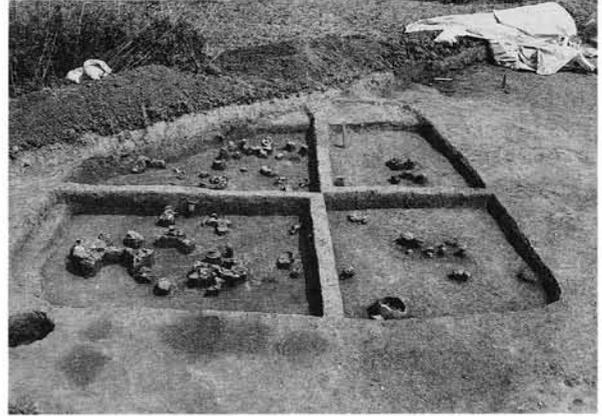
SK 8, 9, SF117



SK 40



SB 14



SB 28



SB 38



SB 75



古道



作業風景

# 多気郡明和町 蓑村大塚遺跡

## ま と め

蓑村大塚遺跡は明和町大字蓑村に位置し、丘陵に挟まれた水田地帯となっている。今回は場整備事業によって削平を受ける排水路部分75㎡について、平成2年8月27日に立会調査を実施した。その結果若

干量の土師器片が出土したのみで、遺構や顕著な遺物は認められなかった。遺跡の中心からはずれているものと思われる。



第14図遺跡地形図 (1 : 5,000) ■は試掘坑



第15図 調査区位置図 (1 : 2,000)

# 多気郡大宮町 中里遺跡

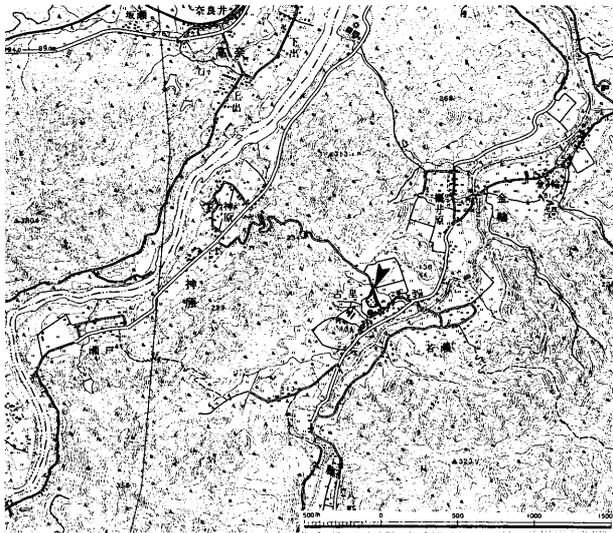
## ま と め

当遺跡は度会郡大宮町永会字中里に所在する。現況は水田である。調査期間は平成2年8月20日・21日、調査面積は約260である。

検出した遺構は、ピット30数個である。径20程の

ものと、径50～80のものに大別されるが、掘立柱建物と考えられるものはない。

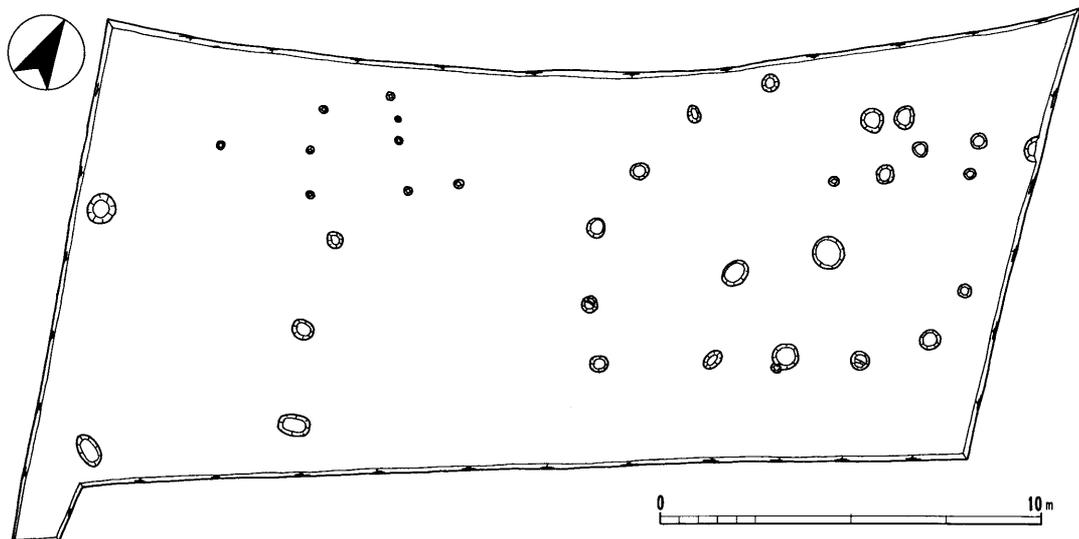
遺物は山茶碗片と土師器片が極く少量出土したのみである。



第16図 遺跡位置図 (1 : 50,000)



第17図 遺跡地形図 (1 : 1,000)



第18図 遺構平面図 (1 : 200)

# 松阪市岡本町 打田遺跡

## 1. 位置と環境

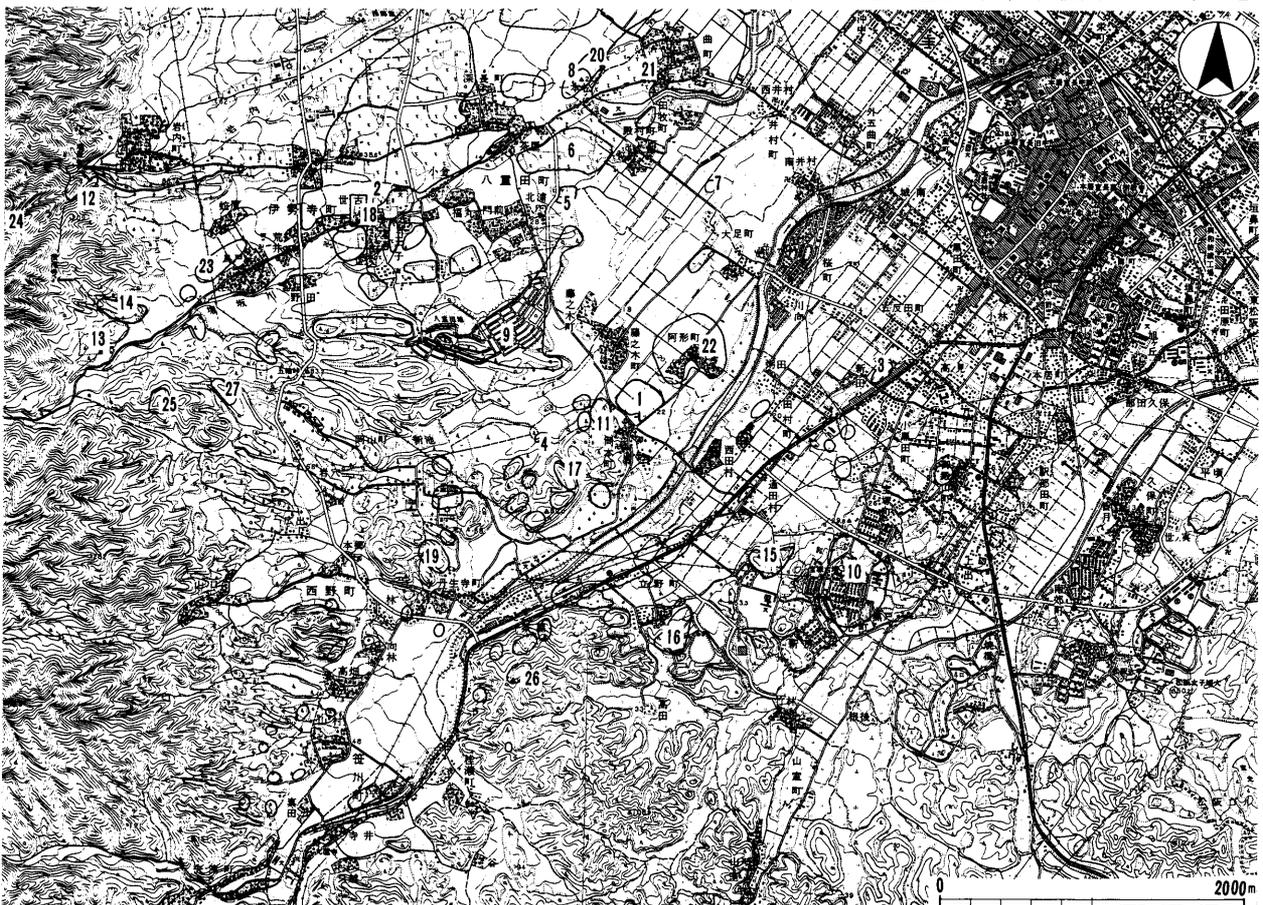
伊勢平野のほぼ中央部に位置する松阪市には、西の堀坂山系に源を発する中小河川が東流し伊勢湾に注ぐ。北から順に三渡川、岩内川、堀坂川、阪内川等があり南北に長い複合扇状地を形成する。現在の松阪市街地西部にあたるこの地域には多くの遺跡が分布し、早くから開拓された地域と考えられる。<sup>①</sup>

松阪の秀峰（地元では「伊勢富士」とも呼ばれる<sup>②</sup>）堀坂山とその南方の白猪山によって造られる谷筋に源を発する阪内川は扇状地を形成している。打田遺跡（1）は標高20m程で、その扇状地の扇央部に位置している。地目は水田となっている。阪内川の北方約2kmの所を東流する堀坂川は、堀坂山とその北方観音岳に源を発し、同様に扇状地を形成する。

その扇央部、標高40mのところには伊勢寺遺跡（2）が位置している。現在は畑地、桑畑、水田が混在している。この地域を時代別に概観してみよう。

〔縄文時代〕堀坂川流域には縄文土器片・サヌカイト片が僅かに出土しているにすぎないが、阪内川流域には、前期の爪型土器を採集する新田町遺跡（3）や中期の竪穴住居が検出された追上遺跡（4）などが見られる。

〔弥生時代〕伊勢寺町の北東、約4に一志郡三雲町の中ノ庄遺跡がある。この遺跡からは、県下で最も古い遠賀川系土器が出土している。この拡散ルートの影響か、中期になると遺跡数は急増する。田高田遺跡（5）、城垣内遺跡（6）、後期には川井町遺



第19図 遺跡位置図（1：50,000）

（国土地理院 松阪・大河内に25,000から）

跡やパレススタイルの壺形土器が出土した蜻遺跡(7)などがそれである。

[古墳時代]前期には、二重口縁の底部穿孔壺形土器が多数出土した深長古墳(8)がある。中期になると八重田古墳群(9)や全長95mで伊勢国最大の前方後円墳を含む宝塚古墳群(10)、帆立貝式古墳のある高地蔵古墳群(11)などがある。規模の卓越した古墳がこの地域に集中していることは、かなりの有力者が存在したことをうかがわせる。後期になると、平野が望める丘陵部には、瑞巖寺(12)、上文珠(13)、下文珠(14)や田村(15)、立野(16)などの少人数の協同で造墓できる群集墳が出現して、その総数は100基を越える。常光坊谷古墳群(17)から出土した多くの形象埴輪は、当時の生活様式を知る上で貴重であろう<sup>④</sup>。

集落跡としては、この時代の須恵器などの遺物が散布する地域は、概ね伊勢寺地区とその周辺に多い。遺跡の実態については不明であるが、丘陵部の古墳とのつながりが推定できる。

[飛鳥時代～平安時代]伊勢寺廃寺(18)や丹生寺廃寺(19)は創建時期を白鳳時代に比定することができる。前者は東面150m、南北180mの東西南北の方位にのった方形の地割が残し、複弁蓮華文の軒丸瓦や重孤文の軒平瓦などが出土し寺域を区画する溝も検出されている<sup>④</sup>。丹生寺廃寺も伊勢寺廃寺と同じような布目瓦が散布し、方形台地状の区画や低い土塁遺構が残っている。また付近には、丹生寺廃寺に供給した立野瓦窯跡もある。この時期の寺院建築は、権力の象徴であって在地権力の基盤がこの付近にあっ

たことがうかがえる。

平安時代の『和名類聚抄』には立野郷(立野町)、英太郷(阿形町)などの地名が散見される。さらに阿形町や殿村町、曲町周辺にほぼN30°Eの方位にのった古代条理制をしのばせる地割が残っている。

現在判明している集落遺跡では、複合の遺跡が多い。

杉垣内遺跡(20)、曲遺跡(21)、などはおおよそ奈良時代から室町時代までの複合遺跡である。他に弥生時代から平安時代末の阿形遺跡(22)、奈良時代から平安時代の鳥戸遺跡(23)<sup>⑤</sup>、出口遺跡などもあげられる。このことは堀坂川・坂内川沿岸地域が古代から中世まで継続的に繁栄していたともいえる。

[鎌倉、室町時代]鎌倉時代初頭には、伊勢神宮の神領としての井村御厨、岩内御厨、英太御厨、勾御厨などの地名が「神鳳抄」に見られる。また室町時代になると、伊勢国司北畠氏の支配下におかれ、岩内城(24)、伊勢寺城(25)、立野城(26)、船江城などがつくられた。これらのことは、鎌倉時代・室町時代を通してこの地域にかなりの人口が集中していたであろうことを想像させる。昭和60年伊勢寺町横尾で発掘された横尾墳墓群(27)<sup>⑥</sup>は、一つの広大な尾根全体が墓域となっており、室町時代を中心とした五輪塔が多数出土した。よって同地域と横尾墳墓群との関連も注目させるのに十分である。

以上、堀坂川・坂内川周辺地域について概述したが、古代から中世を通して、この地域の歴史的重要性を垣間見ることができよう。

## 2. 試掘調査

今回調査に先立って、遺物の散布状況から34ヶ所の試掘坑を設定し、範囲確認の調査を実施した。こ

の結果をもとに協議を重ね、第20図に示した範囲を発掘調査することになった。

## 3. 遺構

基本的層序は大きく4層に分かれる。第1層は耕作土、第2層は旧耕作土で、その下に第3層の暗褐色の遺物包含層がある。第4層が小石混の灰白砂の地山となる。

検出された遺構の主なものは飛鳥時代の竪穴住居が2棟、奈良時代の竪穴住居が14棟、掘立柱建物8棟、井戸2基、溝1条、土坑1基、平安時代の竪穴住居が1棟、掘立柱建物2棟がある。



第20図 遺跡地形図 (1 : 5,000)

(1) 竪穴住居

竪穴住居からは竈跡と思われる焼土が多数確認できたが、粘土郭などの残存はほとんどみられず、支柱穴も確認できなかった。

S B 2 深さ7~10cmの規模である。出土遺物には底部外面に「×」のヘラ記号の土師器皿 (48) などがある。

S B 5 深さ23~27cmの規模をもつ。出土遺物には土師器小甕、墨書のある土師器皿 (70) などがある。

S B 10 北側が調査区外にあるため全体規模は不明であるが、深さは6~12cmである。粘土郭もわずかに残存している。出土遺物には放射状暗文をもつ土師器椀 (4)、須恵器杯蓋 (8)、刀子等がある。

S B 17 S B 18を切る。出土遺物には底部に「十」の墨書のある土師器皿 (51) などがある。

S B 18 出土遺物には底部外面に「メ」のヘラ記号をもつ土師器杯 (46) 等がある。

S B 21~23 いずれも竪穴住居の残存と思われるが後世の削平により規模は不明である。また焼土も確認できなかった。深さはいずれも5cm前後である。

S B 26 南側が調査区外にあるため全体規模は不明であるが、深さは約13cmである。北東辺やや東寄りに竈跡と思われる焼土があり、その中央に支石をもつ。

(2) 掘立柱建物

S B 1 調査区南壁で切られるため全体規模は不明であるが、1間以上×2間以上の建物である。

S B 4 2×2間の総柱建物。S B 3に切られる。東側の調査区を広げたが、S B 4の柱穴は確認できなかった。柱掘形はほぼ円形に近く深さは60~70cmと調査区内の掘立柱建物では最も深い。

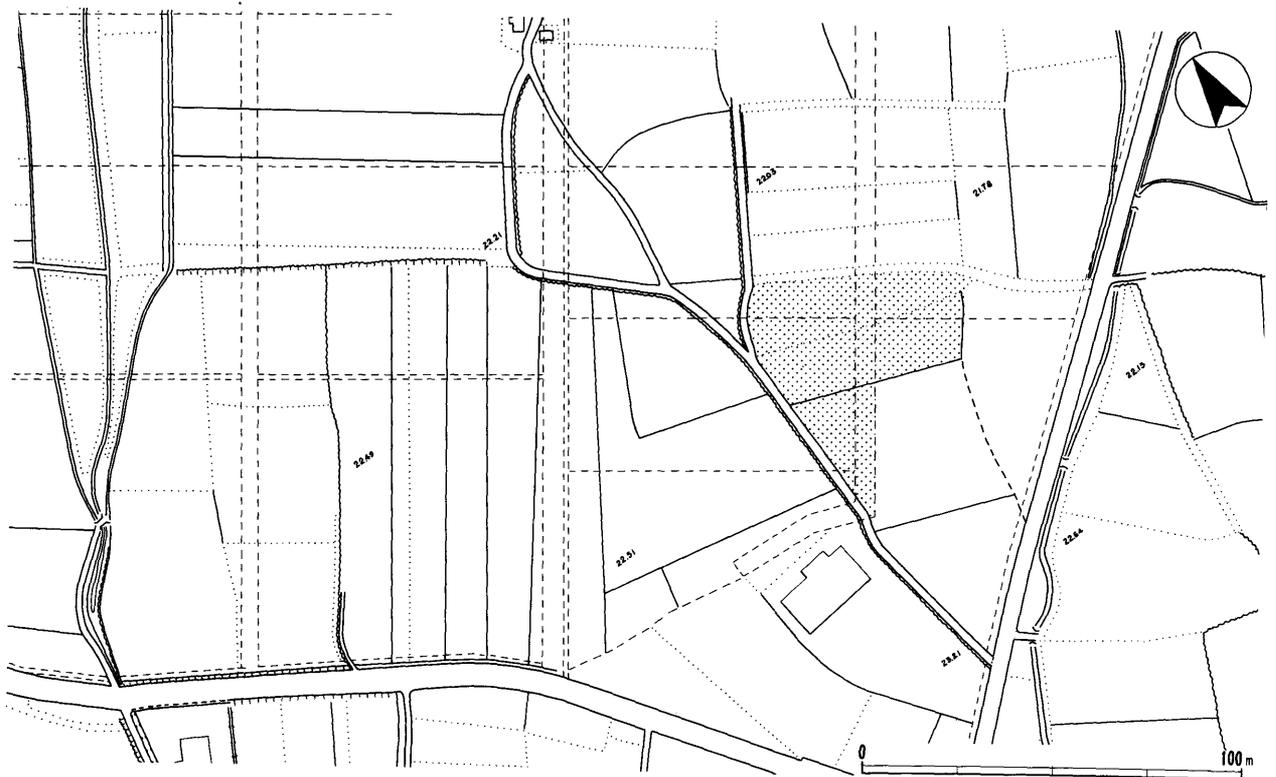
S B 9 東側に柱列をもつ。深さは浅いところで20cm、深いところで30cmである。

S B 14 S B 15に切られている。柱掘形は深さ40~60cmで、土師器杯蓋などが出土している。

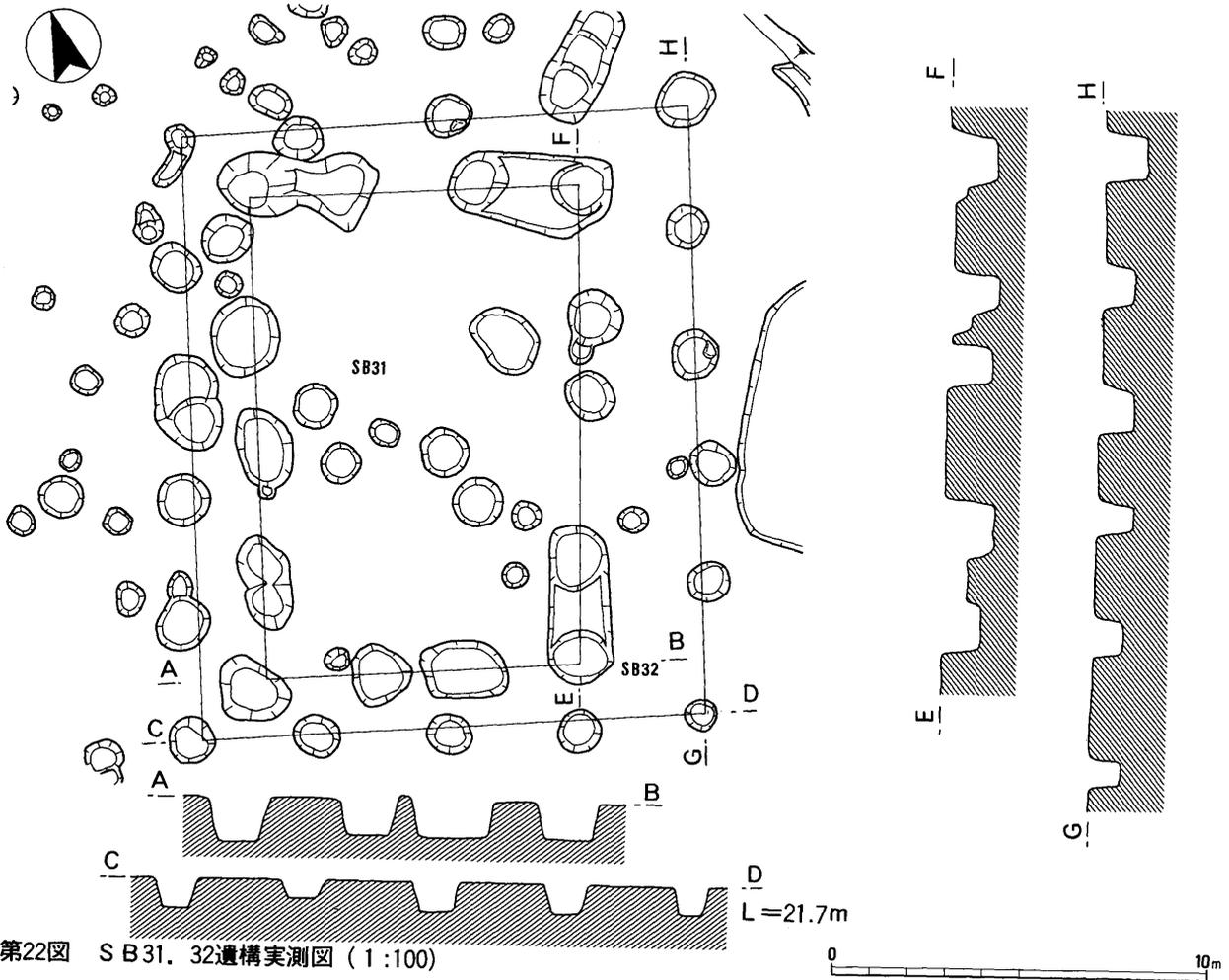
S B 20 S B 18およびS B 19を切っているが、柱掘形からの出土遺物はなく、深さは約40~60cmである。

S B 25 調査区南壁で切られているため、全体規模は不明であるが、2間以上×2間の南北棟と考えられる。掘形の深さは約20cmである。

S B 27 調査区南壁で切られるため全容は不明であ



第21図 調査区位置図 (1 : 2,000)



第22図 S B31. 32遺構実測図 (1 : 100)



第23図 遺構平面図 (1 : 200)

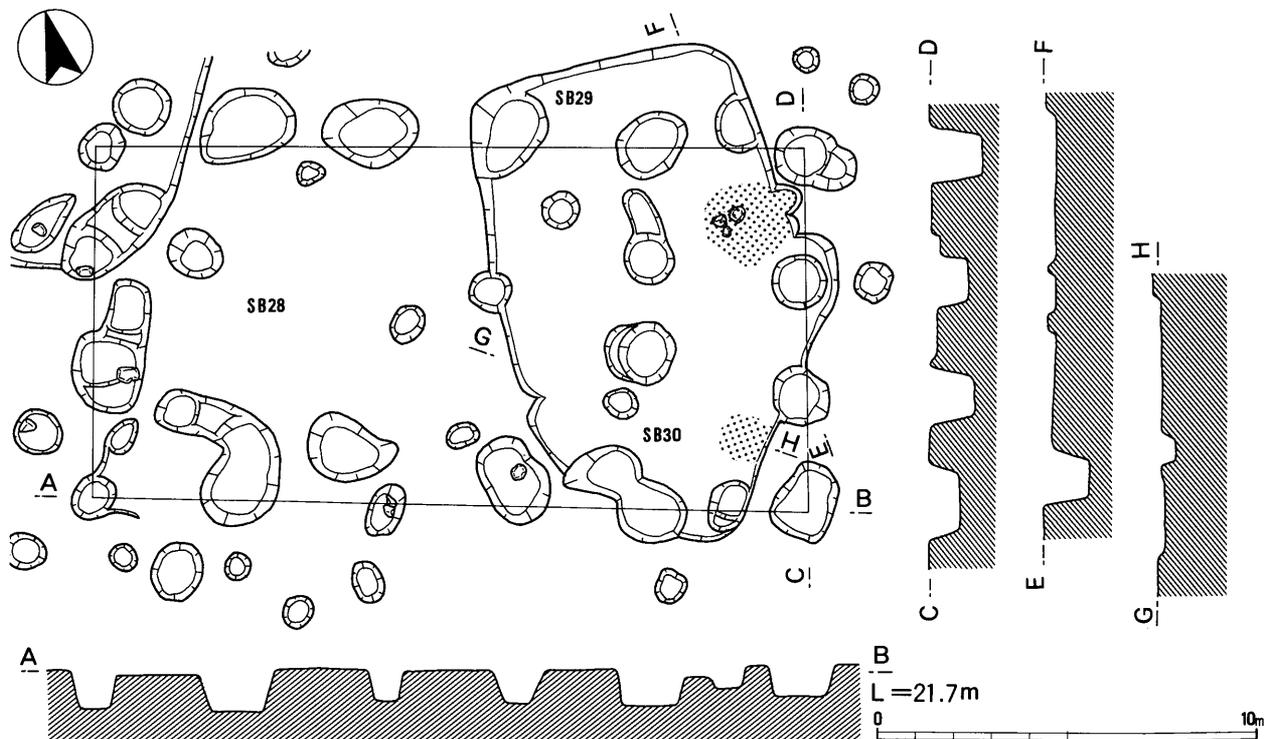
竪穴住居

名称	規模NS×EW (m)	深さ (cm)	方向 (カマドを中心として)	カマドの位置	備 考
S B 2	4.3×4.2	7~10	N 90° E	東辺やや南	S B 3を切る
S B 3	2.2×3.1	26~31	N 90° E	東辺やや南	
S B 5	2.7×2.5	23~27	N 90° E	東辺やや南	
S B 6	2.5×2.5	38~41	N 30° E	北東辺やや東	S B 7がS B 6を切る
S B 7	4.0×4.0	17~22	N 50° E	北東辺やや東	
S B10	4.5以上×(6?)	6~12	N 50° E	東辺やや南	
S B11	3.1×3.5	4~ 6	N 50° W	北辺やや東	
S B12	4.2×4.0	10~12	N130° E	南東辺やや東	
S B13	3.5×3以上	29~37	- (-)	-	
S B15	2.6×2.5	7~20	N 35° E	北東辺中央	
S B16	3.8×5.2	15~18	E110° E	南東辺やや	
S B17	3.8×4.0	20	N 5° E	北東辺やや東	
S B18	5.6×4.7	8~13	N 90° E	東辺やや中央	
S B19	2.3以上×-	5~ 9	N130° E	南東辺やや東	
(S B21)	- ×(3.0)	4~ 6	- (-)	-	
(S B22)	(4.0)×(5.0)	3~ 6	- (-)	-	
(S B23)	(4.0)×(3.5)	4~ 7	- (-)	-	
S B26	- ×4.6	12~14	N 20° E	北東辺やや東	
S B29	4.5×3.8	12~20	N 80° E	東辺中央	S B30と切り合う
S B30	4.0×3.0	7~15	N110° E	南東辺やや南	
S B33	4.0×2.8	5~ 8	- (-)	-	

掘立柱建物

名称	規模 (m×m)	柱 間 (桁 行)	梁 行	桁 行	梁 行	棟方向	備 考
S B 1	2 以上×1 以上	2.7	1.6	(2.7以上)	3.2以上	N 7° W	
S B 4	2 × 2	1.8	1.6+1.7	3.6	3.3	N 7° E	
S B 9	3 × 2	1.7	1.7	5.1	3.4	N 0° E	東側に柱列
S B14	5 × 3	W:2.2+1.5+1.8+1.5+1.8 E:1.5+2.0+2.0+1.5+1.8	1.6+1.4+1.5	8.8	4.5	N 15° W	
S B20	3 × 2	2.1+2.0+2.1	N:2.1+1.8 S:1.8+2.1	6.2	3.9	N 0° E	
S B25	2 以上×2	W:2.3+1.5以上 E:2.6以上	2.3	3.7以上	4.6	N 3° E	
S B28	5 × 3	N:2.0+1.8+1.7+1.8+2.1 S:2.0+1.9+1.8+1.8+1.9	E:1.5+1.7+1.5 W:1.5+1.5+1.7	9.4	4.7	N 0° E	
S B31	4 × 3	W:1.8+1.5+1.5+1.7 E:1.8+1.2+2.0+1.5	1.5	6.5	4.5	N15° E	
S B32	5 × 4	1.7+1.7+1.5+1.6+1.7	1.8	8.3	7.0	N15° E	SB31の庇か?
S B27	1 以上×2	(1.2以上)	1.5	(1.2以上)	3.0	N 7° E	

第20図 建物遺構一覧表 (竪穴住居、掘立柱建物とも方位は真北)



第24図 SB28, 29, 30実測図(1:200)

るが、1間以上×2間の南北棟とも考えられるが、柱列の可能性も否定出来ない。柱堀形より墨書のある土師器杯(66)が出土している。深さは15~30cmと浅い。

SB28 北西隅の柱堀形より外面底部に「門」の墨書のある土師器杯が出土している。

SB31 柱堀形の一部に布堀りの手法がとられている。

SB32 柱堀形はSB31より小さい。SB31よりSB32の方が約10cm浅い。

#### (3) 井戸

SE34 東西1.3m、南北1.3mのほぼ円形の素堀の井戸である。深さは2.2m以上であったが、調査区端のため完掘できなかった。出土遺物に土師器甕などがある。

SE35 東西3.5m×南北3m、深さ2mの素堀り

の井戸である。出土遺物は調査遺構中最も多く、須恵器杯蓋、土師器甕などがある。曲物等木片は確認できなかった。

#### (4) 溝

SD36 長さ10.5m、幅20cmの溝である。深さ13~23cmでN120°Eの調査区外へ流れる。出土遺物には土師器甕片と思われるものが少量ある。

#### (5) 不明土坑

SK8 東西2.7m、南北3.8m、深さ13~16の土坑である。竪穴住居の可能性もあるが、埋土が他のものはすべて暗褐色をしているのに対し、SK8は黄褐色をしていたため土坑とした。焼土も確認できていない。出土遺物には土師器甕などがある。

## 4. 遺物

出土遺物としては、飛鳥時代から平安時代までの土師器、須恵器等があり、整理箱に約70箱程度である。完形品もあり、遺構に伴うものが多い。

### 1. 飛鳥時代遺構出土遺物

#### ○SB10出土遺物

**土師器甕(1・2)** 器壁の厚い、口径20cm前後の甕である。口縁部は外反しながら直上に立ち上がり、端部は角ばる。外面頸部にヘラナデ後ヨコナデをしたと思われる工具の痕跡が見られる。ハケメの単位は1が5本/cmで、2が8本/cmである。

A (3) 口径16cmの大型の椀である。体部から口縁部まで同じ厚さで、口縁部はほぼ直上を向く。

土師器椀B (4~7) 口径11cm前後の椀で、器形は3に準じる。5は内面体部に放射状暗文をもち、外面底部に「丸」という墨書をもつ。

須恵器杯蓋 (8) 口径10.4cmの、宝珠つまみをもつ杯蓋である。猿投岩崎17号窯に比定できよう。<sup>⑦</sup>

○SB6出土遺物

土師器皿 (12・13) 口径18cm前後の皿である。12は口縁端部がやや内側につまみ出され、13は体部から直線的に上方外を向く。

土師器甕 (14) 頸部が厚い、口径15.5cmの甕である。口縁端部は斜め上方につまみ出される。外面は体部上方にタテ方向に工具で面取を施し、体部中央部はタテ方面のハケメ (5本/cm) となる。内面は体部上方にヨコ方面のヘラケズリ、体部中央部がナメ方向のヘラケズリ、内面底部がヘラケズリとなっている。

2. 奈良時代の遺構出土遺物

○SE35出土遺物

土師器甕A (15~17) 口径は14~18cmとやや幅があるが、いずれも外面体部タテ方向のハケメ、内面体部ヨコ方向のハケメとなっている。ハケメの単位は15が外面は10本/cm、内面が8本/cm。16は外面が8本/cm、内面が7本/cmとなり、18は外面と内面共に8本/cmである。

土師器甕B (18) 口径36cmと大型で、体部が直

上へのび、口縁部が大きく外反する甕である。体部外面のハケメの単位は8本/cmである。

土師器甕C (19~21) 口径15~21cm前後の甕である。19と21は外面体部が磨耗のため調整不明であるが、外面体部タテ方向のハケメ、内面体部ヨコ方向のヘラケズリとなろう。20のハケメの単位は7本/cmである。

土師器皿 (22~24) 22はややひずみが大きく、口縁端部がやや内湾気味、24は体部から端部まで直線的にのびる。

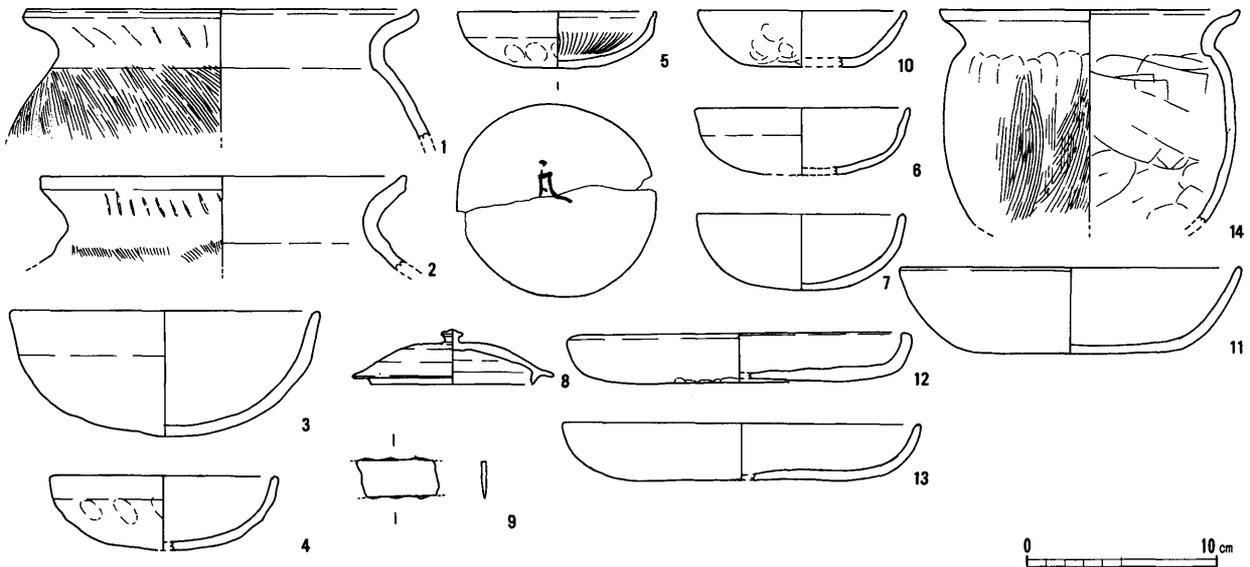
土師器椀 (25・26) 口径11~13.5cmの杯であるが、いずれも外面にユビオサエの痕跡をもつ。

須恵器杯蓋 (27) 宝珠つまみをもち、口縁先端が真下を向く口径17cmの杯蓋である。天井部2/3がヘラケズリとなり、猿投折戸10号窯に比定できよう。<sup>⑧</sup>

須恵器杯 (28~30) 高台をもたない杯は、体部から口縁端部まで直線的にのびる。高台をもつ杯でも、29は口縁端部がほぼ直上を向くのに対し、30は端部でやや外反する。

○その他の遺構出土品

土師器甕A (31~35) 口径20~23cm前後で、外面体部にタテ方向のハケメ、内面体部にヨコ方向のハケメをもつ甕である。ハケメの単位は31が外面6本/cmで内面5本/cm、32が外面・内面共に7本/cm、33が外面8本/cmで内面9本/cm、34は外面6本/cmで内面5本/cm、35は外面7本/cmで内面6本/cmである。口縁端部はつまみ上げられるもの31・



第25図 SB10, SB6出土遺物 (1:4)

32と、直上につまみ上げるもの33・34と、上方外につまみ上げるもの35、がある。36は内面体部下方にヘラケズリを施す。

**土師器甕B (37・38)** 口径約16~20cmで、外面体部にタテ方向のハケメ、内面体部にヨコ方向のヘラケズリを施す甕である。ハケメの単位は37が7本/cm、38が6本/cmである。口縁端部は若干つまみ出され、やや上を向く。

**土師器甕C (40)** 口径15.6cm、口縁端部がやや上向きにつまみ出される甕である。外面は体部上方がタテ方向のハケメ(12本/cm)、体部下方がヨコ方向のハケメ(9本/cm)、を施す。内面は体部上方がヨコ方向のハケメ(6本/cm)、体部下方がタテ方向のヘラケズリを施す。

**土師器甕D (41~42)** 口径38~40cmの大型の甕である。器壁は厚く、体部の最大径がほぼ頸部付近にあり、口縁部は大きく外反し、いずれも端部で直上方向につまみ出す。ハケメの単位は41が9本/cmで、42の外面が約7本/cmである。

**土師器甕E (43)** 口径38cmの把手のつく大型の甕である。器壁は厚く、口縁部は直線的に斜め上方を向く。端部断面は四角となる。ハケメの単位は外面が6本/cm、内面が7本/cmである。

**土師器甕F (39)** 口径11cm、口縁部は大きく外反するが、端部近くでつまみ出され、やや上を向く。体部は残りが悪いため、調整等不明である。

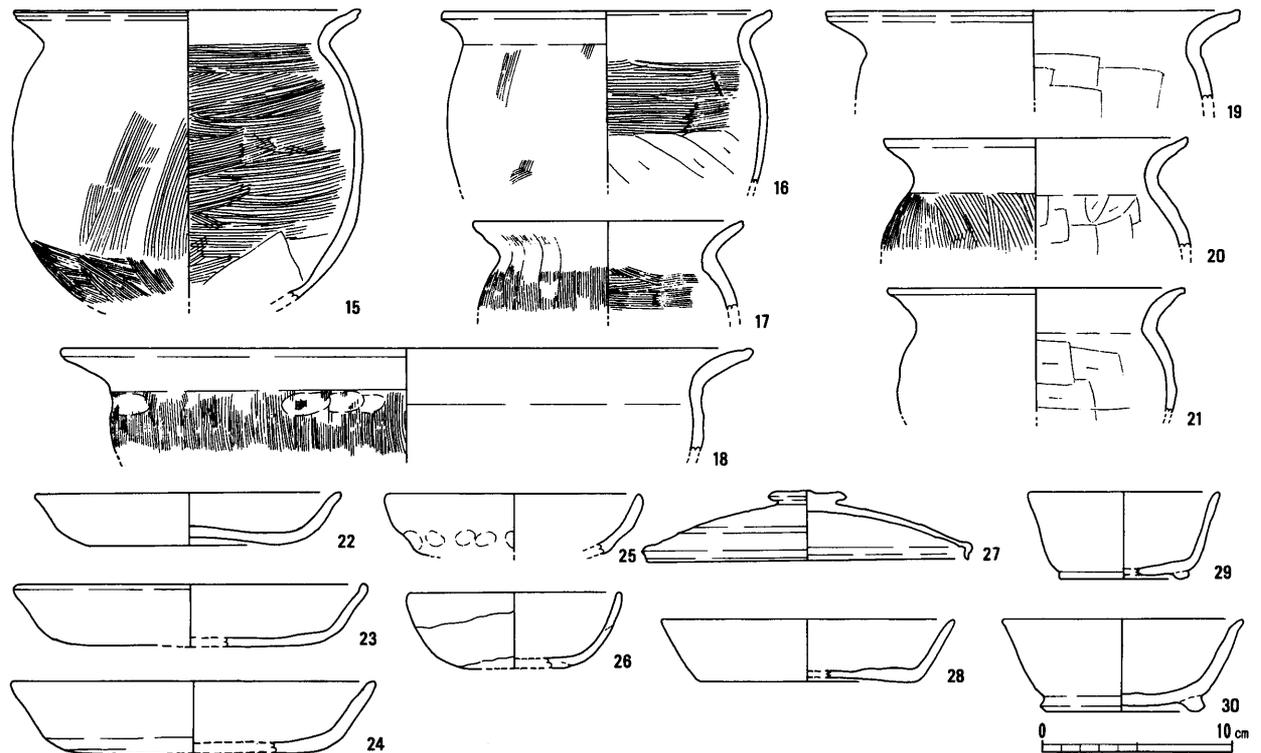
**土師器甕(44)** 口径22.4cmで、口縁部まで斜め上方へ直線状にのび、端部はつまみ出されやや内を向く。把手部分は胴部穿孔し、粘土を補填する。外面体部はタテ方向のハケメ(約8本/cm)で磨耗が著しい。内面体部上方はヨコ方向のハケメ(9本/cm)、中央はハケメ後ナデ、下方が上方向へのヘラケズリを施す。

**土師器杯(50)** 体部は緩やかに立ち上がり、口縁端部はつまみ出され、やや内側を向く。S B28の北西端の柱穴より出土。外面底部に「門」の墨書をもつ。

**土師器皿(51)** 口径20.4cmの皿である。口縁は急に立ち上がり、端部断面は四角となる。外面底部に「十」の墨書をもつ。

**須恵器杯A (60・62)** ハリツケ高台をもつ杯である。60は体部から口縁部まで直線的に立ち上がるが、62は体部から口縁部へ立ち上がりながら、緩く外反する。

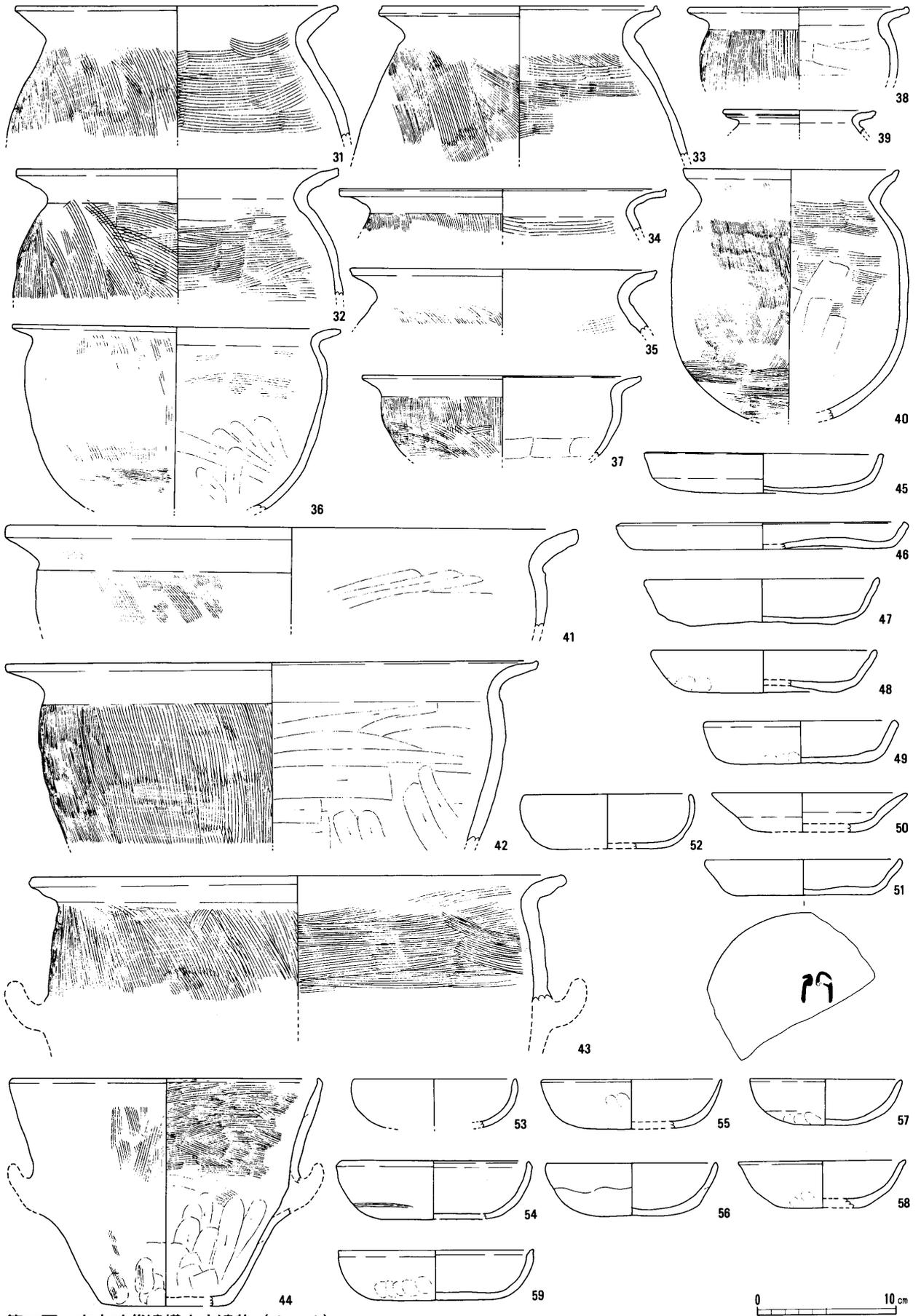
**須恵器杯B (61)** 高台をもたない杯である。体部から口縁部まで直線的に立ち上がり、端部は斜め



第26図 SE35 出土遺物(1:4)

No.	実測番号	出土地点	器種	法量cm	色調	胎土	焼成	残存率	成形の特徴	備考
37	06-1	S B 16	土師器鉢	□20.2	黄褐	やや粗	良	1/5	口縁部ヨコナデ 外面体部タテハケ 内面体部ヨコヘラケズリ	
38	18-3	S E 34	土師器小甕	□15.8	浅黄褐	やや粗	良	1/4 3/4	口縁部ヨコナデ 外面体部タテハケ 内面ヘラケズリ	
39	05-4	S B 5	土師器小甕	□11.0	にぶい 褐	密	良	口縁 1/2	口縁部ヨコナデ	
40	14-3	S B 15	土師器小甕	□15.6	褐	やや密	良	3/5	口縁部ヨコナデ 外面体部ヨコハケ タテヘラケズリ 内面体部ハケ等	
41	15-2	S B 18	土師器甕	□40.2	灰白	やや粗 1~2mm の長石等含む	良	口縁 1/4	口縁部ヨコナデ 外面体部タテハケ 内面体部	
42	11-3	S B 29	土師器甕	□38.0	淡黄褐	密 0.5mm前後の 長石等含む	良	1/12	口縁部ヨコナデ 外面体部から頸部 タテハケ 内面体部ヘラケズリ	
43	15-1	S B 2	土師器甕	□38.0	灰白	密	良	口縁 3/5	縁部ヨコナデ 外面体部タテハケ 内面体部ヨコハケ	
44	27-1	S B 32	土師器甕	□22.4 高6.45	淡黄褐	やや粗 1.5~ 4mmの長石等含む	良	1/6	縁部ヨコナデ 外面体部タテハケ 内面体部ヨコハケ ナデケズリ	
45	06-6	S B 4	土師器皿	□17.2 高2.8	褐	密	良	1/6	縁部ヨコナデ 外面底部不明	
46	10-2	S B 18	土師器杯	□17.0 高3.3	褐	密	良	1/2	口縁部ヨコナデ 底部不明 (ヘラケズリ?)	底部外面に「メ」のヘラ記号
47	20-2	S B 32	土師器杯	□16.0 高3.1	褐	密 0.5~2mm の長石含む	良	3/10	口縁部ヨコナデ 外面底部ユビオサエ	
48	35-1	S B 2	土師器杯	□14.0 高3.1	褐	密 0.5mm前後の 長石等含む	良	ほぼ 完形	口縁部ヨコナデ 外面体部ユビオサエ	
49	03-1	S B 19	土師器杯	□13.0 高2.8	淡褐	やや粗 0.5~ 2mmの長石等含む	並	1/5	口縁部ヨコナデ 外面底部不明	
50	26-4	S B 28	土師器杯	□14.0 高2.6	褐	密 0.5mm以下の 長石等含む	良	2/5	口縁部ヨコナデ 外面体部ユビオサエ	墨書あり
51	24-4	S E 17	土師器皿	□20.4 高1.9	褐	密 0.1~1mmの 長石等含む	良	1/5	口縁部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	墨書あり
52	02-8	S E 13	土師器杯	□12.0 高3.9	黄褐	密 0.5~1mm 前後の長石等含む	良	1/5	口縁部ヨコナデ 外面体部ユビオサエ	
53	03-2	S E 26	土師器碗	□11.6	淡黄褐	密	良	4/5	口縁部ヨコナデ	
54	05-5	S E 12	土師器杯	□13.6	にぶい 黄褐	密	良	1/5	口縁部ヨコナデ	
55	06-7	S E 9	土師器碗	□13.0 高3.5	黄褐	密	良	1/5	口縁部ヨコナデ	
56	02-7	S E 13	土師器碗	□12.2 高3.8	褐	密 0.5~2mmの 長石等含む	良	1/2	口縁部ヨコナデ 外面底部ユビオサエ	粘土接合痕あり
57	05-6	S E 16	土師器杯	□11.0 高3.3	にぶい 黄褐	密	良	1/4	口縁部ヨコナデ 外面底部ユビオサエ	粘土接合痕あり
58	05-1	S E 12	土師器杯	□12.0 高3.4	褐	やや粗 0.5~ 2mmの長石等含む	良	1/4	口縁部ヨコナデ 外面底部ユビオサエ	粘土接合痕あり
59	01-5	S E 17	土師器杯	□14.0 高3.6	淡褐	密 砂混金雲母 含む	良	2/5	口縁部ヨコナデ 外面底部ユビオサエ	
60	32-1	S E 3	須恵器杯	□18.4 高6.7	灰白	密	良	3/5	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ハリツケ高台
61	01-2	S E 17	須恵器杯	□13.6 高4.4	暗灰	密	良	1/6	口縁部と内面ロクロナデ 外面底部ヘラケズリ	
62	33-1	S E 28	須恵器杯	□14.0 高3.9	灰白	密 1~2mmの 長石含む	良	2/5	ロクロナデ 外面底部ヘラケズリ	ハリツケ高台
63	06-2	S E 16	鉄製品鎌?	□7.4 幅3.1	暗赤					基部折り返し約90°
64	03-8	S E 30	土師器甕	□13.0	淡褐	密 0.5~1.5mm の長石含む	良	2/5	口縁部ヨコナデ 外面体部タテハケ 外面底部ユビオサエ	
65	06-3	S E 30	土師器甕	□22.5	黄褐	やや粗	良	1/8	口縁部ヨコナデ 外面体部ヨコハケ 内面体部ヨコハケ	
66	08-5	S E 27	土師器杯	□12.4 高2.8	褐	密	良	9/10	口縁部ヨコナデ	墨書あり
67	11-2	S B 30	土師器杯	□16.0 高3.3	褐	密 0.5mm前後の 雲母含む	良	1/6	口縁部ヨコナデ 底部ユビオサエ	
68	11-1	S B 30	土師器杯	□13.8 高3.5	褐	密 0.5mm前後の 長石等含む	良	2/5	口縁部ヨコナデ 外面底部ヘラケズリ ユビオサエ	
69	06-4	S B 30	土師器皿	□14.0 高3.0	褐	密	良	1/2	口縁部ヨコナデ	
70	05-7	S B 5	土師器皿	□16.0	褐	密	良	4/5	口縁部ヨコナデ	
71	05-8	S B 5	土鉢		黄褐	密	良	ほぼ 完形	重さ7.55g 最大径1.6 端部径0.7	墨書あり
72	06-5	S B 30	短頸壺	□5.0	灰緑	密	良	1/4	口縁部ヨコナデ	長さ4.7 穿孔径0.3

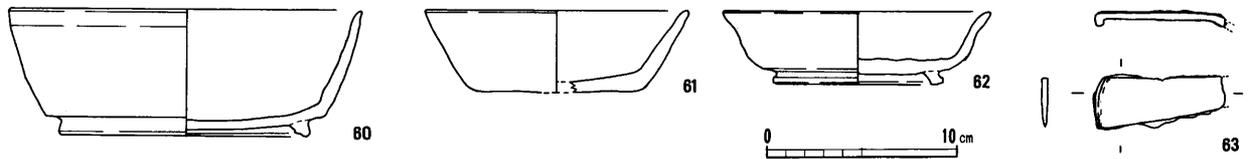
第21表 遺物観察表(1)



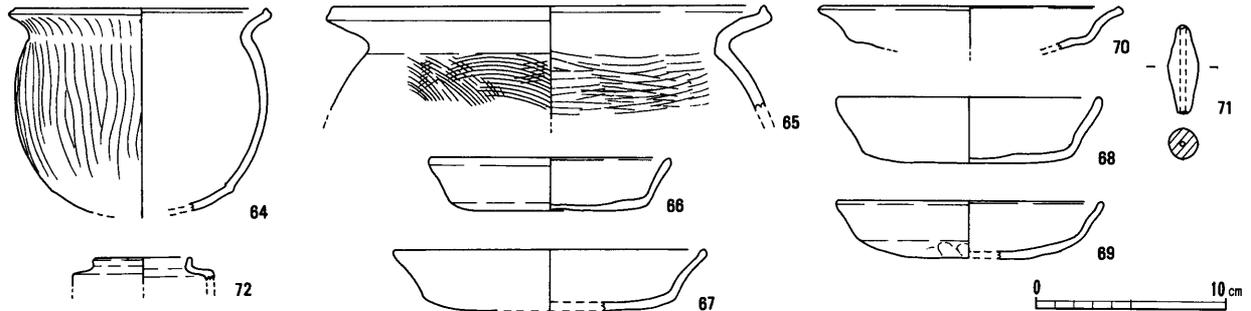
第27図 奈良時代遺構出土遺物 (1 : 4)

No.	実測番号	出土地点	器種	法量cm	色調	胎土	焼成	残存率	成形の特徴	備考
1	02-5	S B 10	土師器 甕	□20.2	淡黄	密 0.5~2mm の長石等含む	良	口縁 1/2	口縁部ヨコナデ 外面体部タテハケ	
2	34-3	S B 10	土師器 甕	□18.9	淡黄	粗 長石などの 細粒含む	良	口縁 3/4	口縁部ヨコナデ 外面体部タテハケ	
3	02-4	S B 10	土師器 椀	□16.0 高 6.7	淡黄	密 0.5mm前後の 長石含む	良	2/3	口縁部ヨコナデ 外面体部ユビオサエ	
4	02-1	S B 10	土師器 椀	□11.5 高 3.9	淡黄	密 0.5mm前後の 長石含む	良	7/10	口縁部ヨコナデ 外面体部ユビオサエ	
5	36-1	S B 10	土師器 椀	□10.4 高 3.0	淡黄	密 0.5mm前後の 金雲母含む	良	ほぼ 完形	口縁部ヨコナデ 外面体部ユビオサエ	墨書あり、暗文あり
6	02-3	S B 10	土師器 椀	□11.0 高 3.5	淡黄褐	密 0.5~1mm 前後の長石含む	良	1/7	口縁部ヨコナデ 外面体部ユビオサエ	
7	34-2	S B 10	土師器 椀	□10.8 高 4.0	浅褐	密	良	口縁 1/4	口縁部ヨコナデ 底部ユビオサエ	
8	34-1	S B 10	須恵器 杯蓋	□10.4 高 3.8	灰	密 長石の細粒 含む	良	1/2	ロクロ回転 外面天井部ケズリ 口縁部ヨコナデ	宝珠つまみをもつ
9	02-6	S B 10	鉄製品 小刀?	幅 2.0	暗赤					両端が欠ける
10	04-3	S B 6	土師器 杯	□11.0 高 3.0	淡黄褐	やや密	良	1/8	口縁部ヨコナデ 底部ユビオサエ	
11	05-3	S B 6	土師器 杯	□18.0 高 4.6	褐	密	良	1/2	口縁部ヨコナデ	
12	04-2	S B 6	土師器 皿	□18.0 高 3.1	褐	密 1mm以下の 長石含む	良	1/6	口縁部ヨコナデ 底部ユビオサエ	
13	04-1	S B 6	土師器 皿	□18.8 高 3.1	褐	やや密 長石等 の微粒子含む	並	1/4	口縁部ヨコナデ 底部ユビオサエ	
14	04-4	S B 6	土師器 甕	□15.5	黄褐	やや密 1.5mm 以下の石英含む	良	口縁 1/3	口縁部ヨコナデ 外面体部タテハケ 内面体部ヨコケズリ	
15	21-1	S E 35	土師器 甕	□18.0	外灰褐 内褐	やや粗 1mm~ 2mmの長石石英	良	1/2	口縁部ヨコナデ 外面体部タテハケ 底部ヨコハケ 内面体部ヨコハケ等	
16	11-5	S E 35	土師器 甕	□17.0	淡黄褐	密 0.5~1mm 前後の長石等含	良	1/3	口縁部ヨコナデ 外面体部タテハケ 内面体部ヨコハケ	
17	19-3	S E 35	土師器 甕	□14.0	内黄褐 外赤褐	密 極小の長石 等含む	良	1/5	口縁部ヨコナデ 外面体部タテハケ 内面体部ヨコハケ	
18	19-5	S E 35	土師器 甕	□36.0	褐	密 0.5~1.5mm の長石等含む	良	口縁 1/10	口縁部ヨコナデ 外面体部タテハケ 内面体部ヨコハラケズリ	
19	19-4	S E 35	土師器 甕	□21.7	淡黄褐	密	良	1/8	口縁部ヨコナデ 内面体部ヨコハラケズリ 外面不明	
20	19-2	S E 35	土師器 甕	□15.8	淡黄褐	密 0.5~1.5mm の長石含む	良	1/2	口縁部ヨコナデ 外面体部タテハケ 内面体部ヨコハラケズリ	
21	19-1	S E 35	土師器 甕	□15.4	内灰褐 外褐	密	良	1/6	口縁部ヨコナデ 外面体部ハケメ? 内面体部ヨコハラケズリ	
22	12-2	S E 35	土師器 杯	□15.8 高 2.8	褐	密	良	1/3	口縁部ヨコナデ 外面底部ユビオサエ	
23	12-5	S E 35	土師器 杯	□18.0 高 3.3	褐	密 0.5mm以下の 長石等含む	良	2/5	口縁部ヨコナデ 底部ハラケズリ	
24	12-4	S E 35	土師器 杯	□19.0 高 3.8	褐	密 0.5~1mm の長石含む	良	1/4	口縁部ヨコナデ 底部ハラケズリ	
25	12-3	S E 35	土師器 杯	□13.5	淡黄褐	密 0.5~1.5mm の長石含む	良	口縁 1/3	口縁部ヨコナデ 外面体部ユビオサエ	
26	12-1	S E 35	土師器 杯	□11.0 高 4.0	淡黄褐	密 0.5~1.5mm の長石含む	良	1/5	口縁部ヨコナデ 外面体部から底部ユビオサエ	粘土接合痕あり
27	18-2	S E 35	須恵器 杯蓋	□17.0 高 3.7	灰白	密	良	3/5	ロクロ回転 天井部ハラケズリ	宝珠つまみをもつ
28	12-6	S E 35	須恵器 杯	□15.2 高 3.3	淡緑灰	密 0.5~2mm の長石含む	良	1/2	ロクロ回転 口縁部ヨコナデ	
29	12-8	S E 35	須恵器 杯	□ 9.8 高 4.6	青灰	密 0.5~2mm の長石含む	良	1/6	ロクロ回転 口縁部ヨコナデ	ハリツケ高台
30	12-7	S E 35	須恵器 杯	□12.4 高 4.9	内灰赤 外青灰	密 0.5~2mm の長石金雲母	良	2/3	ロクロ回転 口縁部ヨコナデ	ハリツケ高台
31	09-1	S B 12	土師器 甕	□22.8	淡褐	密	良	口縁 1/4	口縁部ヨコナデ 外面体部タテハケ 内面体部ヨコハケ	
32	03-3	S B 26	土師器 甕	□22.8	褐	密 0.5~1.5mm の長石含む	良	口縁 1/8	口縁部ヨコナデ 外面体部タテハケ 内面体部ヨコハケ	
33	09-2	S B 15	土師器 甕	□19.6	淡黄褐	やや密	良	口縁 2/5	口縁部ヨコナデ 外面体部タテハケ 内面体部ヨコハケ	
34	08-3	S B 14	土師器 甕	□23.4	浅黄褐	密	良	1/6	口縁部ヨコナデ 外面体部タテハケ 内面体部ヨコハケ	
35	16-2	S B 28	土師器 甕	□22.0	浅黄褐	密 1mm以下の 長石含む	良		口縁部ヨコナデ 外面体部タテハケ 内面体部ヨコハケ	
36	07-1	S B 3	土師器 甕	□23.2	浅褐	密 砂混金雲母 含む	良	1/6	口縁部ヨコナデ 外面体部タテハケ 内面体部ヨコケズリ	

第22表 遺物観察表(2)



第28図 奈良時代遺構出土遺物（1：4）



第29図 平安時代遺構出土遺物（1：4）

### 3. 平安時代遺構出土遺物

土師器甕A（64） 口径13cmで、外面だけにタテ方向のハケメをもつ甕である。ハケメの単位は3本/cmと粗い。

土師器甕B（65） 口径22.5cmで、内外面共にヨコ方面のハケメをもつ甕である。ハケメの単位は外面が4本/cm、内面が3本/cmである。

土師器杯（66～70） 口径約13～16cmとやや幅はあるが、いずれも体部で外反しながら立ち上がる。66は底部外面に幅2mm、長さ1弱の墨書痕跡がある。70も外面底部に、文字のはねの部分であろうか「」の墨書痕跡をもつ。

土錘（72） 口径5.0cm、外面に灰緑色の自然釉がかかる。

## 5. 小 結

打田遺跡は平成2年度のは場整備事業にともなう分布調査によって確認された新発見の遺跡である。今回の調査では、古代の集落跡の一部を検出するこ

とができたが、当遺跡は来年度も調査の予定がある。2年間にわたる調査の結果により、この地域における古代の集落の性格の解明が期待できよう。

（福田哲也）

（註）

- ① 松阪市編さん委員会 『松阪市史』第二巻 史料篇考古 1978
- ② 松阪市史編纂委員会 『松阪市史』第一巻史料篇 自然 蒼人社 1978
- ③ 松阪市教育委員会 『川原表古墳群他調査概報』 1989
- ④ 三重県埋蔵文化財センター 『三重県埋蔵文化財センター年報』 1 1990
- ⑤ 三重県埋蔵文化財センター 『鳥戸遺跡発掘調査報告』 1990
- ⑥ 三重県教育委員会 『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告概報』 1986
- ⑦ 愛知県教育委員会 『愛知県古窯群分布調査報告（Ⅲ）』 1983



航空写真

(松阪農林事務所提供)



調査風景

P L. 6



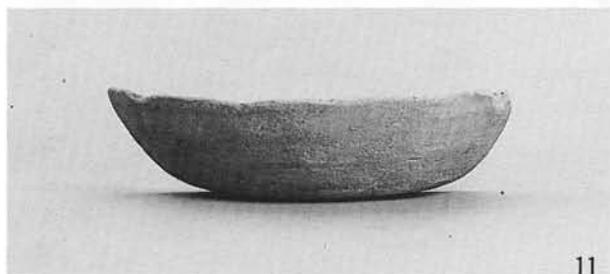
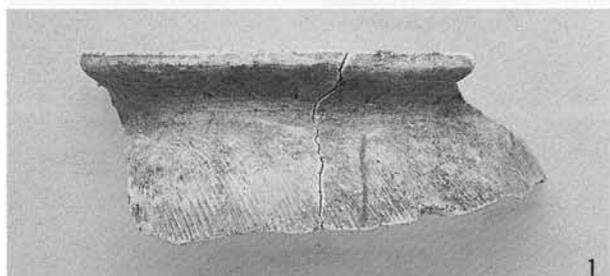
S B 9



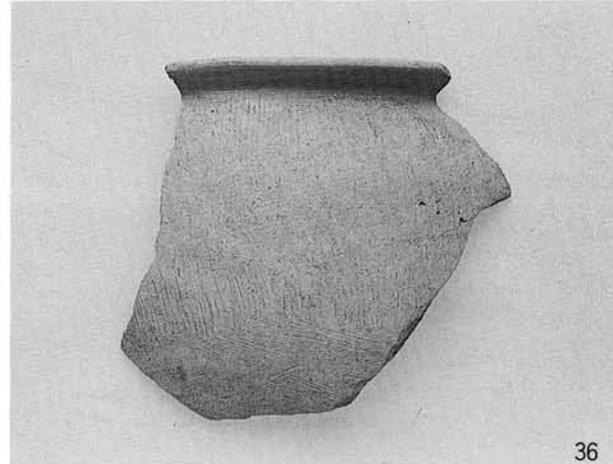
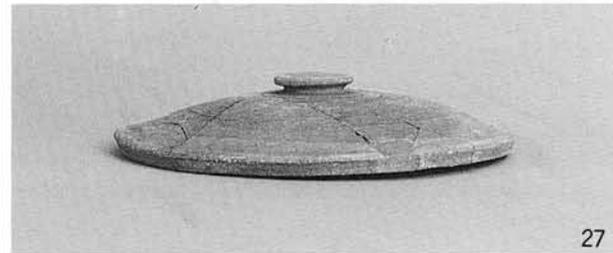
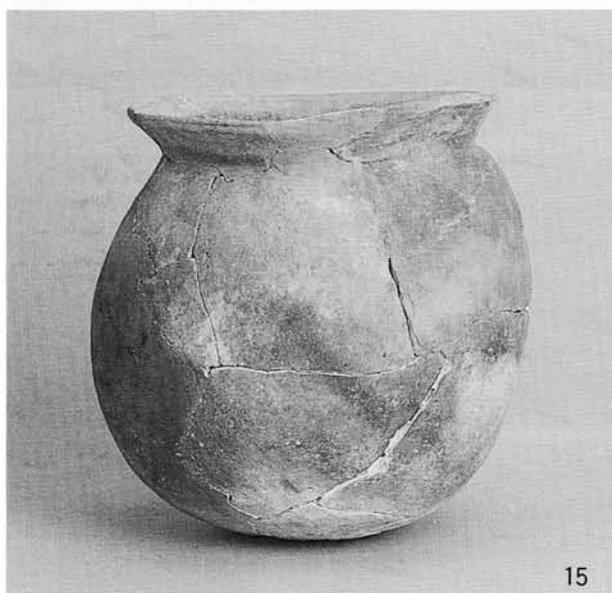
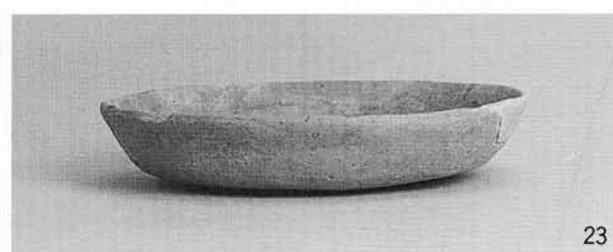
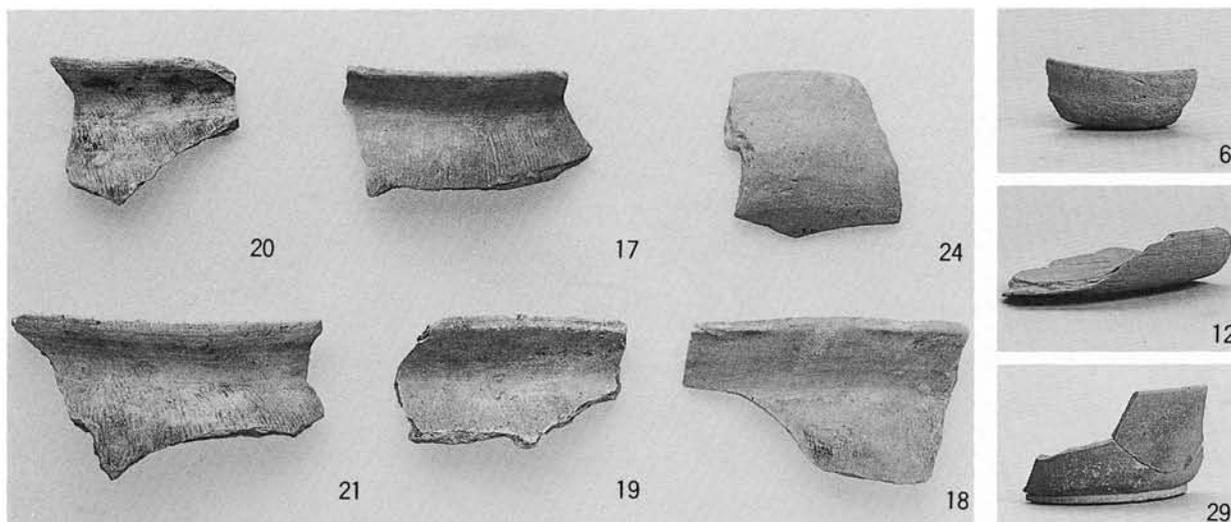
S B31. 32



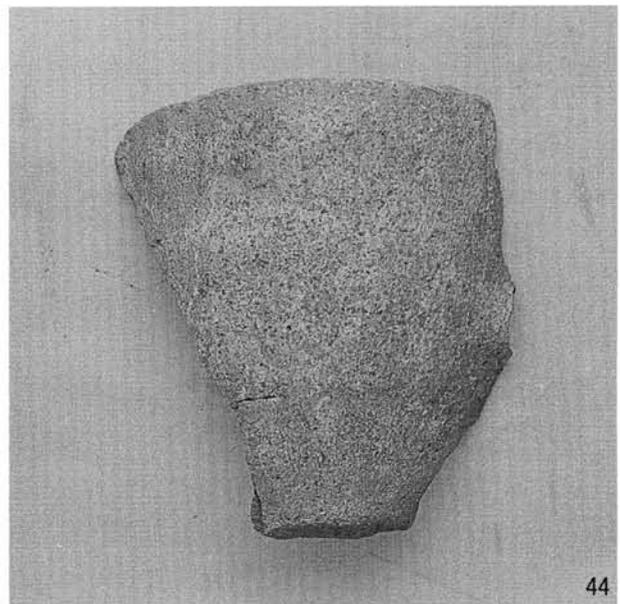
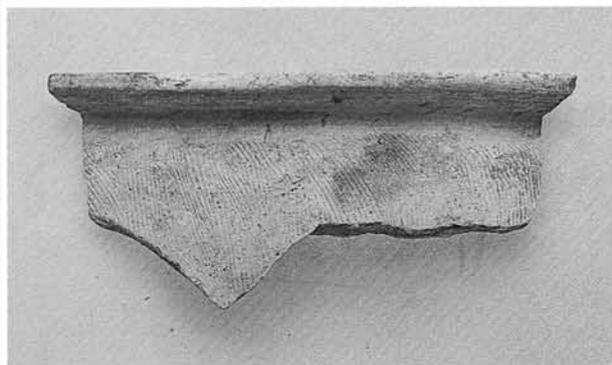
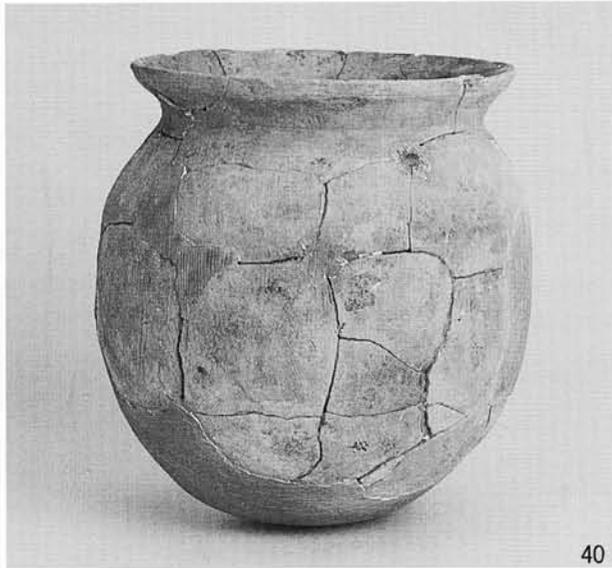
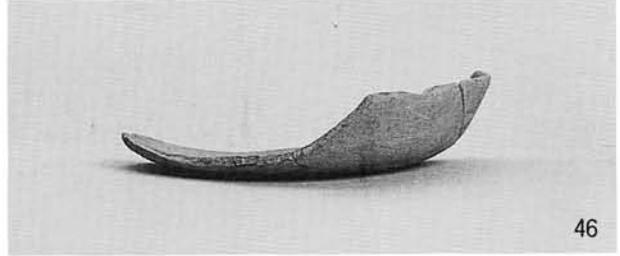
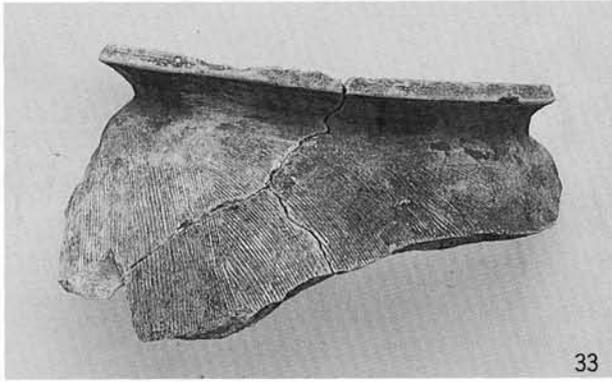
S B15 遺物出土状況



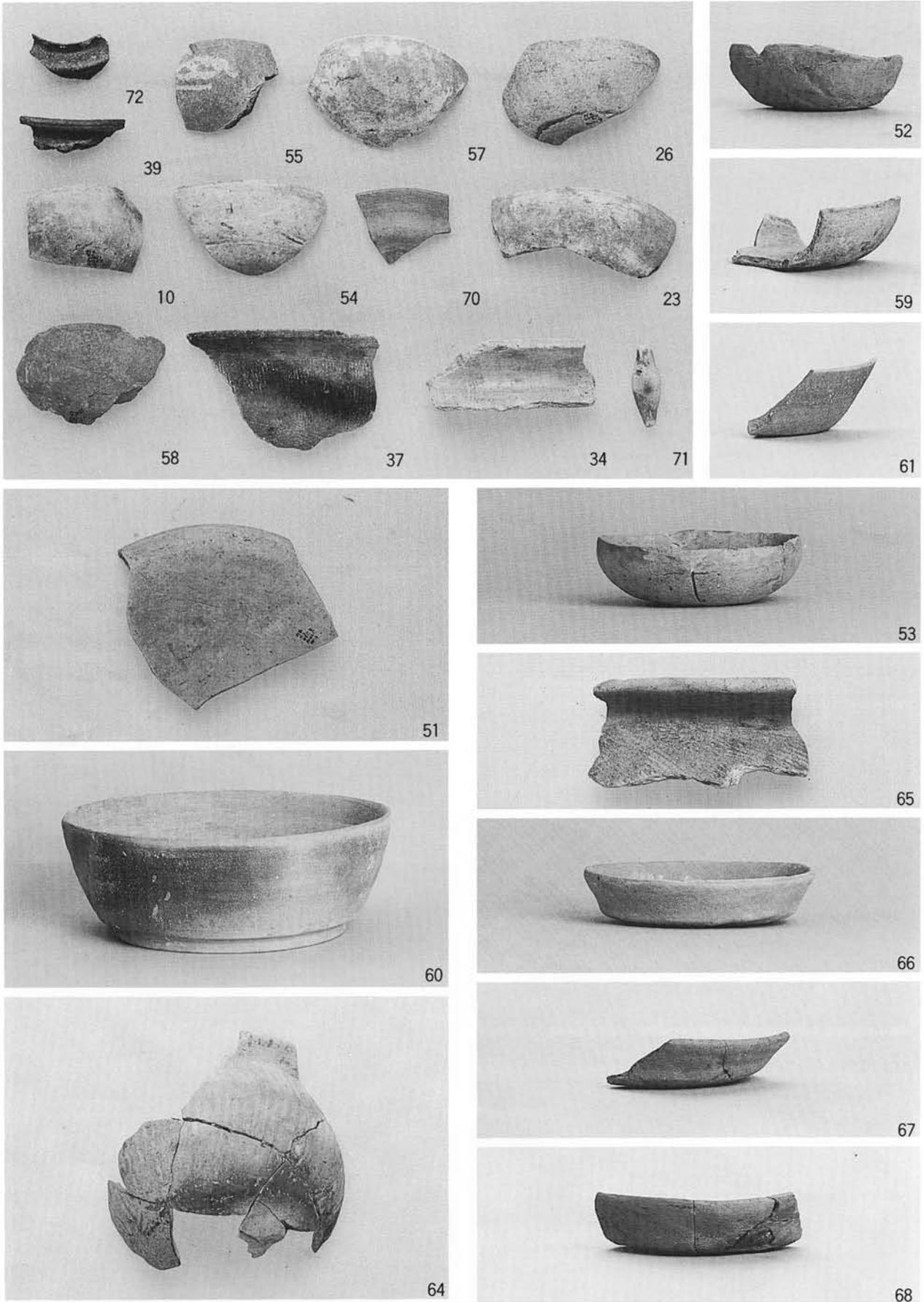
出土遺物 (1 : 3)



出土遺物 (1 : 3)



出土遺物 (1 : 3)



出土遺物 (1 : 3)

## Ⅱ 松阪市伊勢寺町 伊勢寺遺跡

### 1 調査の経過

県営ほ場整備に伴う伊勢寺廃寺を含んだ伊勢寺遺跡の調査は、昭和62年度に始まり、今年度で最終年度を迎えた。

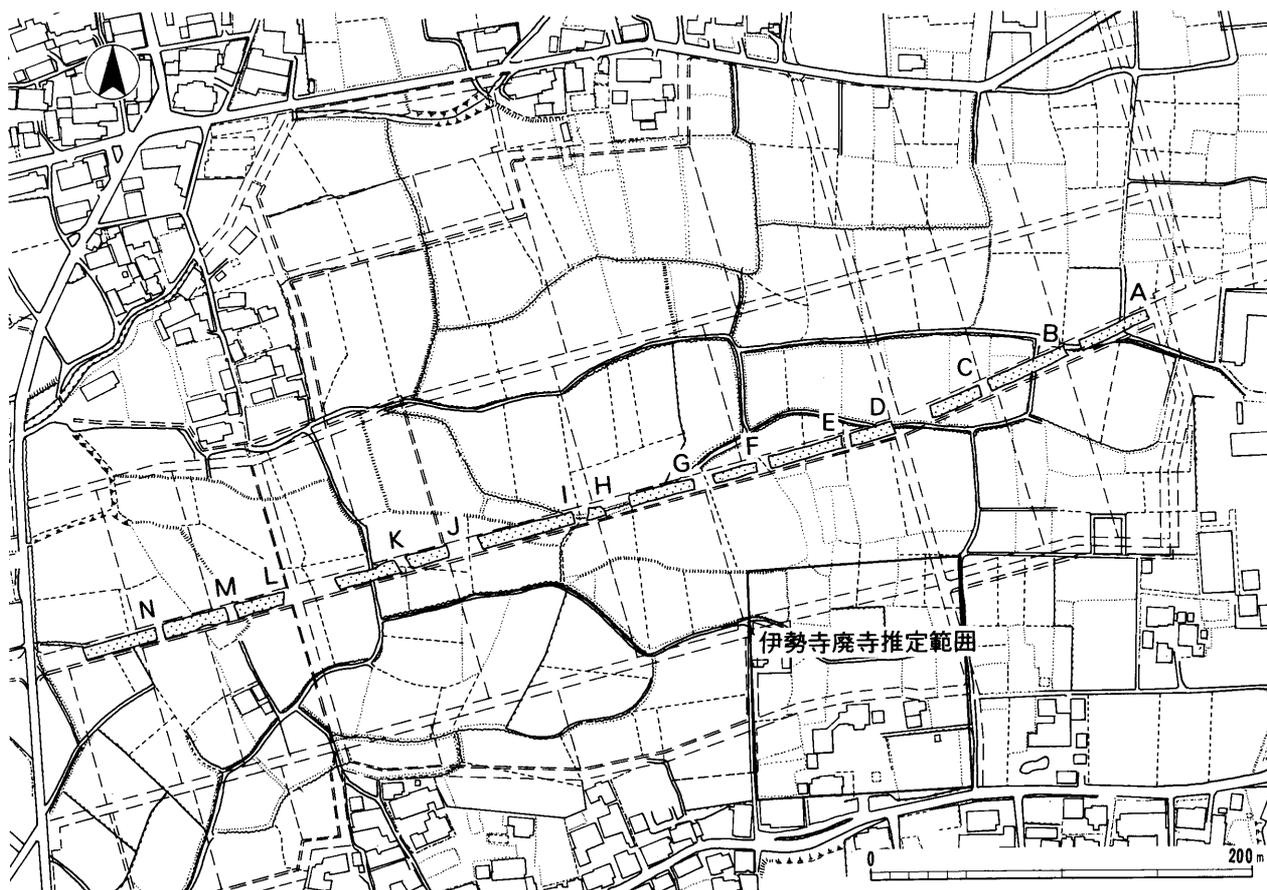
今年度までの調査成果としては、奈良時代前期創建の伊勢寺廃寺の寺域に関わると思われる大溝の確認を始め、奈良時代～平安時代初期頃を中心とする竪穴住居や掘立柱建物、井戸などがみつき、面積約500,000㎡といわれる伊勢寺遺跡の一端が明らかになってきた。

また遺物としても、多量の土器類や伊勢寺廃寺に使用された瓦磚類、土馬、斎串等の祭祀遺物、さらに特筆すべきものとして須彌山と思われる三彩陶器の出土は注目を引いた。

今年度の調査は、圃場整備後に残されていた東西に延びる農道部分についてのもので、総延長600m以上に及ぶものであった。

すでに水田の一筆ごとに用水のためのヒューム管が埋設されていたため、調査区全体を細かく14地区に分断させることになった。

調査は東方向から実施し、平成2年9月18日から開始し、同年12月18日に終了した。調査は表土および盛土部に関しては、重機にて掘削を行った。なお、調査区は調査の進行にあわせて東側部分よりA～Nの地区名を順次あてがっていった。また、調査範囲の実測については、調査終了時にヘリコプターによる航空測量を実施した。



第30図 調査位置図 (1 : 4000)

## 2 遺 構

今年度の伊勢寺遺跡の調査は、寺北地区と呼ばれる地区を中心とし、東からA～Nの14地区に分かれる。このうちA～D地区には土坑および柱穴などが密に認められたが、E～L地区までは包含層・遺構とも希薄であり、F地区で自然流路跡がみられるにすぎなかった。しかしM地区で縄文後期の自然流路および土坑、室町時代頃の井戸が、N地区で鎌倉時代頃の土坑などが検出された。

各地区を通じての層序からみた地形環境は、圃場整備時に改変・盛土されて旧地形をそのまま示していないが、A～D地区までは砂質の遺物包含層と遺構検出面となる砂礫を含んだ黒褐色土が広がりを見せているのに対して、E～L地区の大部分までは遺物をほとんど含まない茶褐色系の粘土層が厚く堆積している。その直下には淡黄灰色系のシルト質層がみられ、F地区ではこの層から遺物を多く出土させた自然流路を検出したが、これらの地区では低湿地の様相を示すものと思われる。

しかしL地区の一部からN地区にかけては状況が一変し、地山として褐色系の砂礫層または淡黄褐色の砂層が広がり、縄文後期以前に遡る旧河川の存在が判明した。(第30図)

### A地区の遺構 (第31図)

井戸状遺構1基・溝6条および柱穴群が多数検出された。

**井戸状遺構SE1** 径2.8mの円形の素掘りの井戸と思われるもので、湧水面に達した時点で壁面の崩落が始まったため完掘はできなかった。井戸枠等は発見されなかったが、廃棄時には一気に埋め戻されており、鎌倉時代頃の土器類が埋土中に含まれていた。

**溝SD1～6** いずれも狭長な調査区のためその性格は良く解らないが、SD6のみ中世であるが、他の溝は奈良時代～平安時代前期の遺物が出土している。特にSD3からは、瓦片と共に奈良時代中期頃の土師器が一括して出土した。

**柱穴群** ほぼ調査区全域にわたって小規模のピットが検出された。遺物を出土させるものもあったが、

掘立柱建物としてまとまるものは認められなかった。

### B地区の調査 (第31図)

全調査区の中なかでは最も遺構密度の高い地区で、土坑8基、溝4条のほか柱穴群を多数検出した。

**土坑SK1～8** すべて不定形の土坑で、奈良時代の遺物を含む。SK1からは比較的まとまって土器が出土した。

**溝SD1～4** SD3はB地区で検出されたSD6の延長と考えられる。他の溝はいずれも幅が狭く、調査区の中央付近で途切れている。遺物は少ないが奈良時代後期～平安時代前期頃のものと思われる。

**柱穴群** ほぼ調査区全域にみられるが、建物跡としてのまとまりはない。A地区に比較すると規模の大きいものが目立つ。

### C地区の調査 (第31図)

竪穴住居跡1棟、土坑2基、溝2条のほか、大小の規模の柱穴群が検出された。B地区に比べて遺構密度は薄くなっている。

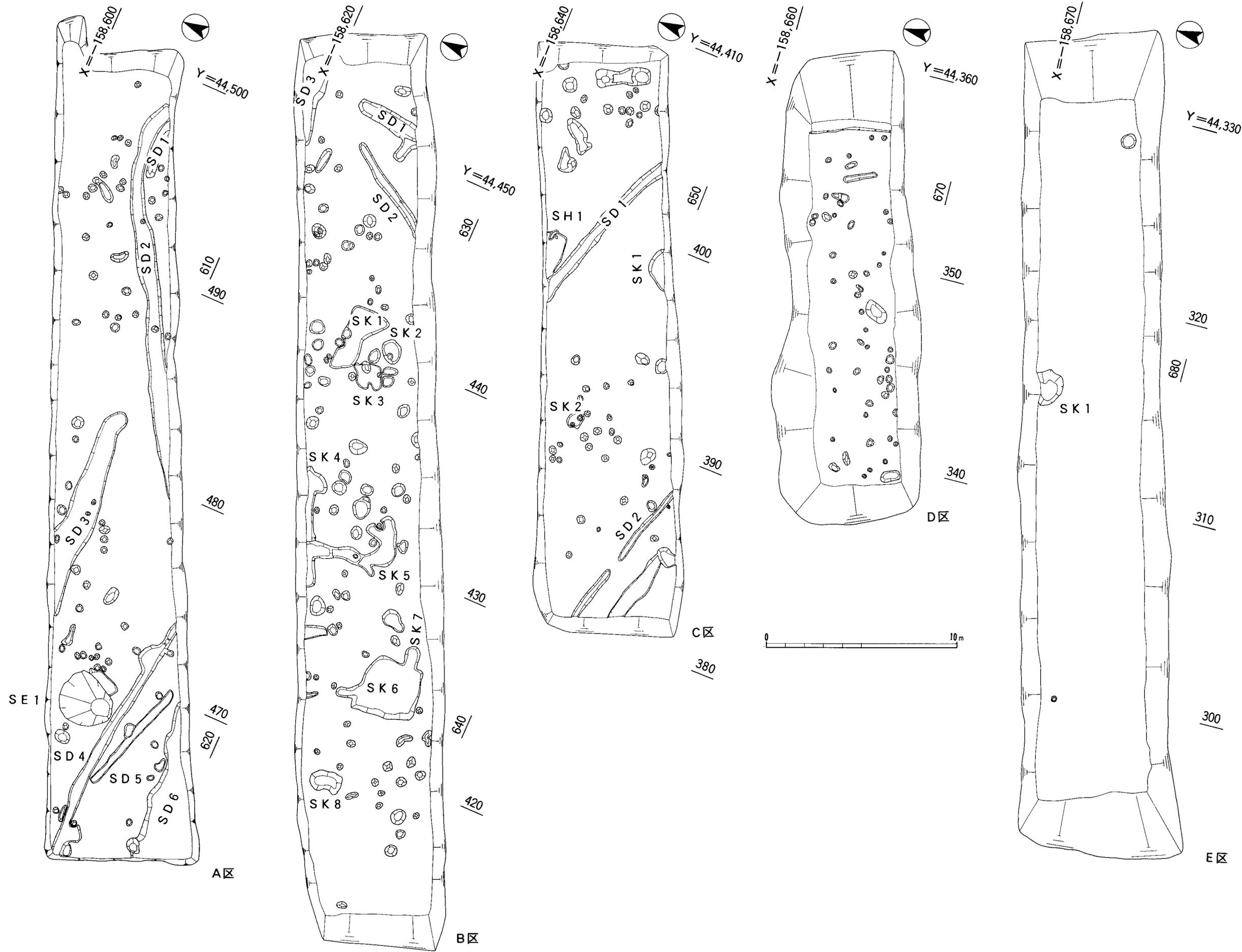
**竪穴住居跡SB1** 東南隅部分のみが検出され、大部分は調査区外へ続くものと思われる。検出面から床面までわずかな深さしか残存していなかったが、竈跡を確認することができた。

竈跡は中央に支柱石を据え、北半分のみが残っていたが、灰白色の粘土で壁面を構成しており、焚口部の両壁には平瓦を張り付けている。

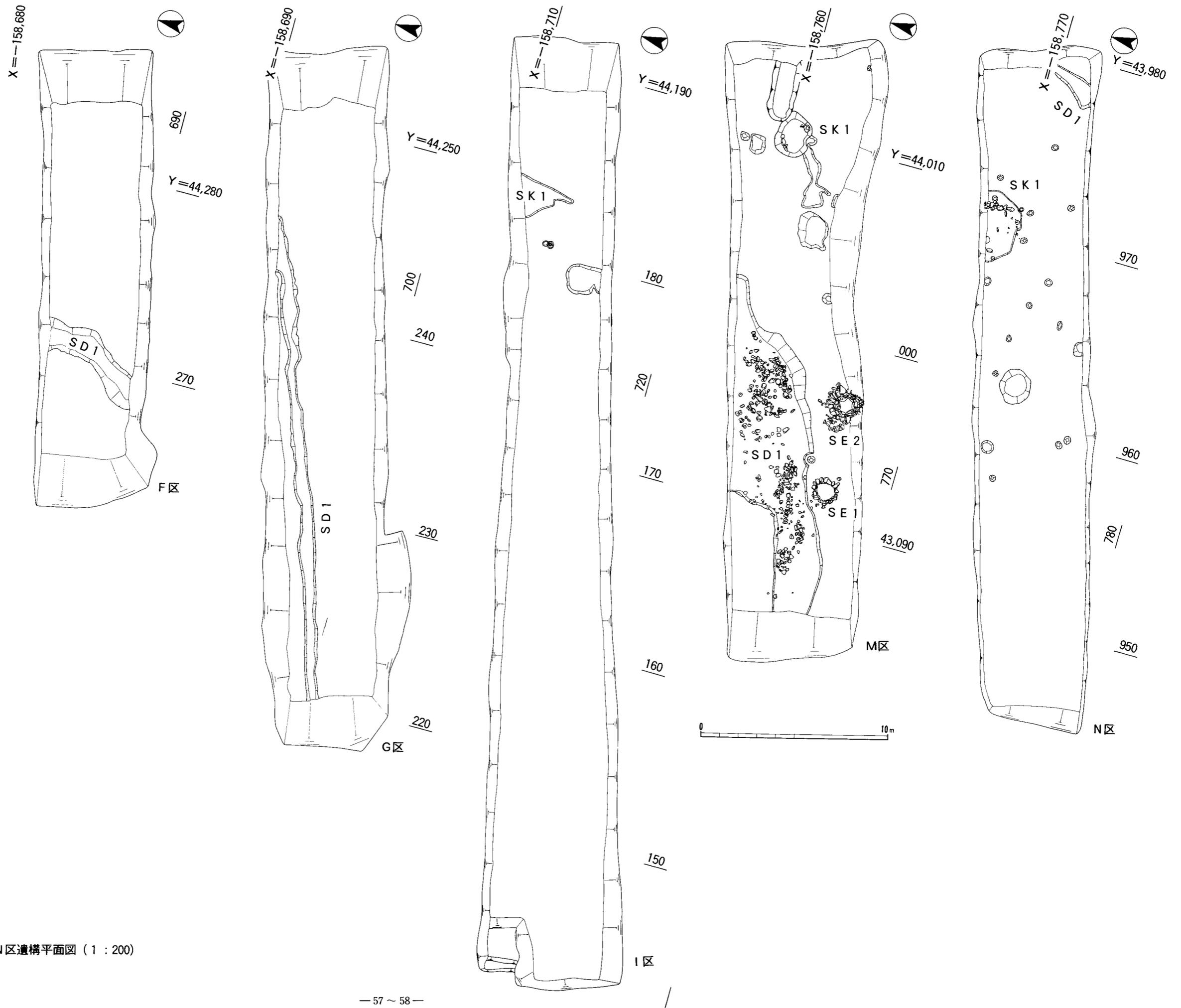
竪穴住居に伴う柱穴は検出されず、溝SD1に一部切られている。竈跡の周辺を中心に奈良時代末頃前後の遺物が出土している。

**土坑SK1・2** SK1は調査区内にその一部が検出されたものだが、SK2は規模の小さい不定形土坑で、遺物は小片にすぎないが平安時代前期頃の土師器が出土している。

**溝SD1・2** SD1・2とも、調査区に斜行して検出されたもので、SD1の方が溝幅が広く、埋土も明黄褐色の粗砂であり、一見して他の遺構埋土とは相違する。どちらの溝も遺物は少なく、時期比定が困難であるが、SD1はその埋土から中世のものである可能性がある。



第31図 A～E遺構平面図 (1 : 200)



第32図 F・G・I・M・N区遺構平面図 (1 : 200)

**柱穴群** 調査区の東寄りの部分と中央やや西寄りの部分に集中する。東寄りの一群の方が規模は大きい。遺物の出土させた柱穴はいずれも奈良時代頃のものと思われる。

**D地区の調査 (第31図)**

遺構は柱穴群のみが調査区全体に広がっているが建物跡としてまとまらず、遺物を出土させるものも無かった。

**E地区の調査 (第31図)**

遺構はきわめて希薄で、明黄褐色の砂礫を埋土とする土坑SK1の一部が検出されたのみである。

**F地区の調査 (第32図)**

遺構は調査区の中央よりやや西寄りで検出された溝SD1のみである。

**溝SD1** 調査区をやや斜めに横切る溝で、自然流路跡と考えられる。埋土は粗砂ないし細礫からなる下層と、暗灰色のシルト層からなる上層の2層に分かれるが、遺物は上層から多く出土した。遺物には時期幅はなく、短期間のうちに堆積したものと思われる。古墳時代終末期に比定される。

**G地区の調査 (第32図)**

調査区の北壁にはほぼ平行して圃場整備以前の現代溝がみられたが、その最下部に奈良時代から江戸時代までの遺物を含む溝SD1が検出された。他には

遺構は確認されなかった。

**I地区の調査 (第32図)**

調査区の東寄りに、わずかに奈良時代頃の遺物を出土させた不定形土坑SK1が検出されたが、他には遺構はみられなかった。

**M地区の調査 (第32図)**

L地区の西端より褐色あるいは灰色系の砂礫層が地山となり、微高地にさしかかる。検出された遺構は、井戸2基と土坑1基、溝状遺構1条である。

**井戸SE1** 調査区の西寄りで検出された石組井戸で、径1m、掘方でも径2.5mと小型のものである。井戸の深さは検出面から1.8mほどで底面に到達する。石組には人頭大の河原石を使用しており、最下段の石材のみやや大きい。

井戸は廃棄後に一気に埋められており、埋土中より室町時代前期頃の遺物が多量に出土した。

**井戸SE2** 調査区の南壁に接しているため井戸の南半の一部が調査区外となる。SE1同様石組の井戸であるが、径1.3m、掘方で径3.5mとSE1よりやや大きく、石組方法も底面に近くなるほど径が小さくなるという特徴をもち、SE1との相違点がみられる。石組にはやはり人頭大の石材を多用するが最下段のみ大型の石材を用いている。

埋土は井戸内に自然堆積した粘土層である下層と

地区	略面積(m <sup>2</sup> )	遺構の種類	主な出土遺物	備考
A	250	井戸状遺構1・溝6・柱穴群	土師器・須恵器・山茶碗・瓦器・陶器類・瓦	
B	250	土坑8・溝4・柱穴群	縄文土器・土師器・須恵器・山茶碗・陶磁器類・瓦	
C	170	竪穴住居1・土坑2・溝2・柱穴群	土師器・須恵器・山茶碗・陶器類・瓦	
D	90	柱穴群	縄文土器・土師器・山茶碗・瓦	
E	200	土坑1	土師器・山茶碗・瓦	
F	130	溝1	土師器・須恵器・山茶碗・瓦	
G	180	溝2・柱穴	土師器・須恵器・緑釉陶器・山茶碗・陶器類・青磁・瓦・石斧	
H	10			攪乱
I	240	土坑1	土師器・須恵器・瓦	
J	90		土師器・山茶碗・陶器類・天目茶碗・染付茶碗	
K	130		土師器・陶器類・製塩土器	
L	180		土師器・山茶碗	
M	190	井戸2・土坑1・溝1・柱穴	縄文土器・土師器・須恵器・山茶碗・瓦器・陶器類・青磁・瓦・石器・木簡・曲物	
N	170	土坑2・溝1・柱穴群	縄文土器・土師器・須恵器・山茶碗・陶器類・瓦	

第23表 調査区一覧表

廃棄後に一気に埋められたと思われる上層に分かれ、上層からは室町時代頃を上限とする土器が若干出土し、下層からは曲物の蓋板や呪符木簡などの木製品が出土した。

**土坑SK1** 不定形の土坑で、北側の底面に石列を配していた。出土遺物には縄文土器もみられたが、中世に至るまでのものが混在しており時期比定が困難である。

**溝状遺構SD1** 調査区の西壁から北壁へ大きく弧を描いて続く一時的な自然流路と考えられるが、溝内の大部分には大小の礫が意図的に持ち込まれている。SD1自体は、西壁近くでは浅く幅の狭いものであったが、次第にその幅を大きくしている。

埋土中には縄文早期の押型文土器も微量みられたが、縄文時代後期頃を中心とする土器やサヌカイト片が多量に出土した。

**N地区の調査**

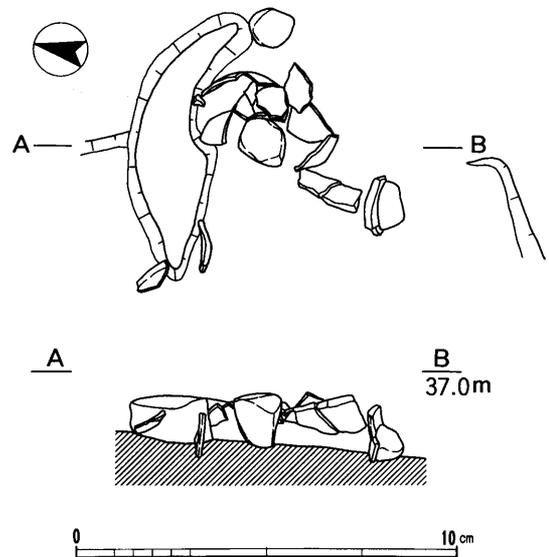
土坑2基と溝1条および調査区の中央付近を中心に柱穴群が検出された。遺構は砂礫の地山直上から検出した。地形的には全調査区のうちで最も高所に位置する。

**土坑SK1** 一部が調査区外となるが、土坑内の東寄りに2～3段からなる石組がみられた。埋土内から中世の遺物が若干出土している。

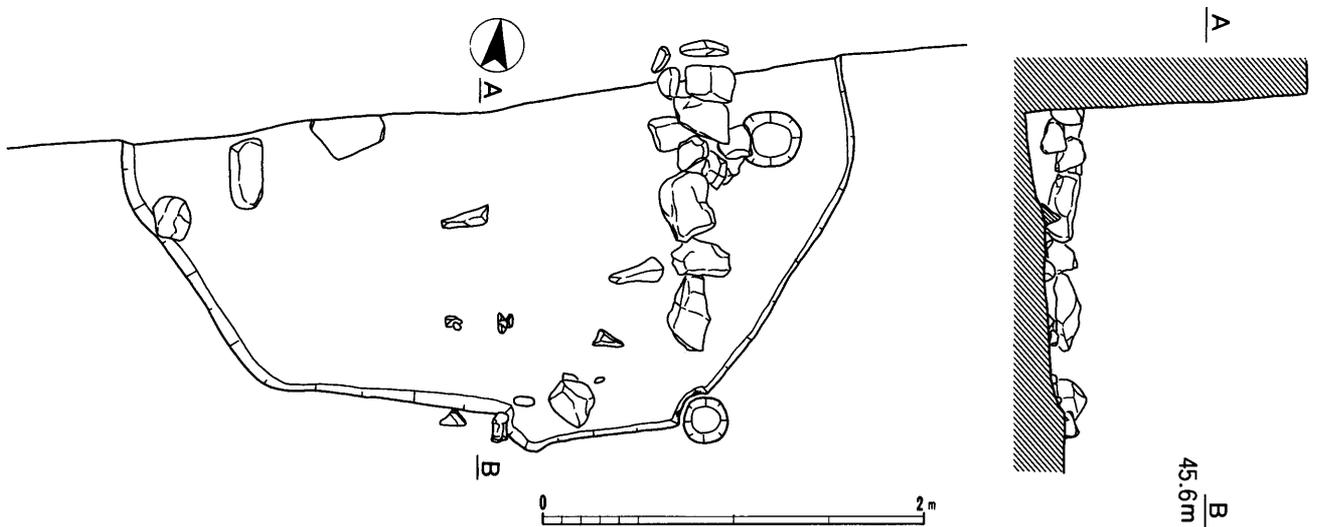
**土坑SK2** 調査区の中央付近にみられた円形土坑で、山茶碗および土師器鍋を中心とした鎌倉時代の遺物が埋土中に一括して多量に含まれていたが、

山茶碗のうちの1点を除きすべて破片となって出土した。

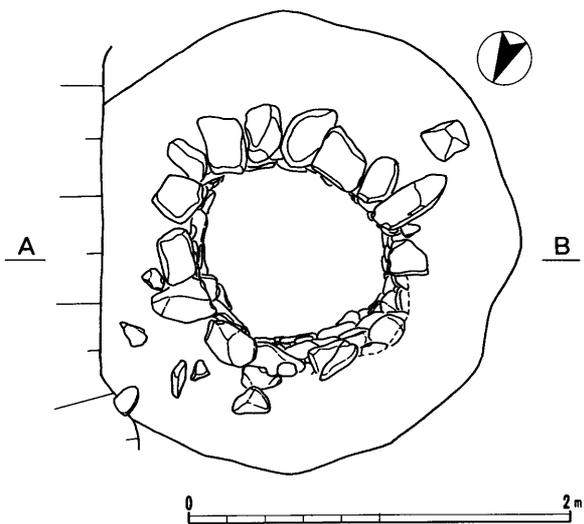
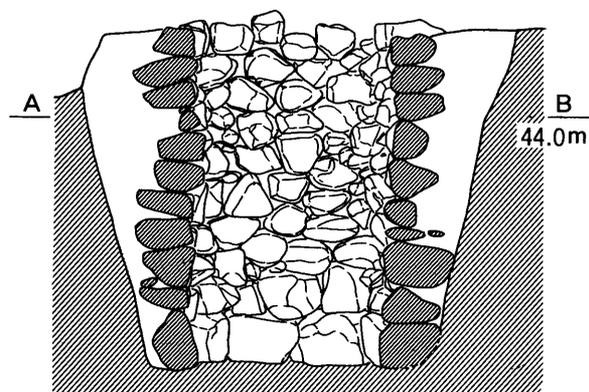
**溝SD1** 調査区の南東隅を斜めに横切って延びる溝で、わずかに中世期の遺物が出土している。



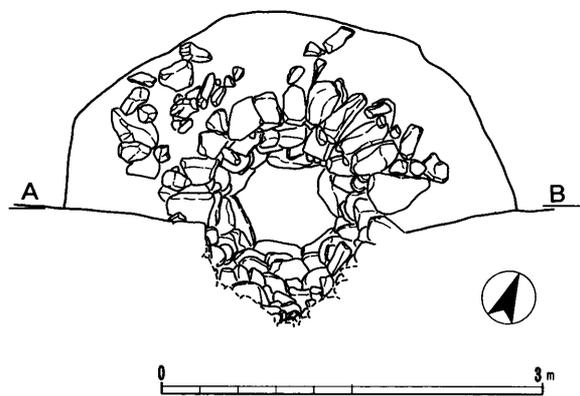
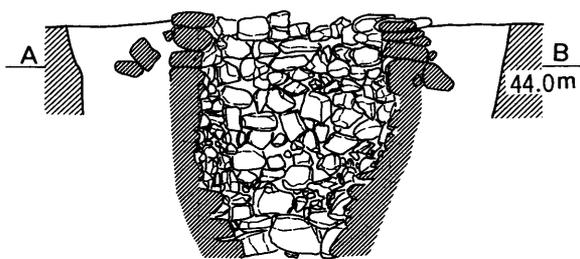
第33図 C区竪穴住居SB1竈跡実測図(1:20)



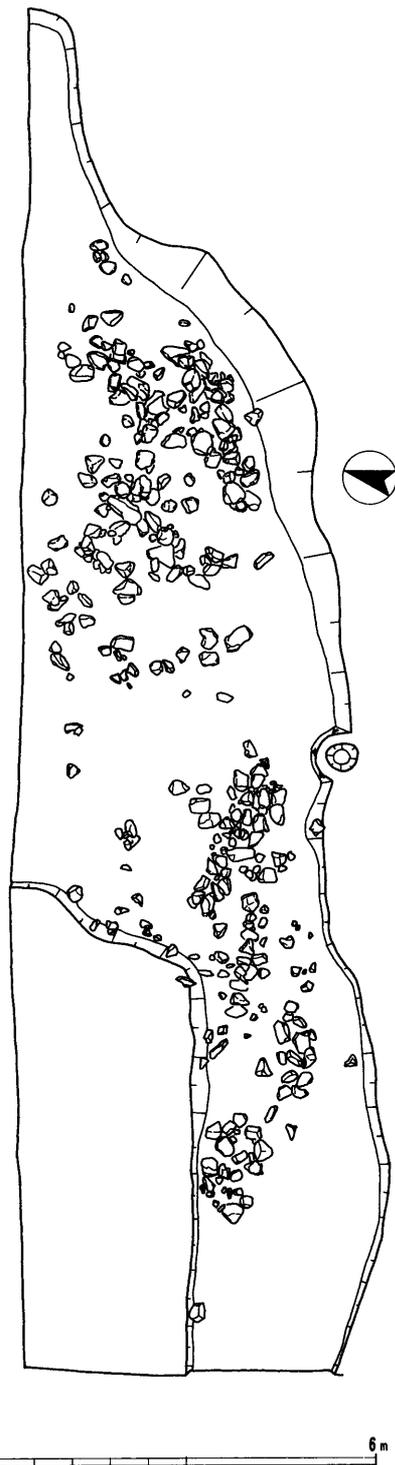
第34図 N区土坑SK1遺構実測図(1:40)



第35图 M区井戸S E 1 遺構実測図 (1 : 40)



第36图 M区井戸S E 2 遺構実測図 (1 : 60)



第37图 M区溝状遺構S D 1 遺構実測図 (1 : 20)

### 3. 遺物

#### A区溝SD3 (第38図1~6)

A区SD3からは土師器杯・皿・甕、須恵器杯蓋、丸瓦などが出土し、8世紀後半頃に相当する。

土師器杯(3)は外反して開く口縁部をもち、不明瞭だが低部内面に暗文、口縁部外面にヘラミガキが施されている可能性をもつ。底部外面は未調整のa手法<sup>①</sup>である。

土師器皿(1・2)は、底部と口縁部の境が明瞭なもの(2)と不明瞭なもの(1)があり、前者は口縁端部に内傾した面をもち、口縁部外面にはヘラミガキ、内面には渦巻状の粗い暗文が施される。体部外面は指頭圧痕をナデ調整している。

土師器甕(4)は口縁部が強く外反するが頸部の器壁が厚いため鈍重な感じがする。体部外面はハケメ調整される。

須恵器杯蓋(5)は、天井部からなだらかに開き、口縁部に至る。端部は折り曲げ断面三角形となる。

#### A区井戸状遺構SE1 (第38図6~8)

A区SE1からは土師器皿・鍋、山茶碗・皿、瓦器碗・青磁碗などが出土した。

このうち山茶碗(7)および皿(6)は、藤沢編年<sup>②</sup>のⅢ-6に比定されるものと思われ、土師器鍋(8)もこれと矛盾するものでない。

#### B区包含層 (第38図9・第40図63)

B区は包含層から縄文~江戸時代に至るまでの幅広い時期の遺物が多量に出土した。このうち軒平瓦(第40図63)は、外区に珠文を巡らし、内区に飛雲文を中心線より対称に3単位づつ施す。また土師器杯(9)は、底部と口縁部の境の明瞭なもので、外面にヘラミガキ、内面に暗文をもち、底部外面は不徹底なヘラケズリ調整をするb手法からなる。内外面にそれぞれ線刻を施す。

#### B区溝SD1 (第38図10)

B区SK1からは土師器杯・甕、平瓦などが出土した。(10)は土師器杯で、底部外面はa手法からなり、ヘラミガキ・暗文は認められない。8世紀中頃に相当する。

#### B区土坑SK1 (第38図11~13)

B区SK1からは土師器杯・皿・碗・甕などが出土し、8世紀中頃に比定される。

土師器杯(11)は、底部と口縁部の境が明瞭で、ヘラミガキ・暗文は認められない。底部外面はa手法である。

土師器皿(12)は、底部外面に墨書をもつが、文字として判読不明である。a手法であるが軽くナデ調整を施す。

土師器甕(13)は、口縁部が強く外反するもので、体部外面にタテ方向のハケメを、内面にはヨコ方向のハケメを施す。

#### C区竪穴住居SB1 (第38図14・15)

C区SB1からは土師器杯・皿・碗・甕などが出土したほか、竈の施設として平瓦・丸瓦が利用されていた。出土した遺物には時期差がみられ、(14)より8世紀末~9世紀初頭頃に位置づけられる。

土師器杯(14)は、口縁部の下半が外半して開き、上半でやや内弯する特徴をもち、斎宮跡SK1291<sup>③</sup>以降に出現するタイプとされる。底部外面は未調整である。

土師器皿(15)は、外面にヘラミガキ、内面に暗文をもつもので、(14)より器壁が厚く底部外面はナデ調整されている。

#### F区溝SD1 (第38図16~35)

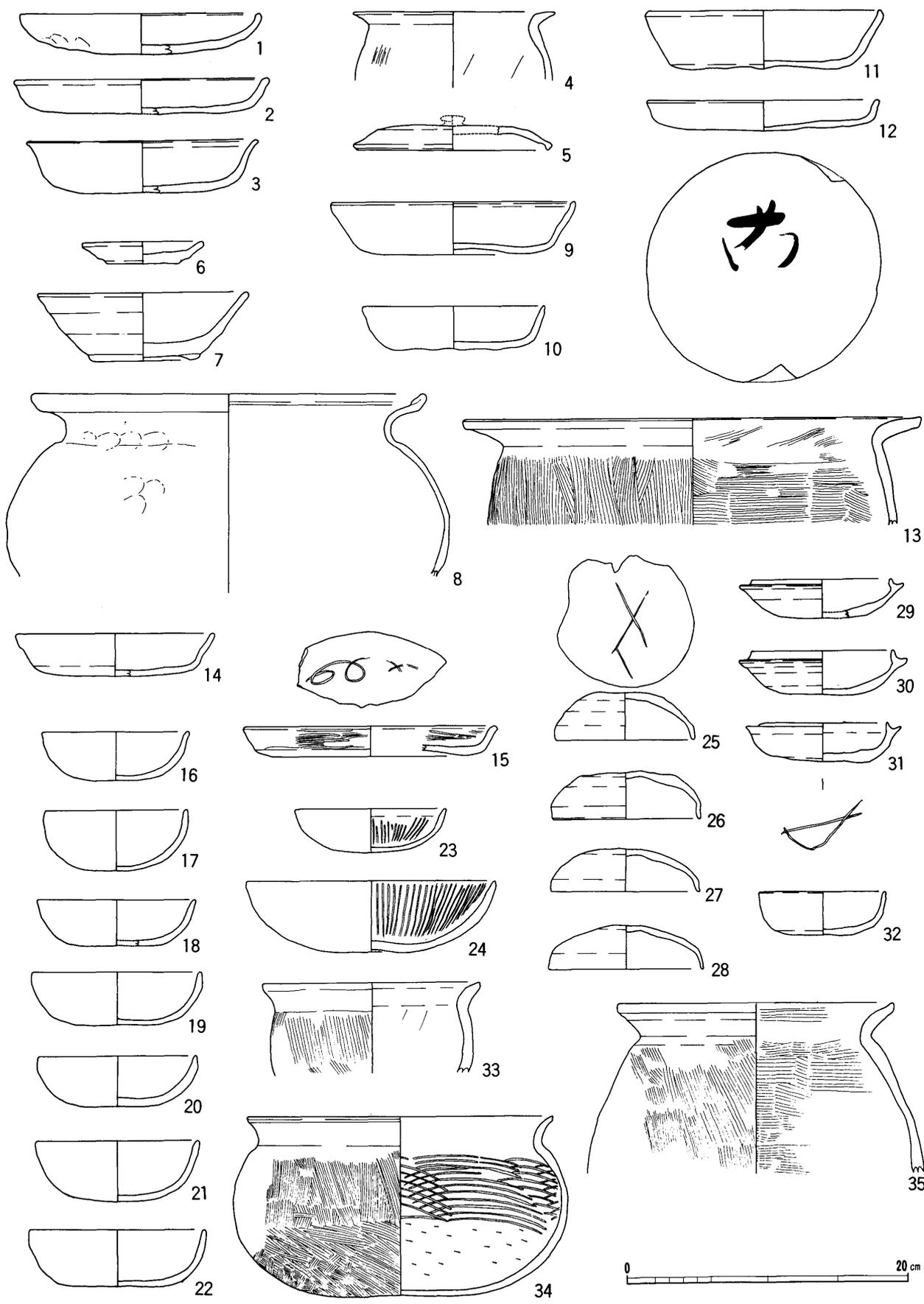
F区SD1からは土師器杯・碗・甕・鍋、須恵器杯蓋・杯身・甕などが出土した。須恵器は陶邑編年<sup>④</sup>のTK217に比定できる。

土師器杯(23・24)は、小型のもの(23)と大型のもの(24)があり、ともに橙褐色を呈し、内面に放射状の暗文をもつ。

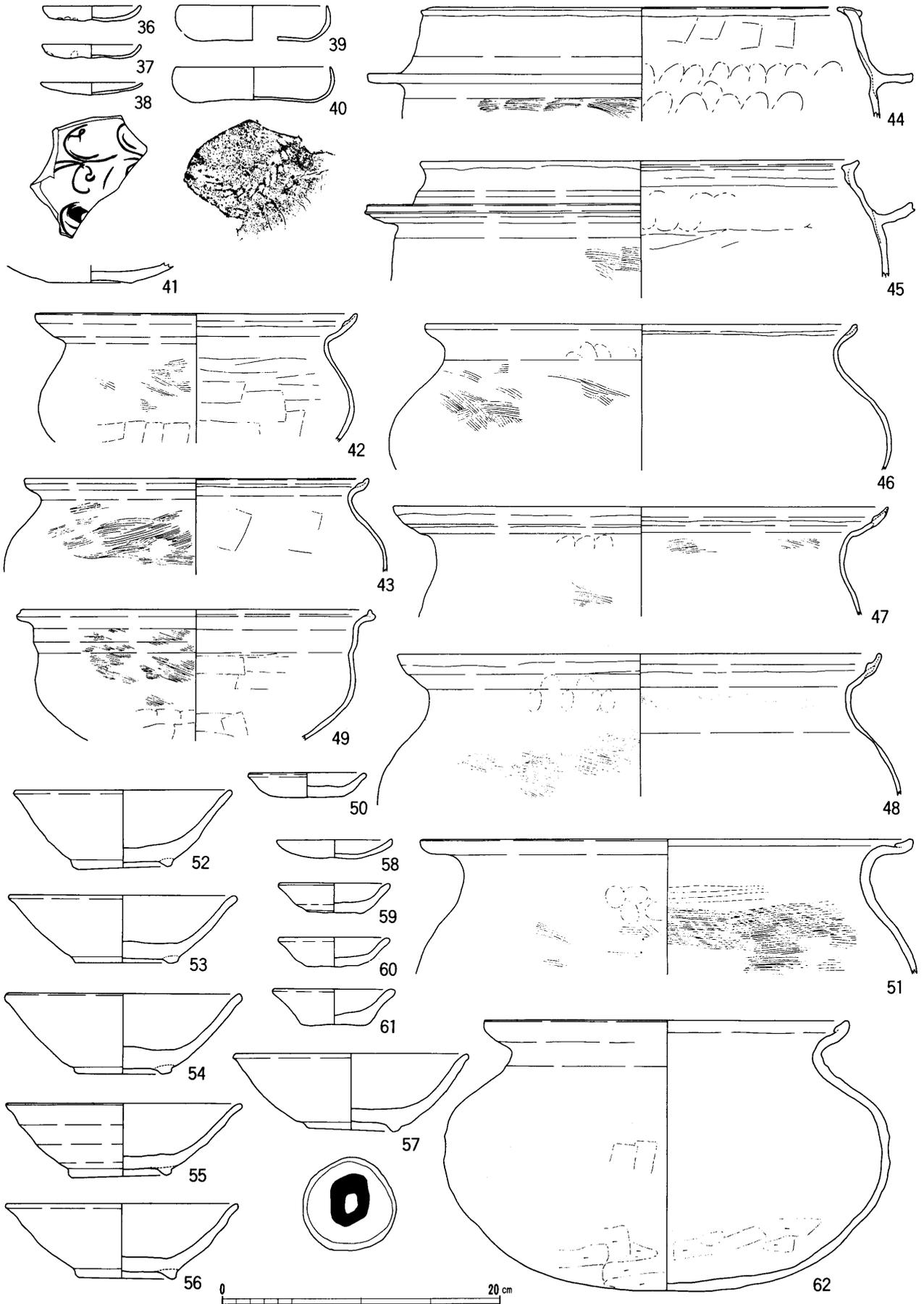
土師器碗(16~22)は、従来より在地型の碗とされたもので、乳褐色の色調となりしばしば巻き上げ痕を残す。法量は近似するが一定の規格はない。

土師器甕(33・35)は、器壁の厚い小型品(33)とやや長胴気味となる(35)とがある。

土師器鍋(34)は、偏平な体部と外反する口縁部からなるもので、外面に細かいハケメを、内面上半に粗いハケメ、下半にヘラケズリを施している。



第38図 遺物実測図(1) (1:4)



第39図 遺物実測図(2) (1:4)

須恵器杯蓋（25～28）は、いずれも天井部からならだらかに開口縁部に至るもので、天井部はヘラ切りのち未調整かナデを施す。

須恵器杯身（29～32）は、（32）のみ平坦な底部と上方に開く口縁部からなるもので、他は受部と短く内傾する立ち上がりをもつものである。底部はヘラ切りのち未調整かナデを施す。

#### M区井戸SE1（第39図36～48）

M区SE1からは土師器皿・鍋、陶器類、青磁皿などが出土した。14世紀代に相当する。

土師器小皿（36～38）は口径7cm強、器高1cmほどの扁平な皿で、口縁部の歪みも目立つ。

土師器皿（39・40）は、内湾して直上に立ち上がるやや深い皿で、器壁が薄く、乳灰色の独特の色調をもつ特徴的なものである。

土師器鍋（42・43・46～48）のうち、（42）は井戸掘方内より出土したもので、遺構の下限を示すものである。いずれもやや扁平な体部に大きく外反する口縁部からなり、端部は折り返すかあるいは内外面に粘土を継ぎ足して肥厚させた後、強めのヨコナデを施す。器壁は比較的薄く、体部外面は上半部をハケメ調整、下半部をヘラケズリする。

土師器羽釜（44・45）は、横位あるいはやや斜上方につく、しっかりした鏝をもち、内傾する口縁部からなるもので、体部外面はハケメ調整される。

青磁皿（41）は底部付近の破片だが、龍泉窯系と思われる。内面に花文が施されている。

#### M区井戸SE2（第39図49）

M区SE2からは、土師器皿・鍋、陶器類、青磁皿などが出土している。15世紀後半～16世紀前半頃に比定される。

土師器鍋（49）は、その形態からいわゆる鉄鍋の模倣と考えられるもので、勢和町若宮遺跡<sup>⑧</sup>出土のも

のに類例がある。外面上半はハケメを施し、下半はヘラケズリを施す。

呪符木簡（第41図）は、出土当初「蘇民將」と「来」の一部のみが墨痕として残っており、蘇民将来札であることがわかったが現在は判読不明である。

この木簡は長さ22cm、幅3.2cmほどで、上端部には両側に切り込みを入れることによって紐等で吊るされるように作られている。

裏面にも墨書された可能性があるが判読することができない。

#### N区土坑SK1（第39図50・51）

N区SK1からは土師器鍋および山茶碗・皿などが出土している。13世紀後半頃に比定できる。

土師器鍋（51）は、大きく外反して折り返す口縁部をもつ。端部は折り返した後、内面に強めのヨコナデを施す。内外面とも体部にハケメを施す。

山皿（50）は、平坦な底部と短く外上方に開く口縁部からなる。

#### N区土坑SK2（第39図52～62）

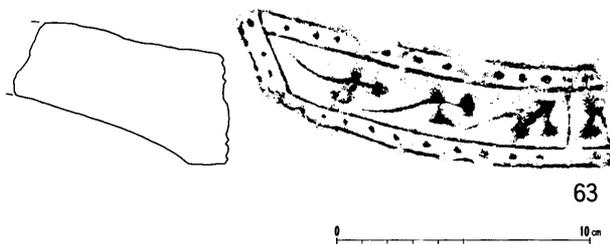
N区SK2からは土師器皿・鍋、山茶碗・皿・鉢・陶器瓶・青磁碗などが多量に出土している。山茶碗・皿はⅢ-6に相当するものであり、13世紀前半と考えられる。

土師器皿（58）は、小型で扁平な器形で、全体的に不整形なものである。

土師器鍋（62）は、内外面とも底部近くをヘラケズリし、体部上半はナデ調整を施す。外面全体に煤が付着し、底部内面は茶褐色に変色しており、煮炊きの痕跡を留める。

山茶碗（52～57）は、いずれもやや潰れた高台をもち、外上方に開くもので、口縁部が若干端部近くで外反する。

山皿（59～61）は、平坦な底部と短く外上方に開く口縁部からなるもので、無高台である。端部はまるくおさめている。



第40図 遺物実測図（3）（1：3）

## 4. 結 語

昭和62年度から開始された県営圃場整備事業に伴う伊勢寺遺跡の調査も今回で最終年度を迎え、伊勢寺廃寺を中心とした奈良時代～平安時代の当地域の遺跡の様相が解明されつつある。

今年度の調査では調査区全体としては遺構密度が薄いものの、主として東寄りのA～C地区で奈良時代～平安時代前期の遺構が、西寄りのM・N地区で縄文時代後期および鎌倉時代～室町時代の遺構が検出された。

### 1. 遺構について

#### (1) 縄文時代の集石溝状遺構について

M地区で検出された溝状遺構SD1は、一時的な自然流路跡と考えられるが、人頭大ほどの大礫による集石がみられた。これらは自然の営力による運搬作用の結果とは考えにくく、人為的に持ち込まれた可能性も強い。ただ石材自体は地山中に普遍的に認められるものである。

石材の規格的な配列を認めることはできないが、後期を中心とした縄文土器がテンバコ10箱余りほど出土している。

#### (2) 飛鳥時代の遺構について

F地区で検出された溝SD1は、小規模な自然流路跡であり、埋土中より完形品を含む土師器および須恵器が多量に出土した。伊勢寺廃寺創建前の遺物群であり、寺院造営以前の遺構のあり方が今後問題となろう。

#### (3) 奈良・平安時代の遺構について

前年度までの調査では、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物や竪穴住居跡を多数確認しているが、今年度は遺構の存在する箇所が限定されることや調査区の幅が狭いことから、わずかに竪穴住居跡が1基確認されたのみで、掘立柱建物と認定できるものはなかった。

#### (4) 鎌倉・室町時代の遺構

当時期の遺構としては、井戸および井戸状遺構、土坑、溝等がA・B・M・N地区で確認された。

このうちA地区SE1については、湧水が激しく完掘できなかったが、素掘りの井戸と考えられるのに対し、M地区で確認されたSE1およびSE2はともに石組みの井戸であった。M地区の2基の井戸は近接するが、出土遺物からSE1が廃棄された後にSE2が築かれたものと考えられる。

また、SE2には有機質の遺物が残っており、木簡や曲物の底板などが出土した。木簡は墨書の痕跡が認められるものの、その判読はできなかった。

### 2. 遺物について

#### (1) M地区溝SD1出土の土器

M地区のSD1から出土した縄文後期の土器は、型式差がみられ、一括性には乏しいが中津式～広瀬土坑40段階<sup>⑥</sup>までのものが圧倒的であり、その中心は福田KⅡ式にあると考えられる。今回の報告では図示できなかったが、詳細は別の機会に譲りたい。

#### (2) F地区溝SD1出土の土器

F地区のSD1出土の土器は、自然流路跡という性格ではあるが一括性の強い遺物といえる。須恵器は陶邑編年のTK217型式に比定できる。

土師器には、内面に放射状の暗文を有するものがある。これは他の在地的な碗類に比べ、胎土が精緻で、燈褐色の色調をもち、一見して畿内的な暗文土師器に近い感がある。しかし、外面のヘラミガキが顕著でないことや口縁端部の形態、内面見込み部の暗文の欠如など、異質な点も多く、同一視ができないが、法量指数が30前後であることなどからあえていうならば、飛鳥Ⅱ期<sup>⑦</sup>に相当すると考えられる。

これらの遺物の示す時期は、7世紀前葉～中葉にかけてのものである。伊勢地域においては群集墳の盛行期にあたり、従来須恵器に関しては資料的に恵まれていたが、土師器特に杯類との併行関係は十分知られていなかった。従って、今回の遺物は、当地域における示準的な資料として評価できるのではないと思われる。

#### (3) 鎌倉・室町期の井戸出土の遺物

M地区井戸SE1およびN地区土坑SK2からは、比較的まとまった量の遺物が出土した。

M地区SE1では、土師器皿や鍋・羽釜および青磁椀・皿、陶器折縁皿・壺甕類などが出土しており、山茶椀は小片が含まれるのみであった。

SE1の埋土中から出土した遺物は、若干の混入品を除くと一括投棄されたものと考えられ、しかも掘方から出土した遺物の間には明確な時期差をもたず、この井戸が比較的短期間で破棄された可能性が強い。鎌倉時代末期から室町時代初頭頃の土器群として位置づけられるものである。

特筆すべき遺物として、M地区SE2から蘇民将来札とみられる呪符が出土した。「蘇民将来」は、『備後国風土記逸文』などで登場し、「蘇民将来子孫也」と書いた札によって難を逃れたという逸話から、中世には除災招福のため蘇民将来札が流行していた。

三重県内では、伊勢市周辺や志摩地域に、現在も「蘇民将来子孫門」と墨書した木札をつけた注連飾りを通年、玄関上に飾り付けることから、蘇民将来をめぐる信仰が盛んであった地域である。

県内では、他に四日市市城東町の赤堀城跡より出土例が知られている。

一方、N地区土坑SK2からは、藤沢氏の編年によるⅢ段階6型式の山茶椀を伴う土器が一括出土し、土師器鍋との共伴関係が補強された。

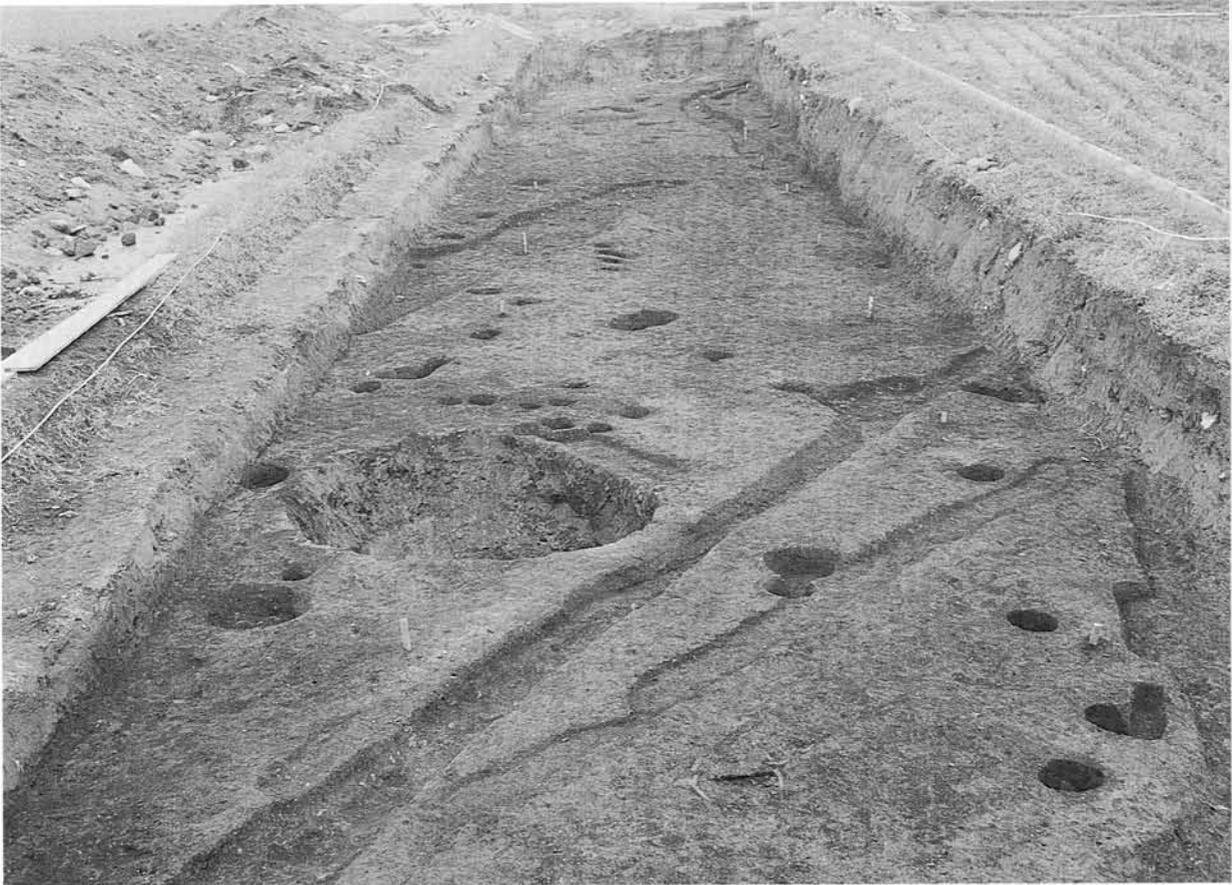
### 3. おわりに

今回の伊勢寺遺跡の調査は、遺構密度こそ希薄ではあったが、一括性の高い遺物の出土が数カ所で認められたことは大きな成果といえよう。またM地区で出土した後期を中心とする縄文土器に関しては、その報告を別の機会にもちたい。

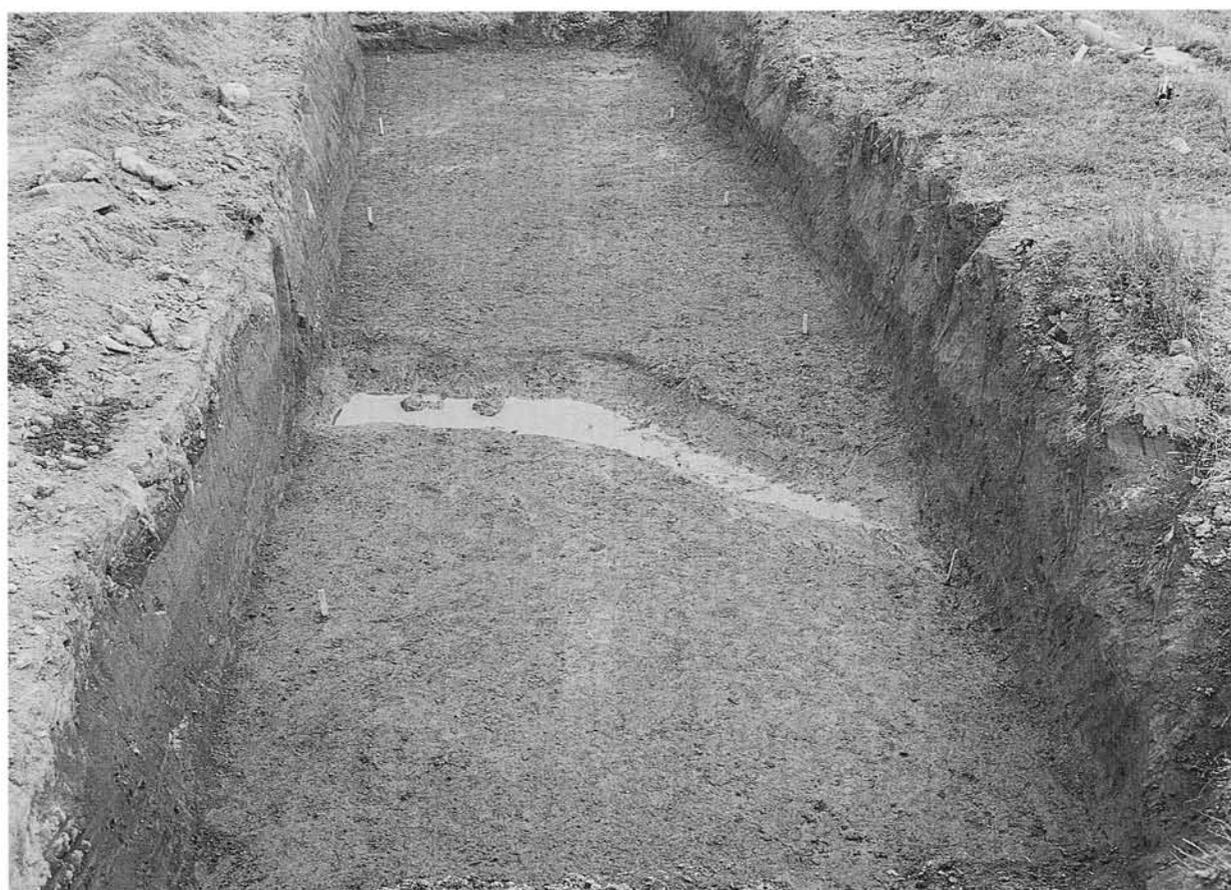
#### <註>

- ① 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅱ』1962
- ② 藤沢良祐「瀬戸古窯址群」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館 1985
- ③ 三重県斎宮跡調査事務所「斎宮跡の土師器」『斎宮跡調査事務所年報1984』1985
- ④ 田辺昭三ほか『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ 1966
- ⑤ 伊藤裕偉「若宮遺跡」『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1989
- ⑥ 千葉豊「縁帯文系土器群の成立と展開—西日本縄文後期前半期の地域相—」『史林』72—6 1989
- ⑦ 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』1977



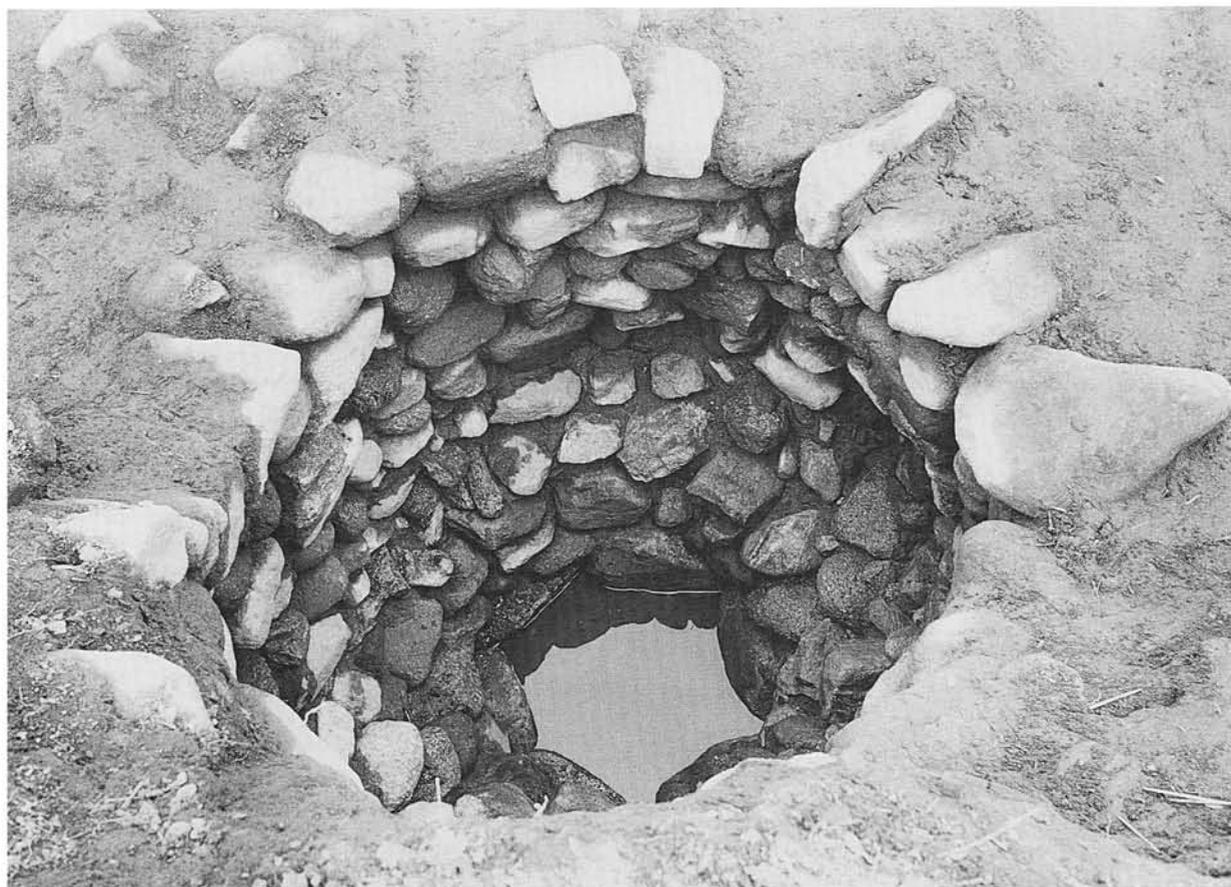
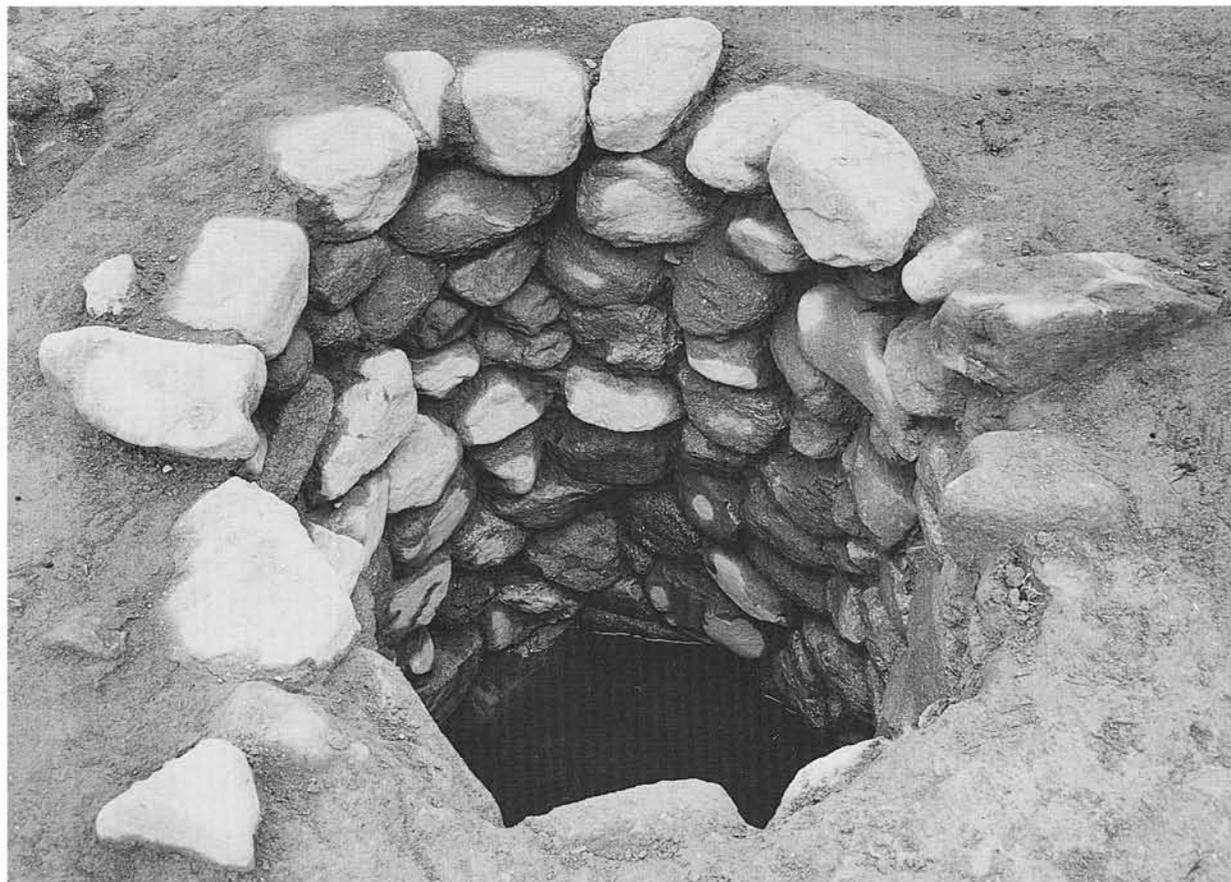


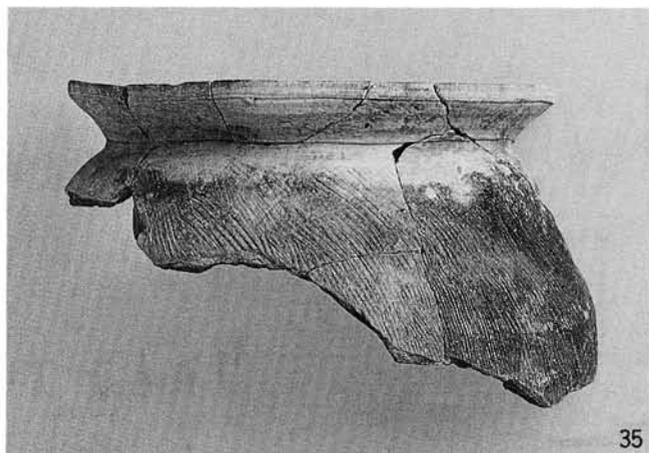
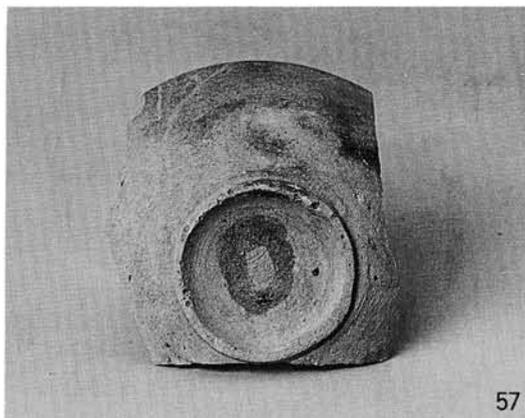
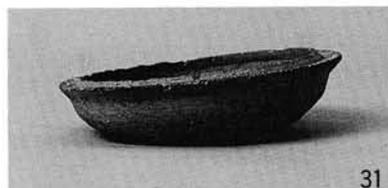
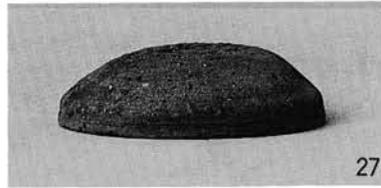


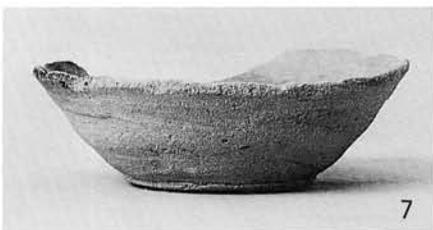
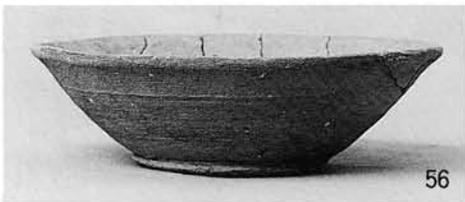
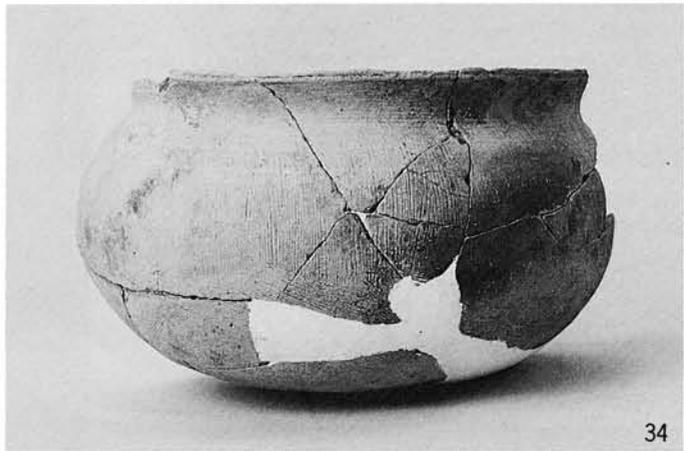


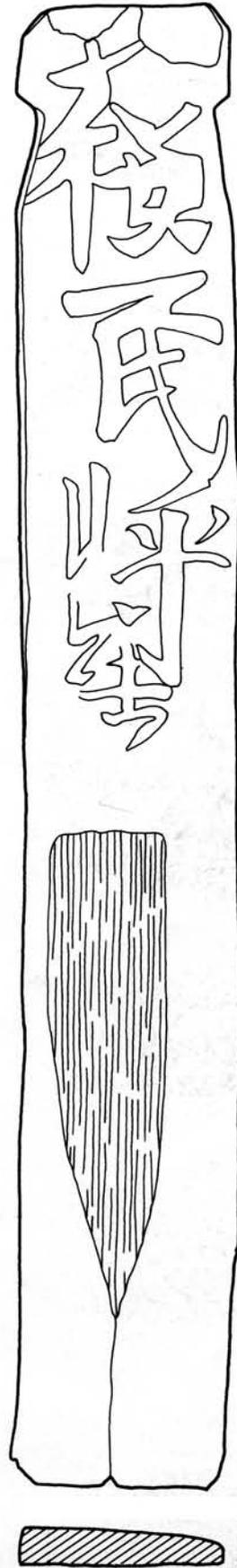
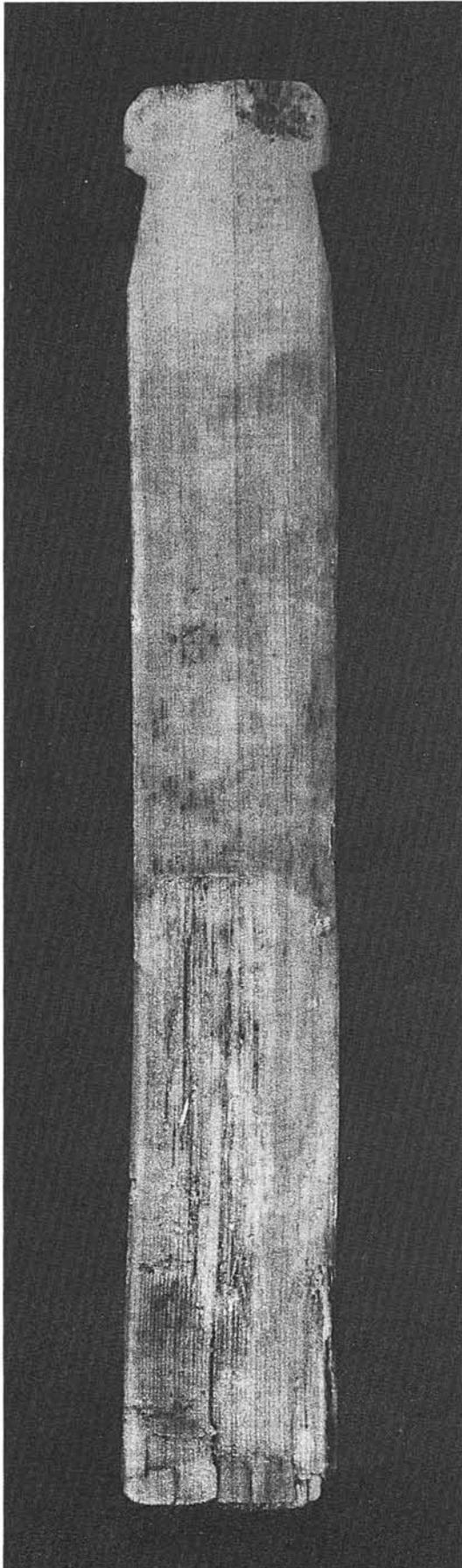












64

第41图 M区井戸SE2下層出土呪符(1:1)

平成 3(1991)年 3月に刊行されたものをもとに  
平成 18(2006)年 12月にデジタル化しました。

---

三重県埋蔵文化財調査報告 94-2

平成 2 年度農業基盤整備事業地域  
**埋蔵文化財発掘調査報告**

— 第 2 分冊 —

1991年 3 月

編 集 三 重 県 教 育 委 員 会  
発 行 三 重 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー  
印 刷 光 出 版 印 刷 株 式 会 社

---